

五七 人の命を滅す爲に來ず惟これを救ふ爲あり遂に他の郷に往り○五七 路を行
 五八 どき或人イエスに曰ける主よ何處に往たまふとも我從ん 五八 イエス彼
 五九 に曰ける狐の穴あり天空は鳥の巢あり然ども人れ子の枕する所なし 五九
 又ある一人に曰ける我に從へ彼いひける主よ先ゆきて父を葬る事を
 六〇 我に容せ 六〇 イエス曰ける死たる者に其死し者を葬らせ爾の往て神に國
 六二 を宣よ 六二 又ある一人曰ける主よ爾に從ん先ゆきて家人に別を告ると
 六三 を容せ 六三 イエス曰ける手を犁に著て後を顧る者の神の國に當ざる者也
 六四 此後主また七十人を立て之を兩個づゝに分ち自ら至んとする諸邑
 六五 諸地へ前を遣さんとして 彼等曰ける収稼の多く工人の少し故あろれ
 稼主も工人を収稼所を遣んことを求べし 三 往われ爾曹を遣す之羔を狼の
 なかへ入るが如し 四 囊また旅袋履をも携こと勿れ途めて人へ問候をもす
 る勿れ 五 人の家へ入べ先其家は安全あらん事を求へ 六 若こゝへ安全れ子
 六五 六四 六三 六二 六〇 五九 五七

七 小歸べし 七 其家へ居りて供る所れもれ之之を飲食せよ蓋工人は其工錢
 八 を獲の宜なればなり家より家へ移ることを爲され 八 邑へ入ん接る者わ
 九 らば其あんならば前へ供る者を食せよ 九 邑中なる病れ者を醫せ亦衆人
 十 小神に國の爾曹へ近けりといふ 十 もし邑へ入ん接る者なくば獨り出て曰
 十一 我儕へ沾たる爾が邑は塵の爾曹へ對て拂ん然ども神に國は近けるを知
 十二 りわき爾曹へ告ん其日いたらばパドムに刑罰の此邑よりも却て易かるべ
 十三 し 十三 又禍なる哉コラジンよ噫禍ある哉ベテサイダよ爾曹は中へ行し異
 十四 能を若ツロとシドンへ行しならば彼等之早く麻をき灰を蒙り坐して悔改
 十五 しあるべし 十四 審判にツロとシドンに刑罰の爾曹よりも却て易からん 十五
 十六 已お天おまで擧らきたるカペナウンよ又陰府に落さるべし 十六 爾曹も聽者
 十七 之我に聽かり爾曹を棄る者之我を棄る者あり我を棄る者之我を遣し者
 十八 棄る者あり 十七 七十人喜び返りて曰ける主よ惡鬼さへも爾は名に因て我
 十九 儕へ服せり 十八 イエス曰けるわき電は如くサタンの天より隕るを見し 十九

四一 意ざるか彼に命じて我を助しめよ 四二 イエス答て曰けるハマルタよマルタ
 四二 よ爾多端により思慮ひて心勞せり 然ど無て叶ふまじき者ハ一か
 リマリヤの既に善業を撰たり此は彼より奪べからざる者なり

二 イエス某所にて祈禱しけるに畢しとき一人の弟子いひけるハ主
 よヨハ子其弟子に教し如く我儕にも禱ることを教たまへ 二 イエス曰ける
 ハ祈る時は斯いふべし天に在す我儕の父よ願くは聖名を尊崇させ給へ爾
 國を臨らせ給へ爾旨の天に成ぶとく地にも成せ給へ 三 我儕の日用の糧を
 毎日に與たまへ 四 我儕に罪を犯す者を凡て免せば我儕の罪をも免し給へ
 我儕を試探に遇せず惡より拯出し給へ 五 また彼等に曰けるハ爾曹の中も
 し或人夜半に其友へ往て友よ我が朋輩旅より來しに供べき物なきゆゑ三
 のパンを借よと曰んに 七 内に居もの答て我を煩はす勿き既や門閉むを
 と共に兒曹も牀に在り起て予ること能ずといふ者あらん乎 八 我あんぢら
 に告ん其友なるにより起て予ざれ雖ひたすら請が故に其需に従ひ起て予

九 べし 九 我なんぢらに告ん求よ然バ予られ尋よ然バあひ門を叩よ然バ啓る
 十 ことを得ん 十 蓋すべて求る者ハ得たづぬる者ハあひ門を叩者ハ啓るれ
 十一 也 十一 爾曹のうち父たる者誰か其子のパンを求んに石を予んや魚を求ん
 十二 ぬ其に代て蛇を予んや 十二 卵を求んに蠍を予んや 十三 然バ爾曹惡者ながら善
 賜をろの兒曹に予るを知らして天に在す爾曹の父ハ求る者に聖靈を予ざ
 らん乎 十四 イエス瘡腫なる惡鬼を逐出しけるに惡鬼いいで瘡腫ものいひ
 十五 しかバ人々駭けり 十五 其中なる者の曰けるハ彼の惡鬼の王ベルゼブルに藉
 十六 て惡鬼を逐出せる也 十六 又ある人々イエスを試んとて天よりの休徴を求た
 十七 り 十七 イエスの意を知て曰けるハ互に分争ふ國ハ亡び互に分争ふ家ハ傾
 十八 る也 十八 若サタンも自ら分争ハ其國いかで立んや其なんぢら我を言て
 十九 ベルゼブルに藉て惡鬼を逐出すとせり 十九 若われベルゼブルに藉て惡鬼を
 二十 逐出さバ爾曹の子弟誰に藉て惡鬼を逐出すや夫かれらハ爾曹の裁判人
 二十 となす 二十 若われ神の指をもて惡鬼を逐出たるならバ神の國ハ既や爾曹

三三 亦來れり三 勇者鎧を撰て邸を守るときに其所有安全なり三三もし之より勇
 者きたりて其に勝るときに其特とせる鎧を奪ひ且贓物を分べし三三我と偕な
 三二 らざる者の我を叛き我と偕を斂ざる者の散すなり〇三四 悪鬼人より出て早
 二四 たる所をめぐり安を求めども得ずして曰ける我出し家お歸らん三五 已に
 二五 來しお掃淨り飾れるを見二六 遂お往て己よりも悪き七の悪鬼を携へ入て此
 二六 にお居る其人の後の患状の前より更に悪かるべし二七 この話を言るとき群集
 二七 の中より一婦聲を揚て曰ける爾を孕し腹と爾の吮し乳の福なり二八 イエ
 二八 ス答ける然されと神の道を聽て其を守る者の福に若す〇二九 人々擁集
 二九 れる時イエス曰ける之今の世の惡し奇跡を求るとも預言者ヨナの奇跡の
 三〇 外に奇跡の予られじ三〇 蓋ヨナがニ子べれ人お奇跡と爲し如く人れ子の今
 三〇 世お奇跡と爲べし三三 南方れ女王審判れ日お共お起て今れ世れ人れ罪を
 三三 斷めん彼の地れ極よりソロモンれ智慧を聽んとて來るり夫ソロモンより
 三三 大なる者こゝに在ニ子べれ人審判れ日に共お起て今れ世れ人れ罪を斷

三三 めん彼等のヨナは勸言に因て悔改めたり夫ヨナより大なる者こゝに在
 三三 燈を燃て隠たる處あるひに升れ下におく者おし入來る者れ其光を見ん爲
 三四 燭臺れ上に置き身れ燈の目なり爾れ目瞭かならば全身わかる其
 三五 目眩ければ爾れ身も暗し三五 故に爾にある光れ暗らぬやう慎めよ三六 もし爾
 三六 全身光明にして暗所なくば燈れ輝きて爾を照す如く全く光明あるべし
 三七 〇三七 イエス語をるとき或バリスアイれ人共に食せん事を請けれバ入て食お
 三六 就り三六 食する前お洗ことを爲ざりしを見てバリスアイれ人異めり三九 主
 四一 こそお曰ける爾曹バリスアイの人梳と盤れ外を潔す然と爾曹内は貪慾と
 四一 惡みて充り四十 無知なる者よ外を造し者のまた内をも造ざりし乎四二 さんぢ
 四二 ら所有物を以て施せ然バ爾曹の爲お凡の物は潔する也四二 禍なる哉さんぢ
 四三 らバリスアイの人よ薄荷苗香および凡れ野菜十分の一を取納て義と神を愛
 四三 することを廢て行ふべき事あり彼も亦廢べからざる者あり四三 禍なる哉
 四四 さんぢらバリスアイの人よ會堂の高座市上の閑安を好めり四四 禍なる哉

十四 兄弟に遺業を我に分よと命たまへ 十四 イエス曰ける人よ誰われを立て
 十五 爾曹の裁判人また物を分つ者と爲しぞ 十五 イエス衆人に曰ける戒心して
 十六 貪心を慎めよ夫人の生命の所蓄の饒あるに因ざる也 十六 また譬を彼等に
 十七 語て曰ける或富人の田畑よく豊ければ 十七 自ら付いひける我が作物
 十八 を藏る所なきを如何せん 十八 又曰ける我かく爲ん我倉を毀ち更に大なる
 十九 を建すべて我が作物と貨を其所に藏べし 十九 斯て靈魂に對ひ靈魂よ多年を
 二十 過ほどの許多の貨物を有たれば安心して食飲樂めよと言んとす 二十 然るに
 二十一 神これに曰ける無知ある者よ今夜おんちが靈魂とらるること有べし然
 二十二 爾の備し物の誰が有に在る乎 二十二 凡る己の爲に財を積へ神に就て富ざる
 二十三 者此の如あり 二十三 イエスの弟子に曰ける故に我おんちらに告ん爾曹
 二十四 生命の爲に何を食ひ身體の爲に何を着んとて思ひ煩ふ勿れ 二十三 生命の糧よ
 二十五 り優り身體の衣よりも優れり 二十四 鴉を思見よ稼す穡す倉をも納屋をも有す
 然ども神のさほ此等を養ふ況て爾曹の鳥よりも貴きと幾何や 二十五 爾曹の

二六 うち誰かよく思ひ煩ひて其生命を寸陰も延得んや 二六 然る最小事すら能ざ
 二七 るに何ぞ其他を思ひ煩ふや 二七 百合花の如何して生長かを思へ勞す紡がざ
 二八 る也我爾曹に告んソロモンの榮華の極の時だにも其装この花の一に及ざ
 二九 りき 二八 神の今日野に在て明日爐に投入らるる草をも如此よろいせ給へ
 況て爾曹をや吁信仰うすき者よ 二九 爾曹何を食ひ何を飲んと求むる勿また
 三十 思ひ惑ふこと勿れ 三十 凡て是等の物の世界の邦人の求るもの也おんちらの
 三十一 父の是等の物の爾曹も無て叶ぬ事を知 三十一 神の國を求めよ然る是等の
 三十二 物の爾曹に加らるべし 三十二 小き羣よ懼るる勿れ爾曹の父の喜びて國を爾曹
 三十三 に予へ給はん 三十三 爾曹の所有を售て施し己が爲に常に蓄ざる財布すあち
 三十四 盡ざる財寶を天に備よ其處は盜賊も近よらず盡も壞のざる也 三十四 爾曹の財
 三五 寶の在どころに爾曹の心も亦ここに在べし 三五 爾曹腰に帶し火燈を燃し
 三六 て居 主人婚筵より歸來り門を叩べ速かに啓ん爲に彼を待人の如せよ 三六
 主人きたりて其目を醒し居を見さば此僕の福あり誠に我おんちらに告ん

主人八みづから腰に帶し僕を食に就せ前て之に供事すべし三九或の二更ある三八
 ひの三更に主人きたりて然あせるを見あべ此僕に福あり三九爾曹これを知
 べし若し家の主人盜賊いづれの時に來かを知べ其家を守て破せまじ四十然
 爾曹も預じめ備せよ不意とき人にの子きたらんと爲べあり四一ペテロ曰
 ける主よ此譬の我儕に言か又凡の人に言か四二主いひける時に及て
 食物を給與しめん爲に主人がの僕等の上に立たる忠義にして智き家宰
 誰なる乎四三其主人きたる時に是の如く勤るを見らるる僕に福あり四四我
 が主人の來るに遅らんと思の僕婢を拵たさ食飲して且酒に酔はじめ
 不信者と同うすべし四七僕主人の心を知あがら預備せず亦の心に從ざる
 者に掛ること多らん四八知ずして拵べき事を作し者に掛るる事も少から
 ん多く予らるる者多し四九多く求らるべし多く托れべ之より多く求べし四九わ

れ火を地に投入ん爲に來れり我をにか欲む已に此火の燃たらん事あり五二
 我の安全を地に施んとて來ると意ふや我あんぢらに告ん然らず反て分爭し
 む五三今よりのち一家に五人あらば三人の二人に敵對し二人の三人に敵對
 して分るべし五三父子に子に父に母に女に母に姑に其婦に婦に其姑
 に敵對して分るべし五四イエスまた衆人に曰ける雲の西より起るを見べ
 直に雨ふらんと爾曹いふ果て然り五五南より風ふけば暑からんと爾曹いふ
 果て然り五六偽善者よ天地の色象を別ことを知て此時を別ち能ざる何ぞ
 や五七また何ぞ自ら公義を審ざる乎五八あんぢ訟る者と共に有司に往と途
 中にて心を盡して彼より釋されんことを求めよ恐くの訟る者あんぢを裁
 判人ふひき裁判人あんぢを下吏に付し下吏あんぢを獄に入ん五九我あんぢ
 に告ん一錢も残す償ふまで爾うこを出こを得ざる也

當時あつまりたる者の中にピラトがガリラヤ人の血を其供物に

二 雜し事をイエスに告る者ありニイエス答て彼等に曰けるハ爾曹此ガリラ
 三 ヤ人の是の如く害されし故に凡のガリラヤ人よりも益りて罪ある者と意
 四 ふや我なんぢらに告ん然す爾曹悔改めずハ皆おあじく亡さるべし
 五 四三 ロアムの塔たふれて壓死されし十八人のエルサレムに住る凡の人々より
 六 も益りて罪ある者と意ふや五 われ爾曹に告ん然す爾曹悔改めずハ皆おあ
 七 じく亡さるべし六 又この譬を云り或人らの葡萄園に植おきたる無花果樹
 八 ありしが来て之に果を求めども得ざりければ七 其園丁に曰けるハ我三年
 九 きたりて此無花果樹に果を求めども得ず之を斫され何ぞ徒らに地を塞や
 十 八 園丁こたへけるハ主よ我らの周圍を堀て之に糞するまで今年も容せ九
 十一 もし果を結ばざる善もし結すハ後に之を斫べし〇十 イエス安息日に或會堂
 十二 にて教しに十一 十八年鬼に患されたる婦あり偃僕て少も伸ること能ざりき
 十三 十二 イエス之を見てよび婦よ爾ハ其病より釋さるゝと曰て十三 手を婦に按け
 十四 れハ直に伸て神を讚美たり十四 會堂の宰イエスの安息日に醫したる事を怒

十五 こたへて衆人に曰けるハ事を爲すべきの日六日われハ其中に來りて醫さる
 十六 べし安息日に爲され十五 主かれに答て曰けるハ偽善者よ爾曹おのゝ安息
 十七 日に其牛や驢をどき厩より牽出して水を飲さる乎十六 況て此婦ハアブ
 十八 ラハムの裔なり十八年サタンに縛られたる其結を安息日に解べからざら
 十九 ん乎十七 イエス如此曰ければ敵對し者みな慚ぬ又衆人みな其行し慈惠
 二十 ことを喜べり十八 イエスマた曰けるハ神の國の何に比へ又なに譬んや十九
 二十一 一粒の芥種の如し人これを取て其園に播べ長生て大なる樹となり天空の
 二十二 鳥の枝に棲なり二十 又いひけるハ我神の國を何に譬んや二十 麩の如し婦
 二十三 これを取て三斗の粉の中に納せば盡く發出すなり〇三三 イエス教つ各城
 二十四 各郷を過エルサレムに向て旅行り二三 或人いひけるハ主よ救る者ハ少き
 二十五 乎三三 イエス彼等に曰けるハ窄門に入ためお力を盡せ我なんぢらお告ん入
 門を叩て主よ主よ我に啓と曰んに主人こたへて我なんぢらの何處より來

二六 しか知らずと曰ん三六然る時に我儕なんぢの前にくひのみ我儕なんぢまた我儕なんぢの衢ちまたに教たりしと言出さん三七主人あるじこたへて我われなんぢらに告んつげ何處いづこより來しきたりか知らず三九皆惡みなあくを爲す者ものよ我われを去されと曰ん三八爾曹なんぢらアブラハムあはらむイサクいさくヤコブやこぶ及び凡すべての預言者よげんしやの神かみの國くにに在ありて爾曹なんぢらの外そとに投出なげいださるるを見んみ時ときあ哀哭あなしみ切齒きはがみすると有あるべし三九また人々ひとびと西にしや東北ひがしきたや南みなみより來りて神かみの國くにに坐まするならん三十九後あとの者ものの先さきに先さきの者ものの後に爲なるべし三九○當日このひあるパリサイの人々ひとびと來りてイいエスえすに曰いひける三九ヘロデへろで爾なんぢを殺さんとする故ゆゑに此こゝを離往さりゆけと答こたへて曰いひける三九爾曹なんぢらゆきて其狐そのきつねに告つげよ我われ今日けふ明日あす惡鬼あくきを逐出おひいだし病やまひを醫いし三九第三日みつかめに此事このことをはらん三九然されども今日けふ明日あすまた次日つぎのひの我われかならず行ゆくべし蓋そは預言者よげんしやのエルサレムえるさるむの外ほかに殺ころるること有ありね三九也なり噫あゝエルサレムえるさるむよエルサレムえるさるむよ預言者よげんしやを殺ころし爾なんぢに遣つかはされし者ものを石いしにて撃うてる者ものよ母鷄めんせりの雛ひなを翼つばさの下したに集あつむる如ごとく我われなんぢの赤子こどもを集あつめんと爲せしこと幾回いくたびぞや爾曹なんぢらの欲このます三九視みよ爾曹なんぢらの家いへの墟あられと爲なりて遣のこさるべし誠まことに我われなんぢら三九告つげん主あかの名なに託たくて來きたる者ものの福さいはひなりと爾なんぢ

三三 曹らいはん時ときいたる迄まで我われを見みざるべし

三四 **第四言** イエス安息日あんそくにちに食事あよくじの爲ためある宰つかさなるパリサイの人ひとの家いへに入いり人々ひとびとかれを窺うかがたり三四其前そのまへに腹脹はらふを患わづらひたる人ひとありしか三四ババイエスいえす應こたへて教けう法師はふしとパリサイの人々ひとびとに曰いひける三四安息日あんそくにちに醫いす事ことの宜よきや否いなか三四かれら默然もくねんたり三四イエスいえすかの人ひとを執とらへ醫いして之これを去さらしめ三四彼等かれらに答こたへて曰いひける三四爾曹なんぢらのうち誰たれか驢ろある三四ひの牛うしなどの阱あなに陥おちたらんに安息日あんそくにちに三四遽すみやかに曳出ひきださる乎か彼等かれらこの言ことに就つて對こたふこと能あたはりき三四○七七斯かくて其席そのせきを請まねれたる人々ひとびとの首席かみざを擇えらびて見みてイエスいえす譬たとへを以もつて彼等かれらに曰いひける三四なんぢ婚筵こんえんに請まねれん三四とき首席かみざに坐ますること勿なかれ恐おそる三四爾なんぢより尊人たふとままねかれ三四な三四九九彼かれと爾なんぢを請まねし者ものきたりて此人このひとに座ざを譲ゆづれと曰いひる三四然さらに爾なんぢ羞はぢて末座まつざに往ゆべし三四是故このゆゑに爾なんぢまねかれん時とき往ゆて末座まつざに坐ませよ請まねし者もの來りて友ともよ首席かみざに進すすめ三四爾なんぢ言いはば同席どうせきの者ものの前に爾尊なんぢたふとまるべし三四凡おほく自ら高たかぶる者ものの卑くだされ三四自ら卑くだる者ものの三四高たかくせらるべし三四又またかれを請まねる者ものに曰いひける三四爾午餐なんぢひるげある三四ひの晚餐ゆふげを設ます

四三 サイの人と學者たち譏誚て曰ける。此人の罪ある人に接りて共食せり
 三 イエス此譬を彼等に語て曰ける。爾曹のうち誰か一百の羊あらんか
 若し一を失之九十九を野におき往て其失し羊を獲まで尋ざらん乎
 五 尋得ば喜て之を己の肩に負て家に歸て其友と其鄰の人々を召集て曰ん
 我と共に喜べ我らしなへる羊を獲たれば也。七 わる爾曹も告ん此の如く一
 人の罪ある人悔改なば悔改むるに及ぶる九十九の義人より尙天に於て
 喜あらん。八 また婦のうち誰か金銀十枚をもち其一枚を失之んか燈火を燃
 て家を掃除し之を獲まで一切に尋ざらん乎。九 尋得ば其友と其鄰の人々を
 召集て曰ん我と共に喜べ我らしなへる金銀を獲たれば也。十 わる爾曹に告
 ん此の如く一人の罪ある人悔改めなば神の使の前も喜あるべし。○ 十一 また
 曰けるは或人子二人あり。十二 子の父に曰ける。父よ我得べき業を我に
 分予よ。父の産を彼等に分たれ。十三 幾日も過ぎるに季子の産を盡く集
 て遠國へ旅行せしが放蕩にして其分産を皆ろこめて耗せり。十四 盡く耗し

十五 とき大なる饑饉の地に有て彼どもしく爲はじめければ。十五 往て其地の一
 民に身を授たり其人豕を牧ために彼を野に遣せり。十六 かれ豕の食する所の
 豆莢をもて己が腹を果さんと欲ふはどなれど何を彼に予る人なし。十七 自
 ら省悟て曰ける。我父の所に食物あまれる傭人の許多か有に我の飢て
 死んとす。十八 起て我父に往て曰ん父よ我天と爾の前に罪を犯たれば。十九 爾の
 子と稱るに足ぶる者あり。爾の傭人の一人の如く我を爲たまへ。二十 即ち起
 て其父に往り尙どほく有しに其父かきを見て憫み趨往其頸を抱て接吻し
 ぬ。二十一 子父に曰ける。父よ我天と爾の前に罪を犯たれば。爾の子と稱るに足
 ぶる也。二十三 父の僕等も曰ける。至も美服を携來りて之に衣せ其指に環を
 はめ其足に履を穿せよ。二十三 また肥たる犢を牽來りて宰を我儕食して樂まん
 二十四 是わが子死て復生うしあひて復得たれば也。とて彼等と共に樂み始む。二十五
 一の兄田に在しが歸て家に近き樂と舞の音を聞。二十六 一の僕一人を召て是
 何事やと問るに。二十七 僕曰ける。爾の弟歸りたり。善なく彼を得たりしに因

二八 爾が父肥たる贖を宰たるなり二九 兄いかりて入ず是故に其父いで彼に
 二九 勸しかば二九 父に答て曰ける我多年なんぢに事て未だ爾の命に背ず然と
 三〇 も我友と樂む爲に羔をも予し事なし三〇 然に妓の爲に爾の業を耗したる此
 三二 なんぢが子かへさば之が爲に肥たる贖を宰せり三二 父かれに曰ける子よ
 三三 爾之常に我と共に在また我所有の皆なんぢの属なり三三 爾の弟死て復生う
 しちひて復得たるが故に我儕喜て樂む之當然の事なり

第二十三言 イエス又の弟子に曰ける或富る人に操會者ありけるが主の
 所有を耗しと主人へ訴へらる 二 主人操會者を呼て曰ける爾に就て我
 きたる事の何や今後なんぢを操會者と爲えざれば其會計たる條件を
 我に辨よ 三 操會者みづから意るの主人我操會を奪あば何を爲ん我鋤を執
 ち力なく施を乞ひ恥かし 四 われ操會を奪れん時は是等の家に迎らる
 べき所爲を知りて 五 遂に主人の負債人を悉く召て其首の者に曰ける
 爾わが主に負債おにはどある乎 六 答ていふ油百斗なり彼に曰ける爾の

七 券書を取いろぎ坐して五十と書よ 七 又一人に曰ける爾の負債幾何ある
 や答ていふ小麦百斛あり彼に曰ける爾の券書を取て八十と書よ 八 主人
 の所爲の巧あるに因て此不義ある操會者を譽たり夫この世の子輩の此
 世に於て光の子輩よりも尤も巧なり 九 我あんぢらに告ん不義の財を以て
 己が友を得よ此の乏からん時彼ら爾曹を永遠宅に接んが爲あり 十 小事に
 忠き者の大事にも忠く小事に忠からざる者の大事にも忠からず 十一 故に若
 なんぢら不義の財に忠からず誰か眞の財を爾曹に託んや 十二 爾曹もし人
 の所有に不義ならば誰か爾曹の所有を爾曹に與んや 十三 一人の僕二人の
 主人に事ると能ず蓋これを悪かれを愛し或此を重んじ彼を輕んずれば
 也なんぢら神と財に兼事ると能ず 十四 慾ふかさパリサイの人々此事を聞て
 イエスを嘲哂たり 十五 イエス彼等に曰ける爾曹の人々の前に自己を義と
 する者あり然とも神の爾曹の心を知り夫人の崇ぶ所の者の前に惡る
 者あり 十六 律法と預言者のヨハ子まであり其のち神の國の宣傳らる皆用

十八七 力て之に入んと爲あり十七 天地の廢るの律法の一畫の廢るよりも易し十八 凡
 十九 其妻を出して他の者を娶べ姦淫を行ふ也また夫に出されたる婦を娶る
 二十 者も姦淫を行ふなり十九 爰に富人あり紫袍と細布を衣て日々奢樂めり
 二十一 亦ラザロと云る貧者あり甚く腫物を患て富人の門に置れ 二十二 其案より
 二十二 落る餘屑にて養われんと欲へり又犬きたりて其腫物を舐 二十三 貧者死たれば
 二十三 天の使者たちに依てアブラハムの懷に送れたり富人も死て葬られしが
 二十三 陰府にて痛苦をうけ其目をわけ遙にアブラハムと其懷に在ラザロを見
 二十四 て 二十四 嗚叫いひけるの父アブラハムよ我を憐みラザロを遣して其指の尖を
 二十五 水を蘸わが舌を涼しめ給へ我この火燄の中お苦めばあり 二十五 アブラハム曰
 二十六 けるの子よ爾の生たりし時に爾の福を受またラザロの其苦を受しを憶へ
 二十六 今かれの慰られ爾の苦めらるるあり 二十六 斯耳ならず此より爾曹に涉んどす
 二十七 るとも得ず彼より我儕お涉んどするとも亦えざる爲に我儕と爾曹との間
 二十七 有限おかれたる巨なる淵あり 二十七 答けるの然父よ願く我父の家へラザ

二八 口を遣たまへ 二八 蓋われに五人の兄弟あり亦かれらが此苦の所に來ざる爲
 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九
 三〇 三〇 三〇 三〇 三〇 三〇 三〇 三〇 三〇 三〇 三〇 三〇 三〇 三〇 三〇
 三一 三一 三一 三一 三一 三一 三一 三一 三一 三一 三一 三一 三一 三一 三一
 三二 三二 三二 三二 三二 三二 三二 三二 三二 三二 三二 三二 三二 三二 三二
 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三
 三四 三四 三四 三四 三四 三四 三四 三四 三四 三四 三四 三四 三四 三四 三四
 三五 三五 三五 三五 三五 三五 三五 三五 三五 三五 三五 三五 三五 三五 三五
 三六 三六 三六 三六 三六 三六 三六 三六 三六 三六 三六 三六 三六 三六 三六
 三七 三七 三七 三七 三七 三七 三七 三七 三七 三七 三七 三七 三七 三七 三七
 三八 三八 三八 三八 三八 三八 三八 三八 三八 三八 三八 三八 三八 三八 三八
 三九 三九 三九 三九 三九 三九 三九 三九 三九 三九 三九 三九 三九 三九 三九
 四〇 四〇 四〇 四〇 四〇 四〇 四〇 四〇 四〇 四〇 四〇 四〇 四〇 四〇 四〇
 四一 四一 四一 四一 四一 四一 四一 四一 四一 四一 四一 四一 四一 四一 四一
 四二 四二 四二 四二 四二 四二 四二 四二 四二 四二 四二 四二 四二 四二 四二
 四三 四三 四三 四三 四三 四三 四三 四三 四三 四三 四三 四三 四三 四三 四三
 四四 四四 四四 四四 四四 四四 四四 四四 四四 四四 四四 四四 四四 四四 四四
 四五 四五 四五 四五 四五 四五 四五 四五 四五 四五 四五 四五 四五 四五 四五
 四六 四六 四六 四六 四六 四六 四六 四六 四六 四六 四六 四六 四六 四六 四六
 四七 四七 四七 四七 四七 四七 四七 四七 四七 四七 四七 四七 四七 四七 四七
 四八 四八 四八 四八 四八 四八 四八 四八 四八 四八 四八 四八 四八 四八 四八

九 ずや我食を備わが食飲をのるまで帯を束われお事て後あんぢ食飲すべし
 十 九 僕主人の命せし事お從へばとて主人かれお謝すべきか然じと我の意
 十一 斯バ亦あんぢら命せられし事をみな行たる時も我儕の無益の僕あす
 十二 べき事を行たるありと謂○十二 イエスエルサレムに往ときサマリヤとガリ
 十三 ラヤの中を經十二ある村に入しとき十人の癩者ありて彼おあひ逢お立て
 十四 聲を揚いひけるハ十三 師イエスよ我儕を矜恤たまへ十四 イエス之を見て曰け
 十五 るは往て己を祭司に見せよ彼等ゆく間に潔られたり十五 その一人己が醫さ
 十六 れたるを見て返來り大聲に神を榮め十六 イエスの足下に俯伏て謝せり彼の
 十七 サマリヤ人なり十七 イエス答て曰けるは潔られし者は十人に非や其九人の
 十八 何處に在か十八 この異邦人の外に神に榮を歸せんとして返たる者あらざる乎
 十九 十九 また彼に曰けるは起て往あんぢの信仰あんぢを救り二十 神の國は何の時
 二十 きたる乎とパリサイの人お問れけれバイエス答て曰けるは神の國は顯れ
 二十一 て來ものお非ず三 此に視よ彼お視よと人の言べき者にも非ず夫神の國の

二 爾曹の衷に在三 また弟子に曰けるハ爾曹人の子の一日を見たく欲ふ日來
 三 らん然ども見ざるべし三 人々なんぢらに此に見よ彼に見よと曰ん然ども
 四 往なかれ從ふ勿れ三 四 うれ電光の天の彼處より閃き天の此處に光るが如く
 五 人の子も其日に如此あるべし三 五 然ども人の子かならず先おほくの苦を受ま
 六 た此世の人に棄られん三 六 ノアの時に有し如く人の子の時にも然あるべし
 七 即ちノア方舟に入し日まで衆人食飲嫁娶なと爲たりしが洪水きたり
 八 て彼等を滅せり三 八 又ロトの時にも如此ありき衆人食飲貿易樹藝構造な
 九 と爲たりしに三 九 ロトノドムより出し日天より火と硫磺を雨せて彼等を皆
 十 滅せり三十 人の子の顯るる日にも亦斯有べし三 十 其日にハ人屋上に在ハ其器
 十一 具室に在ども之を取んとて下なかれ亦田畑に在る者も同く歸なかれ三 十 一
 十二 トの妻を憶へ三 十一 凡る其生命を救んとする者ハ之を失ひ若うの生命を失ハ
 十三 ん者ハ之を存べし三 十二 我なんぢらに告ん其夜ふたり同床に在んに一人ハ執
 十四 れ一人ハ遺さるべし三 十二 二人の婦どもに磨ひき居んに一人ハ執れ一人ハ遺

三六 さるべし三六 かれら答て曰ける三六の主よ此事何處三六に有や彼等に曰ける屍三六の在三六どころに三六驚あつたらん

三二 **第二十八章** イエスマた人の恒三二に祈禱三二して沮喪三二すまじき爲三二に譬を彼等に語け

三三 る三三の三三或邑三三に神を畏ず人を敬三三いざる裁判人ありけるが三三其邑三三に娼婦あり

三四 て我を我仇三四より救たまへと曰て彼に至しに三四かれ久く肯三四いざりしかと其

三五 のち心三五の中に思ける三五我神を畏ず人をも敬三五いざれと三五此娼三五われを煩三五せ

三六 彼が絶三六ず來て我を賂三六さざる爲三六に之を救三六いん三六主いひける三六不義なる裁判

三七 人の言三七し事を聽三七て神三七の晝夜祈三七る所の選三七たる者を久く忍三七とも終三七に救三七ざ

三八 らんや三八我なんぢら三八お告三八ん神三八の速三八に彼等三八を救三八いん然三八と人の子三八きたらんと

三九 き信三九を世に見三九んや三九又三九みづから義三九と意三九ひ人を輕三九むる或人三九にイエス此譬

四十 を語四十れり四十二人祈四十んとて殿四十に登四十りしが其一人四十のバリサイの人一人四十の稅吏

四一 なりき四一バリサイの人たち四一て自ら如此四一のれり神四一よ我四一の他の人の如四一く強

四二 索四二不義四二姦淫四二せず亦此稅吏四二の如四二くにも有四二ざるを謝四二す四二われ七日間四二に二次

十三 斷食十三し又すべて獲十三もの十分十三の一十三を獻十三たり十三稅吏十三の遠十三に立十三て天十三をも仰十三ぎ

十四 見十四ず其胸十四を拊十四て神十四よ罪人十四なる我を憐十四み給十四と曰り十四我なんぢら十四に告十四ん此人

十五 の彼人十五よりの義十五と爲十五れて家十五に歸十五たり夫十五すべて自己十五を高く十五する者十五の卑十五られ自己

十六 を卑十六す者十六の十六高十六らるべし十六○十六イエス十六に按十六られんがため人々十六嬰孩十六を携十六來りし

十七 に弟子十七たち見十七て之十七を責十七たり十七イエス十七嬰孩十七を呼十七び弟子十七に曰十七ける十七嬰孩十七を我

十八 に来十八せよ彼等十八を禁十八る勿十八れ神十八の國十八に居十八者十八の是十八の如十八き者十八なり十八誠十八に爾曹十八に告

十九 ん凡十九ろ嬰孩十九の如十九に神十九の國十九を承十九ざる者十九の之十九に入十九ことを得十九ざる也十九○十九或宰十九と

二十 ふて曰二十ける二十善師二十よ永二十生二十を嗣二十ために我二十なにを行二十べき乎二十○二十イエス二十彼二十に曰

二十一 ける二十一何二十一ぞ我二十一を善二十一と稱二十一や一二十一の外二十一に善者二十一のなし即二十一ち神二十一なり二十一誠二十一に爾二十一が知二十一と

二十二 ころなり姦淫二十二する勿二十二れ殺二十二なかれ竊二十二なかれ妄二十二證二十二を立二十二る勿二十二れ爾二十二の父二十二と母二十二と

二十三 を敬二十三へ二十三答二十三ける二十三是二十三みな我二十三幼二十三より守二十三れる者二十三なり二十三○二十三イエス二十三之二十三を聞二十三て曰二十三ける

二十四 爾二十四なは一二十四を虧二十四りの所有二十四を悉二十四く售二十四て貧者二十四に施二十四然二十四ば天二十四に於二十四て財二十四あらん而

二十五 して來二十五り我二十五に従二十五へ二十五かれ大二十五に富二十五る者二十五なりしか二十五之二十五を聞二十五て甚二十五く憂二十五たり二十五○二十五イ

二五 エスラの甚く憂しを見て曰ける、二五 富る者の神の國に入る、如何に難かな。
 二六 富る者の神の國に入り、二六 駱駝の針の孔を穿り、却て易し、之を聞く者ども、
 二七 曰ける、然らば誰か救を受べき乎。二七 イエス曰ける、人の爲得ざる所の神の
 二八 爲得どころ也。二八 ペテロ曰ける、我儕一切を捨て、爾に従へり。二九 イエス彼等
 三〇 に曰ける、誠に爾曹に告ん、凡そ神の國の爲に家あるひ、父母あるひ、兄
 三一 弟あるひ、妻あるひ、兒女を捨る者、三二 今世にて幾倍をうけ、來世にの永
 三二 生を受ざる者なし。三三 イエス十二の弟子を携ひて、之に曰ける、我儕エル
 三三 サレムに上る人の子に就て、預言者の録されし事、みな應らるべし。三四 夫人
 三四 の子、異邦人に解され、戯弄、凌辱られ、唾せらるべし。三五 且かれら鞭撲て、之を
 三五 殺さん、又第三日に甦るべし。三六 弟子この語を少も達す、亦この言る事、かれら
 三六 に隠たり、亦ろの語れる言を、知ざりき。三七 イエスエリコに近よれる時、ある
 三六 替者道の旁に坐して乞たりしが、三六 大衆の過を聞て、此の何事乎、と曰ければ、
 三七 人々ナザレのイエスの過なり、と告ぐ。三六 替者よ、ぱり曰ける、三六 ダビデの裔

三九 イエスよ、我を矜恤たまへ。三九 前だち行者ども、黙止と之を斥れども、愈ダビデ
 四〇 の裔よ、我を矜恤たまへ、と呼れり。四〇 イエス立止り、彼を携來と命ず、替者ちか
 四一 よりけれ、四一 イエス彼に問ける、爾われに何を爲れんと欲ふや、答ける、
 四二 主よ、見かん事を欲ふ。四二 イエス彼に曰ける、見かん事を、爾の信かんちを
 四三 救へり。四三 彼やがて見、之神を榮て、イエスに従ひ、ぬ民み、之を見て、神を讚美
 二 イエスエリコに入て、經行どき、二 ザアカイと云る人あり、二 稅吏の長
 三 にて富る者なり、三 イエスの如何ある人あるか、見んと欲ども、身量ひくけれ
 四 ば、大衆あるに、因て見、ことを得ず、四 彼を見んとて、趨ゆき、桑樹に、四 升れり、四 イエ
 五 スの道を過んとする故あり、五 イエス此に來り、仰て、彼を見、ひける、五 ザ
 六 アカイよ、速ぎ下れ、我今日か、あらず、爾の家に宿らん、六 彼いろぎ下り、喜て、六 イ
 七 エスを迎たり、七 衆人これを見て、み、亦怨言いひける、七 彼の往て、罪ある人の
 八 客と爲れり、八 ザアカイ起て、主よ、我所有の半を、貧者に施さん、八 若われ、誣訟て

九 人より収たる所あらば四倍にして之を償のふべし 九 イエス彼に曰ける
 今日この家すくゆることを得たり蓋この人もアブラハムの裔なれば也
 十 十 人の子の喪ひし者を尋て救ん爲に來れり 十一 衆人この言を聞る時
 十二 十 譬を設て曰り此のエルサレムに近かつ衆人神の國たぢちに顯明るべし
 十三 十 意が故あり 十二 ある貴者みづから領地を受けて歸んとて遠國へ往とき 十三 十
 十四 十 人の僕を召て彼等に金十斤を予て曰ける 我來まで商賣せよ 十四 十 國民
 十五 十 かれを憾て後より使を遣し曰ける 我儕この人を王とする事を欲す 十五 十
 十六 十 地を受て歸し時おの 商賣して幾何の利を得たるかを知んとて金を予
 十七 十 十斤の利を得たり 十七 十 主人いひける 愈善僕よ爾の少者に忠あれば十の邑
 十八 十 十斤の利を得たり 十八 十 主人いひける 一人きたりて曰ける 主よ爾の一斤の利
 十九 十 十斤の利を得たり 十九 十 主人いひける 爾も五の邑を宰とるべし 二十 十 一人きたりて曰
 二十 十 ける 主よ爾の一斤の此に在われ手巾に裏て藏置たりき 二十 十 蓋なんぢ嚴人

三三 なるが故に我おろれたり爾置ざる者をとり播ざる者をかゝる人なればなり
 三二 主人いひける 惡僕よ我あんぢの口に因て爾を鞫べし 爾われ嚴者に
 三二 置ざる者を取まかざる者を獲と知 然に何ぞ我來るとき本と利を得ん
 三四 三 爲に我金を兌換肆に預ざりしや 遂に傍に立る者に曰ける 此人の一
 三五 斤を取て十斤有る者に予よ 衆人主人に曰ける 主よ其人すでに十斤を
 三六 有り 主人いひける 我なんぢらに告ん 夫有者の予られ不有者の其所有
 三七 ものまでも取るべし 且わが敵すなわち我支配を欲ざる者を此に曳來り
 三八 我前に誅せ イエス此事を言し 衆人に先だちてエルサレムに上れ
 三九 橄欖と名る山に靠るベテバゲとベタニヤに近づける時 弟二人
 四十 をつかは 遣さんどて曰ける 對面の村にゆけ彼處に入らば人の未だ乘ざる所の
 四一 繫たる驢駒に遇べし 其を解て牽來れ もし誰か爾曹に何ゆる解やと問者
 四二 あらば如此こたふべし 主の用なり 遣されたる者往ければ 果て其語たま
 四三 へる如く遇ぬ かれら驢駒を解とき 其主等かれらに何ぞ驢駒を解やと曰

三三四 しかば 三三四 答て主の用なりと曰て 三五 之をイエスに牽來り己が衣を驢駒に置
 三三六 イエスを其上に乗 三三六 イエス往けるるとき衆人らの衣を路上に布り 三三七 イエス
 エルサレムに近づき 橄欖山を下らんとする時大衆の弟子みな喜び其見し
 三三八 所の奇跡なる凡の能に因て大聲に神を讚て曰ける 三三八 主の名に託て來る
 三三九 王の福なり天に於ての和平に至上所にの榮光あるべし 三三九 大衆の中より或
 四〇 パリサイの人イエスに曰ける 師よ爾の弟子を責めよ 四〇 彼等に答ける 師
 四一 我なんぢらに告ん此輩もし黙止なば石號呼べし 四一 既に近づけるるとき城中
 四二 を見て之が爲に哭いひける 四二 もし爾だにも今この爾の日に於て爾の平
 四三 安に關れる事を知り福なるに今なんぢの目に隠たり 四三 爾の敵なんぢの周
 四四 邊に壘を築き四方より圍攻 四四 爾と其中なる兒女を撃滅し石をも石の上に
 四五 遺ざる日きたらん是なんぢ其眷顧たまふの時を知らざれば也 四五 イエス殿に
 四六 入りの中にて貿易せる者を逐出し 四六 彼等に曰ける 我室の祈禱の殿なり
 四七 と録されたるに爾曹これを盜の巢と爲り 四七 イエス日々に殿にて教ふ祭司

四八 の長學者民の尊者ども彼を殺んと謀ども民みな心を傾けて其教を聽るが
 故に 四八 爲べき方を知ざりき
 四九 一日イエス殿にて民を教へ福音を宣しに祭司の長學者長老共に
 五〇 近よりイエスに語て曰ける 二 何の權威を以て此事を行か誰この權威を
 五〇 予たるか我儕に告よ 三 答て曰ける 我も一言なんぢらに問ん且われに告
 五一 よ 四ヨハ子のバプテスマの天よりか人よりか 五 彼等たがひに曰ける 若
 五二 天よりと云べ然バ何故かれを信せざる乎と曰ん 六 もし人よりと云べ民み
 五三 なヨハ子を預言者と信ずれば我儕を石にて撃んとて七 遂に答て奚よりな
 五三 るか知ずと曰り 八 イエス彼等に曰ける 我も亦なこの權威を以て之を行
 五四 かを爾曹に告じ 九 即ち此譬を民に語れり或人葡萄園をつくり農夫に租
 五五 與て久しく他國へ往しが 十 期いたりければ葡萄園の果を受收ん爲に僕を
 五六 農夫の所に遣しけるに農夫等これを撲たさきて徒く返せたり 十一 また他の
 五六 僕を遣しに之をも撲たさき辱しめて徒く返せたり 十二 又三次僕を遣し

四一 四二 四三 四四 四四 四六 四七

等こたへ曰けるイ師よ善いへり四一此のち敢てイエスに問者なかりき四二○
 イエス彼等に曰けるイ人々如何なればキリストをダビデの裔と言や四三ダ
 ビデ自ら詩の篇に主わが主に曰けるイ我なんぢの敵を爾の足凳と爲まで
 我が右に坐すべしと言四四然バダビデ之主と稱たれば如何で其裔なら
 ん乎四五民みな之を聽る時イの弟子にいひけるイ長服を衣て遊行ことを
 好み市上にて人の問安會堂の高坐筵間の上坐を喜ぶ學者を慎めよ四七彼等
 の婆婦の家を呑いつりて長祈をなす審判るること尤も重し
 言イイエス目をわけ富る人々の捐輸を鑿錢箱に投るを見る二又あ
 る貧乏婆婦のレプタ二を投たるを見て曰ける三われ誠に爾曹に告ん此
 貧乏婆婦の者よりも多く投たり四蓋かれらイ皆ろの羨餘ある所より捐
 輸を神にささげ此婦の不足どころより其所有を盡く獻たれば也五また
 或人殿は美石と奉納物を以て修飾ることを語しに六イエス曰けるイ爾曹
 の見る所のもの石を石の上にも遺す七日いたらん七彼等とふて曰

七 六 五 四 三 二 四一 四二 四三 四四 四四 四六 四七

けるは師よ何の時この事あらん正に此の事の來らん時如何なる兆ある
 乎八イエス曰けるイ爾曹つゝしみて惑さるる事なかれ蓋おほくの者わが
 名を冒きたり我のキリストなり時イの近よれりと云ん然と爾曹從ふ勿れ九
 戦亂を聞とき懼るる勿れ此等の事の先に有イ止を得ざることも也然と末
 期の未だ速ならず十又曰けるイ民の民をせめ國の國を攻十一各處に大なる
 地震饑饉疫病おこり且おろるべき事と大なる休徵天より現るべし十二此
 事より先に人々爾曹を執へ苦め會堂および獄に解し我名の爲に王および
 侯の前イ曳往べし十三然ども爾曹が此事に遭イ證と爲なり十四故に爾曹まづ
 何を對んと思慮まじき事を心に定よ十五蓋すべて爾曹に仇する者の辨駁ま
 た敵對ことを爲えざるべき口と智とを我なんぢらに賜へん十六又なんぢら
 父母兄弟親戚朋友等より解され且汝らの中イある者の殺さるべし十七爾
 曹わが名の爲に人々に憾れん十八然ども爾曹の首髪一縷も喪イじ十九なんぢ
 ら忍耐て其生命を全うせよ二十あんぢら軍勢にエルサレムの圍るるを見お

二 其亡ちかき^{そのほろび}に在^{ある}と知^{しる}ころの時^{とき}ユダヤに在^{ある}者^{もの}の山^{やま}に逃^{のがれ}よエルサレムに在^{ある}
 三 者^{もの}の出^{いで}郷下^{むか}に在^{ある}者^{もの}のエルサレムに入^いななれ^三これ刑罰^{けいせつ}の日^ひにして録^る
 四 れたる事^{こと}のみな應^{こた}らる^二日^ひなり^三其日^{そのひ}に孕^{はら}たる者^{もの}と哺乳兒^{ちのみこ}ある者^{もの}の禍^{わざはひ}
 五 なる哉^{かな}これ地^ちに大^{おほい}なる災^{わざはひ}ありて怒^{いかり}この民^{たみ}に及^{およ}べければ也^{なり}人々^{ひとびと}刀刃^{やいば}に斃^{たふ}
 六 れ且^{また}どら^二りて諸國^{あまつく}に畏^{おそ}れエルサレム^ひの異邦人^{いほうじん}の時満^{ときみ}るまでの異邦人^{いほうじん}に
 七 蹂躪^{ふみあら}さるべし^二また日月星^{ひつきほし}に異象^{あまじ}あるべし地^ちにて諸國^{あまつく}の人^{ひと}哀^{あは}れ海^{うみ}と波^{なみ}
 八 どの濁^{なりどろく}に因^より顛沛^{うろたへ}人々^{ひとびと}危懼^{おそ}つゝ世界^{せかい}に來^{きた}んとする事^{こと}を俟^{まち}惱^{なや}むべし是^{これ}
 九 天^{てん}の勢^{いきほ}ひ震動^{あんな}すべければ也^{なり}其時^{そのとき}人々^{ひとびと}の子^この權威^{けんゐ}と大^{おほい}なる榮光^{えいこう}を以^も
 十 て雲^{くも}に乗^{のり}來^{きた}るを見るべし^二此等^{これら}の事^{こと}の成^{なり}初^{はじ}め時^{とき}に起^おて爾曹^{なんぢら}の首^{かぶ}を翹^あよ
 十一 蓋^{そは}なんぢらの贖^{すくひ}ちかづければ也^{なり}イエス^{たごへ}譬^{たとへ}を彼等^{かれら}に語^{かた}ける^二無花果^{いちじく}と凡^{すべ}
 十二 樹^きを見^みよ^三既に萌^めば爾曹^{なんぢら}これを見^みて自^{みづか}ら夏^{なつ}のはや近^{ちかし}と知^{しる}此^{かく}の如^{ごと}く爾曹^{なんぢら}
 十三 も此等^{これら}の事^{こと}成^{なり}を見^みば神^{かみ}の國^{くに}の近^{ちか}き^三誠^{まこと}に我^{われ}か^二んぢらに告^つん^二此事^{このこと}みな成^{なり}
 十四 までの此世^{このよ}の逝^すざるべし^三天地^{てんち}の廢^{すた}るべし然^{され}ども我^{わがこゝろ}言^{こと}の廢^{すた}る可^べからず^三爾^{なんぢ}

三五 曹^らみづからを慎^{つしめ}よ恐^{おそ}く飲食^{いんじよく}に耽^{ふけ}り世^よ事に累^{たまは}れ爾曹^{なんぢら}の心^{こゝろ}昏迷^{こゝろは}なりて慮^{おも}よ
 三六 らざる時^{とき}に此日^{このひ}なんぢらに臨^{のぞ}み^三これ機檻^{わな}は如^{ごと}く遍^{あまね}く地^ちの上^{うへ}に居^{すま}る者^{もの}に臨^{のぞ}
 三七 ひべし^三是故^{このゆゑ}に爾曹^{なんぢら}傲^{おご}りて此臨^{このぞ}んとする凡^{すべて}の事^{こと}を避^ひまた人^{ひと}の子^この前^{まへ}に立^{たち}
 三八 得^{うる}やう^二常に祈^{いの}れ^三イエス^{ひる}晝^{ひる}の殿^{みや}にて教^{をし}へ夜^{よる}に出^いて橄欖^{かんらん}と云^いる山^{やま}に宿^{やどり}
 三九 民^{たみ}みな彼^{かれ}に聽^きんとて朝^{あさ}はやく殿^{みや}に來^{きた}れり
 四十 逾越^{すげ}と云^いる除^{たれ}酵^{いれぬ}節^{のいはひ}近^{ちか}けり^二祭司^{さいし}の長^{なが}學者^{がくしや}たち如何^{いかに}して
 四一 かいエスを殺^{ころ}さんと窺^{うかが}ふ^二但^{ただ}民^{たみ}を畏^{おそ}れ^三祭司^{さいし}の長^{なが}學者^{がくしや}たち如何^{いかに}して
 四二 テと稱^とるユダ^いに入^いぬ^四かれ祭司^{さいし}の長^{なが}たちと殿司^{みやもり}等に往^{むか}如何^{いかに}してかいエス
 四三 を付^{わた}さんと語^{かた}ければ^五彼等^{かれら}喜^{よろこ}びて銀子^{ぎんす}を予^{あた}んと約^{やく}す^六ユダ^{うたが}諾^{うけが}ひて人々^{ひとびと}
 四四 居^ゐる時^{とき}にイエスを付^{わた}さんと機^{をり}を窺^{うかが}へり^七さて除^{たれ}酵^{いれぬ}節^{のいはひ}なる逾越^{すげ}の羔^{こひつじ}
 四五 を殺^{ころ}すべき日^ひになりければ^八イエス^{ペテロ}とヨハ子^{よはこ}を遣^{つか}さん^とて曰^いける^九
 四六 往^{むか}て我^{われ}儕^らが食^たせん爲^{ため}に逾越^{すげ}を備^{そな}へ^九かれら答^{こた}へる^二何處^{いづこ}に之^{これ}を備^{そな}へんと爲^{する}
 四七 か^十イエス^い曰^いける^二城下^{じやうか}に入^いる^三水^{みづ}を盛^いたる瓶^{かめ}を擲^なる人^{ひと}なんぢらに遇^あべし

十一 其入どころの家に隨ひ往て十二家の主に師なんぢに云われ弟子と共に逾越
 十二 を食すべき客房の何處に在やと曰十三然すれば彼らなへたる大なる樓房を
 十三 示すべし其處に備よ 彼等ゆきてイエスの曰給ひたる如く遇しかる逾越
 十四 の備を爲り 時至ければイエス食に就ぬ 又使徒も共に就たり 十五イエス彼
 十五 等に曰ける 我苦難を受る先に爾曹と共に此逾越を食すること大に願へ
 十六 り 十六われ爾曹に告ん之を神の國に成までの復これを食べせ 十七イエス杯を
 十八 どり謝して曰ける 之を取て互に分よ 十八我なんぢらに告ん神の國の來る
 十九 までの葡萄より造しものを飲じ 十九またパンをどり謝して擘かれらに予て
 二十 曰ける 此の爾曹の爲に予るわが身體なり 我を記ん爲に此を行 二十また食
 二十一 してのち杯をどり曰ける 此杯の爾曹の爲に流す我血にして立る所の新
 二十二 約なり 二十夫われを賣す者の手の我と共に案にあり 二十三人の子の果て定られ
 二十三 たる如く逝ん然ども人の子を賣す人は禍なる哉 二十三かれら此事を爲ん者は
 二十四 誰なる乎と互に問ぬ 二十四また彼等の中にて長たる者は誰なるかと互の争わ

二十五 りき 二十五イエス彼等に曰ける 異邦人の王の其民を支配す又ろの上に權を
 二十六 秉者の恩を施す者と稱らる 然ども爾曹の如是すべからず 爾曹のうち大
 二十七 なる者の幼が如く首たる者の役る者の如なるべし 二十七食に就る者と事る者
 二十八 と孰か大なる食に就る者ならずや 然ども我の爾曹の中に事る者の如し 二八
 二十九 わが患難に於て我と偕に居し者は爾曹なり 二十九我父の我に任せし如く我も
 三十 爾曹に國を任すべし 三十これ爾曹わが國に於て我案に食飲し且位に坐して
 三十一 イスラエルの十二の支派を轄んが爲也 三十一主また曰ける 三十一シモンよシモン
 三十二 よサタン 爾曹を索めて麥の如く簸んとす 三十二然ども爾の信仰絶ざるや 爾
 三十三 の爲に祈れり 爾歸ん時其兄弟を堅せよ 三十三シモン曰ける 三十三主よ我獄に
 三十四 までも死にまでも 爾と共に往んと心を定たり 三十四イエス曰ける 三十四ペテロ
 三十五 我なんぢに告ん今日 鶏なかがる前に爾三次われを識すと云ん 三十五又彼
 三十六 等に曰ける 我財布旅袋履をも帶せて 爾曹を遣しよと云ふ事 三十六の缺たると
 三十七 有しや答ける 無りき 三十七イエス彼等に曰ける 三十七今 財布ある者の之をど

三七 旅袋ある者も亦然り此等を有ぬ者の衣服を賣て亦を買べし我なんぢ
 三六 らに告ん彼は罪人の中に算られて有しと録されたる此言の我に於て應ら
 三五 るべし蓋われを指たる事の必ず成らる可れば也彼ら曰ける主見よ此
 三九 二の刃ありイエス彼等に曰ける足り三九イエス出て例の如く橄欖の出
 四十 往けるに其弟子も從へり其處に至て彼等に曰ける誘惑に入ざるや
 四四一 祈れイエス彼等を離て石の投らるゝはと隔り曲膝いのり曰ける
 四四二 父よ若し聖旨に肯べ此杯を我より離ち給へ然ども我意に非たし聖旨のま
 四四三 とに成たまへ使者天より彼に現れて健壯を添ぬイエス痛く哀み切に
 四五 祈れ其汗の血の滴りの如く地に下たり祈禱より起て弟子に來り彼等
 四七六 が憂て寝れるを見曰ける何ぞ寝るや起て誘惑に入ざるや祈れ如
 四八 此いへるとき許多の人々きたる又十二の一人なるユダと云る者其に先ち
 四九 てイエスに接吻せんと近よれり四八イエス曰けるユダ爾の接吻をもて人
 の子を賣す乎の側に居たる者等事の及んとするを見て曰ける主よ

五十 我儕刃をもて撃べき乎其中の一人祭司の長の僕を撃て其右の耳を削落
 五一 せりイエス答て之を釋せと曰るの耳に擲て醫したりイエス此に來し
 五二 祭司の長殿司および長老等に曰ける爾曹刃と棒とを持來り強盜に當が
 五三 如する乎われ日々に爾曹と偕に殿に在し時に我に手を措こと無りき然
 五四 るに今爾曹の時かつ黑暗の勢なり彼等イエスを執へ曳て祭司の長の
 五五 家に携往りペテロ遙に從ひぬ人々中庭のうちに火を焼て同に坐しけれ
 五六 べペテロも其中に坐したり或婢かれが火の傍に坐せるを見これを熟視
 五七 て曰ける此人も彼と偕に在しペテロ承ずして女よ我これを識すと云
 五八 り頃刻して他の人も亦見て曰ける爾も彼等の一人なりペテロ曰ける
 五九 人よ我の然す約う一時はと過て復はかの人力言ける誠に此人も彼
 六〇 と偕に在し是ガリラヤの人なれば也ペテロ曰ける人よ我あんなの言
 六一 どころを識すと云も果す忽ち鶏鳴ぬ主身を回してペテロを見たまへり
 今日鶏なく前に三次われを識すと云んと主の曰たまひし言をペテロ憶起

六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五

し六二外へ出て痛く哭り○六三イエスを護れる者ども嘲弄して彼を撲六四其目を掩ひ問て曰ける六五爾を撲者誰なるか預言せよ六六また多端の事を言て之を誦れり六六平旦に民の長老、祭司の長、學者ども集りてイエスを集議所に曳往て六七曰ける六八爾もしキリストならば我儕に告よイエス曰ける六九假令われ爾曹に言ども信せざるべし六八又たどひ我なんぢらに詰ども答ざるべし六九今より後人の子の大權ある神の右に坐せん七十皆いひける七一然七二爾の神の子あるかイエス曰ける七三爾曹の言る如く我の是あり七二彼等いひける七四猶證據を須んや我儕みづから其口より聞り

衆人みな起てイエスをピラトに携ゆきニ之を訟いひける七五我儕この人が民を惑し税をカイザルに納ることを禁み自ら王なるキリストと稱るを見たり三ピラトイエスに問て曰ける七六爾のユダヤ人の王なるか答ける七七爾が言る如し四ピラト祭司の長等と衆人に曰ける七八我この人に於て罪あるを見ず五彼等ますます極力いひける七九彼のガリラヤより始て

六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九

遍くユダヤを教へ此處まで来て民を亂せり六ピラトガリラヤと聞て此人のガリラヤ人なる乎を問七其へロデの所管なるを知て之をへロデに遣る此時へロデもエルサレムに在しが八イエスを見て甚だ喜べり蓋各様なる彼が風聲を聞て久く之を見んことを欲ひ且るの奇異なる事を見んと望むたれば也九是故に多言を以て問ければ一〇イエス何を答ざりき十祭司の長學者たち側一一に立て切に彼を訟ぬ一二へロデの士卒と共に彼を藐視嘲弄して華服を衣せ復ピラトに遣れり一三ピラトとへロデ先に仇たりしが當日たがひに親を爲り一四ピラト祭司の長有司および民等を呼あつめて曰ける一五爾曹この人を我に携來りて民を亂したる者なりと爲せり我なんぢらが訟る所を以て爾曹の前に鞫ども其罪あるを見ず一六へロデも亦然り爾曹をへロデに遣せと彼もイエスが行事の死罪に當を見ざりき一七故にわれ苦ちて之を釋さん一八蓋この節期に必ず一人を釋すと有べなり十八彼等みな一齊よべりて此人を除き一九バラバを我儕に釋せと曰十九彼の城下に

二十 揆きを起おこし人ひとを殺ころして獄いりに入いりし者ものなり二十故ゆゑにピラトピラトのイエスを釋ゆるさんと欲ほ
 二一 ひ復またかれらに曰いひしかと二二 かれら呼よりて之これを十字架じよじかに釘つけよ十字架じよじかに釘つけよと
 二二 曰いふ三三 ピラトピラト三次みたびいひけるい彼の何なにの惡事あくじを行せしや我われいまだ彼の死罪あざいある
 二三 を見みざれば苦むちて釋ゆるさん三三 彼等かれら厲はげく聲こゑをたてて彼かれを十字架じよじかに釘つけんと言いふ
 二四 れり遂つひに彼等かれらと祭司さいしの長ながの聲勝こゑかちたり二四 ピラトピラトの求ねがひの如ごとく擬さだめて二五 彼等かれらが
 二五 求ねがへる一揆いつきを起おこし人ひとを殺ころして獄いりに入いたる者ものを釋ゆるし其意そのこゝろに任まかせてイエスを付わた
 二六 せり二六 彼等かれらイエスを曳往ひきゆくとき田間ゐなかより出來いでれるクレテクレテのシモンシモンと云いへる者もの
 二七 を執とり其それに十字架じよじかを負おせてイエスに從したがへせたり二七 衆たみの民たみおよび婦等むすめも從したが
 二八 へ婦等むすめの彼かれを哭なかぬ二八 イエスイエス彼等かれらを願ねがひひけるいエルサレムエルサレムの女子むすめよ
 二九 我わが爲ために哭なかぬ惟ただおのれと己おのが子この爲ために哭なかぬ二九 産うまざる者ものいまだ孕はらざるの胎たい
 三〇 いまだ哺のせざるの乳ちの福さいはひなりと曰いはん日ひきたらん三〇 當時そのとき人々ひとびと山やまに對むかひて我われ
 三一 の上うへに壓たぶられ陵をかに對むかひて我われ儕らを掩おほへと曰いはん三二 もし青木あをきにさへ如此かくなさば枯木かれき
 三二 の如何いかせられん〇三三 又他またに二人ふたりの罪人つみびとをイエスと偕ともに死罪あざいに處おこなはんとて

三三 曳往ひきゆくり三三 彼等かれらクラニオンクラニオンと云いへる所ところに至いたりて此こゝにイエス及び罪人つみびとを十字架じよじか
 三四 に釘つけぬ一人ひとりをイエスの右みぎ一人ひとりを左ひだりに置おく三三 イエス曰いけるい父ちちよ彼等かれらを赦ゆるし
 三五 給たまへ其爲そのなすどころを知あるが故ゆゑあり彼等かれら圖とをしてイエスの衣服いふくを分わかつ三三 人
 三六 々ひと立たてイエスを見みたり有司やくにんも亦また嘲あざわらふて曰いけるい彼の他人たじんを救すへり若もしキ
 三六 リストリスト神かみの選えらぶる者ものあらば自己みづかを救すべし三六 兵卒へいそも亦またかれを嘲あざ弄わらし來きたり酢す
 三六 を予あたへ三六 爾なんぢもしユダヤ人ユダヤ人の王わうあらば自己みづかを救すへと曰いはん三六 又またギリシヤギリシヤロマ
 三六 ンンの文字もじにて此これのユダヤ人ユダヤ人の王わうありと書かはる罪標つとふたを其上そのうへに建たたり〇三九
 三九 懸かけられたる罪人つみびとの一人ひとりイエスを譏そしりて曰いけるい爾なんぢもしキリストキリストあらば己おのれ
 四十 我われ儕らを救すへ四十 他ほかの一人ひとりこたへて彼かれを責いめ曰いけるい爾なんぢおなじく審判ささけを受うけ
 四一 たら神かみを畏おそる乎か四一 我われ儕らの當然たうぜんあり行せとの報むくいを受うかれと此人このひとの何なにも不よからぬ
 四二 事ことの行なさるし也なり四二 斯かくてイエスに曰いけるい主あひよ爾國みくにに來きたらん時とき我われを憶おもたせ
 四三 〇四三 イエス答こたへるい誠まことに我われあんぢに告つげん今日けふあんぢの我われと偕ともに樂園パラダイスに在ある
 四四 〇四四 時約ときろ十二時じふにじころより三時さんじに至いたるまで遍あまく地ちのうへ黒暗くらくみと爲なれり四五

四六 日光くらみ殿の内の幔真中より裂たり四六一エス大聲に呼り曰ける父よ
 四七 わがたましひなんぢに託く如此いひて氣絶ゆ四七 百夫の長この成し事を見て神を
 四八 我靈を爾の手に託く如此いひて氣絶ゆ四七 百夫の長この成し事を見て神を
 四九 崇め曰ける誠まことに此人の義人ありき四八 之を觀んとて衆れる衆人み亦此わ
 五〇 りし事等を見て鷹を拊て返れり四九 イエスの相識の人々およびガリラヤよ
 五一 り隨ひし婦ども遠く立て此等の事を見たり〇 五十 議員あるヨセフと云る善
 五二 かつ義ある人あり五二 彼等の評議と行爲を肯いざりき是のユダヤのアリマ
 五三 タヤの邑の人にて神の國を慕る者あり五二 此人ピラトに往イエスの屍を乞
 五四 て五三 之を取下し布にて裹いまだ人を葬し事あき石の鑿たる墓に置り五四 此
 五五 日の備節日あり且安息日近きぬ五五 ガリラヤよりイエスと偕に來りし婦た
 五六 ち後に隨ひて其墓と屍の置れたる狀を見たり五六 彼等かへりて香物と香膏
 五七 を備へ置て誠まことに従ひ安息日を休めり

三二 七日の首日の味爽に此婦たち備置たる香物を携て墓に來しに
 三三 彼の婦等も偕に來れりニ 彼等石の墓より轉たりしを見て 三 入れれば主イ

四 エスの屍を見ず 四 之が爲に躊躇をりしに輝る衣服を着たる二人の旁に
 五 立ち五 かれら懼て面を地に伏けれ 五 其人いひける爾曹何ぞ死たる者の
 六 中に生たる者を尋るや 六 彼れ此に在ず甦りたり彼ガリラヤに居しとき爾
 七 曹に語て人の子の必ず罪ある人の手に付され十字架に釘られ第三日に甦
 八 る可と云たりしを憶起よ 八 彼等らの言を憶いで 九 墓より歸て此等の事を
 九 み亦十一の弟子と他の弟子等に告 十 此等の事を使徒に告たる者のマгда
 一〇 ラのマリアヨハンナヤコブの母なるマリア又他に偕に在し婦等あり十二
 一一 使徒らの語れるを虚誕と意ひて信せず十二 ペテロ起て趨り墓に往かままり
 一二 て墓布のかたよせ在を見て其遇とてその事奇みつゝ歸れり〇 十三 當日二
 一三 人の弟子エルサレムより三里ばかり隔りたるエマヲと云る村に往けるに
 一四 互に此等の所遇どもを語あへり十五 語り論ずる時にイエス自ら近づきて
 一五 偕に往り十六 然と彼等の目迷されて知ことを得ざりき十七 イエス曰ける爾
 一六 曹行つゝ互に哀み談論こと何ぞ乎十八 一人のクレオバと云る者答け

十九 爾のエルサレムの旅人にして獨このころ有し事を知らざる乎十九 答ける
 二十 何事や之に曰けるハナザレのイエスの事あり此人の神と萬民の前に
 二十 於て行と言に大なる能ある預言者なりしが二十 祭司の長と有司等かれを死
 二一 罪に解して十字架に釘たり二三 我儕イスラエルを贖ん者ハ此人なりと望
 二二 たりし又ろれ而已ならず此等の事の成しより今日の第三日あるに二三 我儕
 二三 の中なる或婦たち我儕を驚駭せり彼等朝はやく墓に往二三 一の屍を見ずし
 二四 て來り天使あらんれて彼ハ甦れりと云るを見たりと告二三 又我儕と偕に
 二五 在し者も墓に往たるに婦の言る如にて且かれを見ざりき二三 イエス曰ける
 二六 ハ預言者の凡て言たる事を信する心の遅き愚なる者よ二三 キリストハ此等
 二七 の難を受て其榮光に入べきに非や二三 故にモーセより凡の預言者を始すべ
 二八 ての聖書に於て己に就ての事の解明されたり二三 彼等ゆく所の村に近きけ
 二九 るに彼ゆき過んと爲る狀をさせば二三 彼等勸め曰けるハ日昇きて暮に及ぬ
 三十 我儕と偕に止れ彼いりて止る二三 共に食に就る時パンをとり謝して擘かれ

三二 かに予ければ二三 二人の者の目瞭かに爲て彼を識り又忽ち其目に見ず爲り
 三三 彼等たがひに曰けるハ途間にて我儕と語かつ聖書を解開ける時われら
 三四 が心熱しに非ずや二三 此時かれら起てエルサレムに歸り十一の弟子および
 三五 同なる人の集り居に遇三四 一人等の曰けるハ主實に甦りシモンに現れ
 三六 たり三五 二人の者も途間にて所遇とパンを擘たまへるに因て識たる事を語
 三七 たり三六 此事を語れる時イエス自ら其中に立て曰けるハ爾曹安かれ三七 かれ
 三八 ら駭き懼れて見どころの者を靈ならんと意り三八 イエス曰けるハ爾曹何ぞ
 三九 駭くや何ぞ心に疑ひ起るや三九 我手わが足を見て我なるを知われを摸て視
 四十 よ靈ハ我が在を爾曹が見ごとく肉と骨ハ有ざる也四十 如此いひて其手足を
 四一 示せしに四一 彼等喜べども猶信せず異める時にイエス此に食物ある乎と曰
 四二 ければ四二 爰たる魚と蜜房を予ふ四三 之を取て其前に食せり四四 又彼等に曰
 四五 けるハモーセの例預言者の書また詩の篇に録されたる我事につく凡の言
 の必らず應べきハ我もと爾曹と偕に在しとき語れる所なり四五 是に於て聖

四六 書を悟せんとて其聰を啓き 四六 曰けるハ已に斯録されたり如此キリストハ
 四七 苦難をうけ第三日に死より甦るべし 四七 又その名に託て悔改と赦罪ハエ
 四八 ルサレムより始まり萬國の民に宣傳られん 四八 爾曹ハ此等の事の證人なり
 四九 我わが父の誓のものを爾曹に遺らん爾曹上より權を授らるゝ迄ハエル
 五〇 サレムに留れ 五〇 イエス彼等を導きベタニヤに至り手を舉て彼等を祝す 五〇
 五一 祝する時かれらを離れ天に擧られたり 五一 彼等これを拜して甚く喜びエル
 五二 サレムに歸り 五二 恒に殿に入て神を頌美また祝謝せりアメン

新約全書路加傳福音書 終

二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五

新約全書約翰傳福音書

二 太初に道あり道ハ神と偕にあり道ハ即ち神なりニこの道ハ太初に
 三 神と偕に在き 三 萬物これに由て造らる造れたる者に一として之に由らで
 四 造をしハ無 四 之に生あり此生ハ人の光なり 五 光ハ暗に照り暗ハ之を曉ら
 五 ざりき 〇 六 偕こゝに神ハ遣し給へるヨハ子と云る者ありセウの來りしハ
 六 證の爲あり即ち光に就て證を作すべて人をして己に因て信せしめんが
 七 爲なり 八 彼ハ光に非ず光に就て證を作ん爲に來れり 九 夫すべて人ハ照
 十 ず眞光ハ世に來れり 十 一 加れ世にあり世ハ彼に造れたるハ世これに識ず
 十一 一 加れ己ハ國に來しに其民これを接ざりき 十二 彼を接るハ名を信せし者に
 十二 一 權を賜ひて此を神ハ子と爲り 十三 斯る人は血脈に由に非ず情慾に由に非
 十三 一 ず人の意ハ由に非ず唯神に由て生れし也 十四 一 道肉體と成て我儕の間
 十四 一 寄れり我儕の榮を見に實に父の生たまへる獨子の榮にして恩寵と眞理
 十五 一 にて充り 〇 十五 一 一 子之が證を作て呼いひけるハ我さきに我ハ後來らん

者ものの我われより優まされる者ものあり蓋おほ我われより先さき在ありし者ものなれば也なりと言いひしこのひと此人このひとなり
十六我われ儕らみな彼かれみ充み満ちたる其中そのうちより受うけて恩めぐみ寵めぐみを加くはへる十七律おきて法てのモ一
十八セよに由より傳つたはめぐみ恩めぐみ寵めぐみと眞まこと理ことのイエスキリストより由より來きたり十八未いまだ神かみを見みし
十九人ひとあらず惟ただらみ給たまへる獨ひとり子ごすなわち父ちちの懷ふところに在ある者もののみ之これを彰あせり十九ユ
二十ダヤ人ひと祭さい司しとレビレのひと人ひとをエルサレムエルよりヨハ子の所ところに遣つかはなし爾なんぢ誰たれぞと問とは
二十一しめけるとき證あかしせること左さの如ごとし二十かれ諱かくところ言いひ顯あらはして我われのキリス
二十二トあらあらずと明あかあかに曰いひ二十また問とひける然ららずと答こたたり二十是こゝに於おいて彼等
二十三ふ又またなんぢの彼かれれ預よ言げん者しやある乎かと問とひし然しからずと答こたたり二十是こゝに於おいて彼等
二十四また問とひける爾の誰たれなるか我われ儕らを遣つかはしる者ものに我われ儕らが答こたへなし得えるやう我われ儕
二十五お告つげよ爾なんぢみづから如何いかに謂いふヨハ子曰いひけるは我われの即すなはち主あれ道みちを直なせよ
二十六と野のに呼よぶ人ひとの聲こゑあり預よ言げん者しやイザヤの言いふが如ごとし二十四の遣つかはしられたる人々
二十七のババリサイサイの人ひとなり二十五彼等かれら又またヨハ子こを問とひて曰いひける然ららず然ららず然ららず然ららず
二十八に非あらずエリヤエに非あらず彼かれの預よ言げん者しやも非あらずして何なにぞバプテスマばを施ほすや二十六

二十七ヨハ子こ答こたへ曰いひける我の水みづを以もてバプテスマばを授さづく然しかも爾曹なんぢらが知あらざる所ところの
二十八もの一人ひとり爾曹なんぢらの中に立たて二十七我われに後おく來きたりて我われに優まさる者ものといはるは是これなり我われの
二十九其履そのくつ紐ひもを解とくにも足たらざる者ものなり二十八此事このことのヨハ子こはバプテスマばを施ほす二十九ヨ
三十ルダンの外おなるベベタニヤニにて有あり也なり○二十九明日ある日ひヨハ子こイエスエは己おのれに來きたるを
三十一見みて曰いひける世の罪つみを任かみ三十一神かみの羔こひつを觀みよ三十一我われに後おく來きたらん者ものの我われより優
三十二れる者ものなり蓋おほ我われより以もて前まに在ありし者ものなれば也なりと我われ言いひしこのひと此人このひとあり三十二われ素
三十三より此このひと人ひとを識あら三十三然しかも我われ來きたりて水みづを以もてバプテスマばを施ほす三十三彼かれをイスラエルの
三十四民たみに顯あらは三十四さんが爲ためあり三十四ヨハ子こまた證あかしして曰いひける我の靈たまの鳩はとの如ごとく天てんよ
三十五り降くだりて其上そのうへに止とまるを見みたり三十五我われの彼かれを識あら三十五れと我われを遣つかはし水みづにてバプ
三十六テスマばを施ほさしめし者ものわれに曰いひける爾靈たまくだりて其上そのうへに止とまるを見みん彼
三十七の聖せい靈れいを以もてバプテスマばを施ほす者ものあり三十六我われこれを見みて其神そのかみの子こたるを證あかし
三十八せり三十八明日ある日ひまたヨハ子こ二人ふたりの弟子でしと偕ともに立たち三十八イエスの行あるを見みて神かみの羔こひつを
三十九觀みよと曰いふ三十九如此かくいへるを弟子でし聞きてイエスエも從したがひ往ゆり三十九イエスエ彼等かれらの從したがへ

三九 爾を回顧かへりみて爾曹なんぢらなにを求もとむるやと彼等かれらに問とよこたへてラビいづく何處どこに住やまるやと曰いふ
 四〇 ラビを譯とべ師あと云いふの義ぎなり三九 イエス彼等かれらに來きたり觀みよと曰いふたまひけれつひば遂つひ
 四一 小往あきて其住そのやまり給たまふ處ところを見みて是日このひどもに住やまれり時ときの晝ひるは四時あじころなりき
 四二 ヨハ子きやうだいれ曰いひし言ことを聞きてイエスに從したがへる二人ふたりれ者ものの其一人そのひとりのシモンペテロ
 四三 此兄弟きやうだいアンデレあり四二 かれ先まづろれ兄弟きやうだいシモンあひに遇あひて曰いけるわれら我儕わメツシ
 四四 ヤに遇あひメツシヤを譯とべキリストすなはなり四二 即すなはち彼かれをイエスつれに携つれ往ゆしにイエ
 四五 ス視みて之これに曰いけるなんぢのヨナこの子こシモンなり爾なんぢのケバと稱よらるべしケバ
 四六 を譯とべペテロなり〇四三 明日あるひイエスガリラヤに往ゆんとしてピリポにあひ我
 四七 小從したがへと曰いへり四四 ピリポのアンデレとペテロの住するベテサイダと云いふ邑まちの
 四八 人ひとなり四五 ピリポナタナエル小遇あひて曰いけるわれら我儕わ律法おきての中うちおモーセが載のた
 四九 るところ預言者等よげんしやたちの記あるしところの者ものに遇あひ即すなはちヨセフの子ナザレのイエス
 五〇 なり四六 ナタナエル曰けるいのナザレより何なにの善者よきものいでん乎やピリポ彼曰いけ
 五一 くるきたり觀みよ四七 イエスナタナエルの己おのが所もと來きたるを見みかれを指さして曰いける

四八 小視みよ眞まことのイスラエルの人ひとにして其心そのこころ詭譎いつはりなき者ものなり四八 ナタナエルイエス
 四九 に曰いけるい如何いかにして我われをあり知したまふ乎やイエスこれ之こに答こたへて曰いけるいピリポが
 五〇 爾なんぢを召よざる先さきに無花果樹いちじくの下あたに爾なんぢの居をるを見みたり四九 ナタナエル答て曰いけ
 五一 くるいのラビなんぢの神かみの子こなり爾なんぢのイスラエルの王わうなり五〇 イエス答て曰いけるい
 五二 爾なんぢが無花果樹いちじくの下あたに居をるを我われ見みしと云いふ因より爾なんぢ信あんずるか此これよりおほい大おほな
 五三 事ことを爾なんぢみるべし五二 又またいひけるい我われまことまことに實まことに爾曹なんぢらに告つげん天てんひらけて
 五四 神かみの使つかひ等たちの子この上うへに陟降のぼりくだりするを見みん
 五五 第三日みつかめにガリラヤのカナにて婚筵こんえんありしがイエスの母ははも此こゝに居をり
 五六 ニイエスと其弟子そのでしも婚筵こんえんに請まねか 葡萄酒ぶどうしゆ罄つければ母ははイエスが曰いけるい彼
 五七 等に葡萄酒ぶどうしゆなし四 イエス彼曰いけるい婦をんなよ爾われと我われの與なあらんや我時わがとき
 五八 未いまだ至いたらず五 母はは僕等わがしもべに向むかひて彼かれが爾曹なんぢらに命めいずる所ところの事ことを行せよと曰いおけ
 五九 六 ユダヤの人ひとの潔きよめの例れいに從したがひて四五斗と盛との石いしがらみ六かしこに備そな有ありしが七 イ
 六〇 エス僕等わがしもべも水みづを甕かめに満みせよと曰いければ彼等かれら口くちまで満みせたり八 又またこれを今いま

七 由て生る者靈なり七 我なんぢに新に生るべき事を言しを奇と爲な
 八 かれハ風の己が任に吹なんぢ其聲を聞ども何處より來り何處へ往を知ず
 九 凡て靈に由て生る者も此の如し九 ニコデモ答て如何で此事あらん乎と
 十 曰十 イエス答て曰けるハ爾ハイスラエルの師なるに猶この事を知ざる乎
 十一 誠に實に爾に告ん我儕知し事をいひ見し事を證するに爾曹ハ我儕の證
 十二 を受ず十二 若わを地の事を言に爾曹信せず況て天の事を言んに何で信
 十三 ずることを爲んや十三 天より降り天にをる人の子の外に天に升し者なし十四
 十四 モーセ野に蛇を擧し如く人の子も擧らるべし十五 凡て之を信する者に亡る
 十五 こと無し十六 永生を受しめんが爲なり十六 凡て之を信する者に亡る
 十六 賜は世に世の人を愛し給へり此の凡て彼を信する者に亡ると無し十七 永
 十七 生を受しめんが爲なり十七 神の其子を世に遣し給へるの世を審判んとに非
 十八 ず彼に由て世を救んが爲なり十八 彼を信する者の審判れず信せざる者の既
 十九 に審判れたり蓋神の生たまへる獨子の名を信せざるに因十九 罪の定まる

二十 所以ハ光世に臨しに入るの行の惡に因て光を愛せず反て暗を愛すれば
 二十一 也二十 凡て惡をなす者の光を惡み其行を責られざらんが爲に光に就らず
 二十二 眞理を行ふ者の其行の顯れんが爲に光に就る蓋神に遵て行へば也〇二三
 二十三 此後イエス弟子とユダヤの地に至り偕に彼處に留りてバプテスマを施す
 二十四 二三 ヨハ子も亦サリムに近きアイノムに在てバプテスマを施す彼處ハ水お
 二十五 ぼさが故なり人々來りてバプテスマを受たり二十四 此時ヨハ子の未だ獄に入
 二十六 られざりき二十五 ヨハ子の弟子とユダヤ人と潔事に就て争辨ありけるが二十六 彼
 二十七 等ヨハ子に來りて曰けるハ視よ爾と偕にヨルダンの外に在て爾が證
 二十八 せし者バプテスマを施すに皆かれに來りニ七 ヨハ子答て曰けるハ人の天
 二十九 より賜ふに非ざれば受ること能ざる也ニ八 我ハキリストに非ず惟るの先に
 三十 遣されし者なりと言し事を證する者の爾曹なりニ九 新婦をもてる者の新郎
 三十一 なり新郎の友たちて其聲を聞べ之に縁て喜び多し我ハ喜ぶ満ること
 三十二 を得たり三十 彼は必ず盛んになり我ハ必ず衰ふべし三十一 天上より來る者の萬

物の上ものかみにあり地ちより出る者ものの地ちに屬つうの言いどころも地ちの事ことなり天てんより來きたる者ものは萬物ばんぶつの上かみに在あり三三 彼かれの自みづから其見そのみしどころ聞きし所ところの事ことを證あかしと爲なす其證そのあかしを受うける者ものなし三三 彼の證あかしを受うけし者ものの印いんをもて神かみの眞まことなる事ことを證あかしす三三 神かみの遣つかはしし者ものの神かみの言ことを語かたる蓋そほ神かみこれに靈みたまを賜たまひて限かぎりなけれなば也なり三五 父ちちの子こを愛あいして萬物ばんぶつを其手そのてに授さづけたり三六 子こを信あんずる者ものの窮かぎりなき生命いのちを之こに從したがはる者ものの生命いのちを見みることを得えじ且かつ神かみの怒いかりの上うへに留とどまらん

三四 主あるのおのれの弟子でしを收とれること又またバプテスマを施ほせることヨハ子よよりも多おほしとパリサイの人の聞きしを知しる然されど其實そのじつのイエス自みづからバプテスマを施ほせるに非あらず弟子でしこれを行なすなり三 其時そのときユダヤを去さりて復またガリラヤに往ゆく四 サマリアを經へずして行ゆくこと能あたはず遂つひにサマリアのスカルと云いふ邑まちに至いたり此邑このまちのヤコブの子こヨセフに予あたへし地ちに近ちかし六 此こにヤコブの井ゐありイエス行途たびの疲つかれにて其井そのゐの傍かたはらに坐ませり時ときの晝ひるの十二時じふにじでるなり七 一人ひとりのサマリアの婦をんな水を汲くんとて來きたりけれなばイエスの婦をんなに向むかひ我われに飲のませよと

九八 曰いハ蓋おほ弟子でしたち食物あじふを買かはしために邑むらへ往ゆて在をらざりし故ゆゑなり九 サマリアの婦をんないひけるなんちユダヤ人びとにして何なにぞサマリアの婦をんななる我われに飲のむことを求もとむるや此このユダヤ人びととサマリアの人ひととの交際まじはりを爲なされなば也なり十 イエス答こたへて曰いけるなんち爾なんちもし神かみの賜たまはる我われに飲のませよといふ者ものの誰たれなるを知あらなんち爾なんちわれに求もとむる然さらば活水いけのみづを爾なんちに予あたへし十二 婦をんなイエスに曰いけるなんち主あるよ汲器つるべなく井ゐも亦また深ふかし爾何處なんぢいづこより汲くみて其活水そのいけのみづを有もるか十二 この井ゐの我儕われらの先祖せんぞヤコブの予あたへし所ところなり彼かれも其子そのこも亦また畜たくまでも皆みなこれを飲のみたり爾なんち彼かれよりも勝すぐれし者ものならん乎や十三 イエス答こたへて曰いけるなんち凡すべて此水このみづを飲のむ者もののまた渴かわん十四 然されど我われあたふる水みづを飲のむ者ものの永遠とこしほなく事ことなし且かつわが予あたへし水みづの其中そのうちにて泉いづみとなり湧出わきいでて永とこしほ生いのちに至いたるべし十五 婦をんないひけるなんち主あるよ我が渴かわくことなく亦また此の處ところに水みづを汲くみ來きたらぬ爲ためのの水みづを我われに予あたへよ十六 イエス曰いけるなんち爾なんちゆきて夫をを呼よび來きたれ十七 婦をんなこたへて曰いけるなんち我われに夫をなしイエス曰いけるなんち夫をなしと言いはるなんち理ことわりなり十八 蓋おほさるなんち曩さきに五人ごにんの夫をありて今いまある者ものの爾なんちの夫をに非あらず爾なんちの言いひ眞まことなり十九 婦をんな

二十 いひけるの主よ我なんぢを預言者と知り我儕の列祖の此山にて拜し
 二一 に爾曹の拜すべき所のエルサレムなりと曰二イエス曰ける婦よ我を信
 二二 せよ唯に此山のみならず亦エルサレム而已にも非ずして爾曹父を拜すべ
 二三 き時きたらん二爾曹の拜する者を爾曹の知す我儕の拜する者を我儕の知
 二四 ろの救のユダヤ人より出るが故なり二眞の拜する者靈と眞を以て父を拜
 二五 する時きたらん今今の時になれり夫父の是の如く拜する者を要め給ふ二四
 二六 神の靈なれば拜する者もまた靈と眞をもて之を拜すべき也二五婦いひける
 二七 のキリストと稱するメツシヤの來らん事を知かれ來らん時凡の事を我儕に
 二八 告ん二六イエス曰ける爾と語る所の我の其なり二七時に弟子きたりて彼の
 二九 婦と語れるを奇みけれと其何を求るや又なに故これと語れるか問る者も
 三〇 無りき二八婦の水瓶を遺して邑にゆき人々に曰ける二九我すべて行し事
 三一 を我に告し人を來りて觀よ此のキリストならず乎三〇是に於て人々邑を出
 三二 てイエスの所に來る三〇の間に弟子かれに請てラビ食し給へと曰ければ

三三 イエス彼等に曰ける我に爾曹の知ざる食物あり三三弟子たがひに曰け
 三四 るの食物を彼に饋し者誰なる乎三四イエス彼等に曰ける我を遣し者
 三五 の旨に隨ひ其工を成畢る是わが糧なり三五なんぢら穡時になるに猶四ヶ
 三六 月ありと云ずや我なんぢらに告ん目を舉て觀よはや田の熟て穡時になれ
 三七 り三六穡者の其工錢を受て永 生に至るべき實を積む斯て播者と穡者と同
 三八 に喜べん三七彼播これの穡と云るの之に就て眞なり三八我なんぢらの勞せ
 三九 ざりし所を穡せんとして爾曹を遣せり他の人々勞せしにより爾曹の其勞
 四〇 したる果を受たり三九かの婦わが行し凡の事を彼われに告しと證せし言に
 四一 因て其邑のサマリア人おほくイエスを信せり四一是に於てサマリアの人イ
 四二 エスの所に來りて偕に留り給はん事を求しかバイエス此に二日留れり四
 四三 彼の言に因て信せし者前よりも多かりき四二かれら婦に曰ける今なんぢ
 四四 の言し事に因て信するに非ず我儕みづから聞て此の誠に世の救主と知た
 四五 れべ也〇四三二日過ぎてイエス此を去ガリラヤに往り四四蓋かれ自ら預言者

四十五
 の本土ふるさとおて尊たよむるゝ事ことなしと言いひしに因よるガリラヤガリラヤに至いたりし時ときガリラヤの
 人々ひとびと彼かれを接むかへたり蓋おほさきに節筵いはいの時ときイエスのエルサレムエルサレムにて行おこなひし凡すべての事こと
 を彼等かれらもりの節筵いはいに往ゆて之これを見みたれば也なり四十六
 此こゝの曩さきに水みづを酒さけに爲せし處ところなり時ときに王わうの大だい臣じんの子こ病やまひお係かりてカペナウカペナウン
 に在ありければ四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 二の奇ことなるわざ跡あとのイエスユダヤユダヤよりガリラヤガリラヤに至いたりて行なるなり

第五章

二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 第五節 厥その後のちユダヤ人びとの節筵いはいありければイエスエルサレムエルサレムに上のぼりニエル
 サレムサレムの羊門ひつじもんの邊へどりにへブルの方言ことばにてベテスダベテスダといふ池いけあり此池このいけに五の
 廊らうあり三のちなかに病やめるもの者めしひ者あしなへ跛者おどろへまた衰おとろへたる者ものなど多おほく臥ふしゐて水の動うごを
 待まちり四のちてんの使つかひ時とき々ごと池いけに下くだりて水を動うごすとあり水の動うごるのち先まちて池いけに
 入いりし者ものの何なにの病やまひによらず愈いたり五
 三十八年病やまひたる者もの一人ひとかして在ありニ
 エス彼かれが臥ふしをるを見みて其病そのやまひの久ひさしきを知しり
 病やめる者ものこたへけるあの主あの動うごるとき我われを扶たすけ池いけに入いる人ひとなし我われいらん
 とする時ときの他ほかの人ひとくだりて我われより先まに入いる
 取とりて行いく九のちひの刻ときに愈いすなはち床とこを取とりて行いり此日このひの安やす息そく日にちな
 りき十
 十一
 十二
 十三
 十四
 新約全書 約翰傳第五章 自一至十四節 二百五十九

十五 殿にて其人に遇いひけるの視よ爾すでに愈たり復罪を犯こと勿れ恐く
 十六 エスなりと告^{十六}是に於てユダヤ人イエスを窘迫て殺さんと謀る蓋かれが
 十七 此事を行し安息日なりければ也^{十七}イエス彼等に答ける我父の今に至
 十八 るまで働さ給ふ我もまた働くなり^{十八}此に因てユダヤ人いよ^{十八}イエスを
 十九 殺さんと謀るの安息日を犯すのみならず神を己が父といひ己を神と齊
 二十 すればなり^{十九}是故にイエス彼等に答て曰ける誠^{二十}に實に爾曹に告ん子の
 二十一 父此行ふ事を見て行ふ^{二十一}何事をも行ふこと能^{二十一}蓋すべて父此行ふ事
 二十二 を子も亦行へばなり^{二十二}父の子を愛し凡て己此行ふ所^{二十二}此事を彼に示す爾曹
 二十三 をして奇^{二十三}ましめん爲にか^{二十三}此事等より更に大なる事を彼に示さん^{二十三}子の父
 二十四 の死し者を甦^{二十四}らせて生しむるが如く子も己^{二十四}に意に従ひて人を生しむべし
 二十五 三^{二十五}りれ父の誰をも鞫^{二十五}ず審判の凡て子に委^{二十五}たり^{二十五}是^{二十五}すべて^{二十五}人をして父を
 二十六 敬ふ如く子をも敬はしめんが爲なり^{二十六}子を敬^{二十六}ざる者^{二十六}の之を遣し^{二十六}父を敬

二四 ならず^{二四}誠^{二四}に實に爾曹に告ん我言をき^{二四}我を遣^{二四}え^{二四}る者^{二四}を信する者^{二四}の永^{二四}生
 二五 を有^{二五}かつ審判に至らず死より生に遷^{二五}れり^{二五}誠^{二五}に實に爾曹に告ん死し者^{二五}神
 二六 の子の聲を聞^{二六}とき來らん^{二六}今の時になれり^{二六}之を聞^{二六}者の生^{二六}べし^{二六}三^{二六}りれ父の
 二七 自ら生を有^{二七}り其如く子にも賜^{二七}て自ら生を有^{二七}たせたり^{二七}また人の子たるに
 二八 因て之に審判するの權威を賜^{二八}へり^{二八}之を奇^{二八}と爲^{二八}こと勿^{二八}ろ^{二八}の墓^{二八}に在^{二八}者^{二八}みな
 二九 其聲を聞^{二九}て出るとき來んとすれば也^{二九}善^{二九}事を行^{二九}し者^{二九}の生^{二九}を得^{二九}に甦^{二九}り惡事
 三十 を行^{三十}し者^{三十}の審判を得^{三十}に甦^{三十}るべし^{三十}われ何事をも自ら行ふと能^{三十}ず聞^{三十}ところ
 三一 に遵^{三一}ひて審判す我審判の公平^{三一}の我わが意^{三一}を行^{三一}ふとを求^{三一}ず我を遣^{三一}え^{三一}る父
 三二 の意^{三二}を行^{三二}ふことを求^{三二}れ^{三二}なり^{三二}もし我事を我^{三二}みづ^{三二}から證^{三二}せば我證^{三二}の眞^{三二}な
 三三 らず^{三三}別に我事を證^{三三}する者^{三三}あり我^{三三}の我事を證^{三三}する證^{三三}は眞^{三三}なるを知^{三三}三^{三三}な
 三四 ん^{三四}なら曩^{三四}に人をヨハ子に遣^{三四}し^{三四}に彼眞理^{三四}の爲^{三四}に證^{三四}を作り^{三四}然^{三四}どわれ人の
 三五 證^{三五}を受^{三五}ず此事を言^{三五}の爾曹の救^{三五}れんが爲^{三五}なり^{三五}ヨハ子は燃^{三五}て光^{三五}れる燈^{三五}なり
 三六 爾曹^{三六}このみて暫^{三六}く其光^{三六}を喜^{三六}べり^{三六}我^{三六}のヨハ子より大^{三六}なる證^{三六}あり蓋^{三六}父の我

三六 賜て成遂しむる事すなはち我行ふ所の事は父の我を遣ししことを證
 三七 すればなり且われを遣しし父も我ことを證せり爾曹いまだ其聲を開ず
 三八 未だ其形を見ず三九の道の道ハ爾曹の心に存ざりき蓋なんぢら其遣しし者を
 三九 信せざるに因て知る也三九なんぢら聖書に永 生ありと意て之を探索こ
 四十 の聖書の我について證する者なり四十爾曹わが所に生を得んがため來るを
 四一 欲す四一われ人の榮を受す四二われ爾曹を知らんぢら其心に神を愛するの
 四二 愛あらざる也四三我ハ吾父の名に靠て來しに爾曹われを接すもし他の人お
 四三 のが名に靠て來バ爾曹これを接ん 爾曹ハ互に人の榮を受て神より出る
 四四 榮を求ざる者なるに何で能信することを得んや 爾曹を父に訴る者と我
 四五 を意ふ勿れ爾曹を訴るもの一人あり即ち爾曹が恃ところのモーセなり四六
 四六 若しモーセを信せば我を信すべし蓋モーセ我事を書たればなり四七若しモーセ
 四七 の書しし事を信せずバ何で我言しことを信せんや
 二 此後イエスガリラヤの湖すなはちテベリアの湖の前岸へ濟しに

三 許多の人々これに隨ふ蓋彼が病し者に行し休徵を見しが故なり三イエス
 四 山に上り弟子と偕に其處に坐せり 時ユダヤ人の踰越の節に邁し五イエ
 五 ス目を擧て多の人の來れるを見てピリポに曰けるは何處よりパンを市て
 六 彼等に食しむ可か 六自ら其爲んとする事を知を彼を試んが爲に如此いへ
 七 る也七ピリポ答けるは銀二百のパンも人ごとに少づ予てなほ足ざるべ
 八 し 弟子の一人即ちシモンペテロの兄弟アンデレイエスに曰けるは九此
 九 に一人の童子あり 辭麥のパン五と小き魚二を有り然ぞこの許多の人に如
 十 何すべきぞ 十イエス曰けるは人々を坐せよ其處に多の草あり約五千人
 十一 は坐せぬ 十一イエスをとり祝謝て弟子に予へ弟子これを坐し人に予ふ
 十二 又此の如にして小き魚をも人々の欲に隨ひて彼等に與たり十二みな飽たる
 十三 後イエス弟子に曰けるハ少も廢らざるやうに其餘の屑を拾集めよ十三彼等
 十四 が食せし彼五の辭麥ハパンハ餘遺の屑を拾集ければ十二の筐に盈り十四人
 十五 々イエスの行し奇跡を見て此ハ誠に世に臨るべき預言者なりと曰十五是に

於てイエス彼等が來り己を執て王に爲んとするを知らず獨にて之を避ふ
 たるび山に入りたり十六日の暮るころ弟子海に下て十七舟に登カペナウンに向
 て海を濟る既に暮れどもイエス彼等に就す十八狂風ふくに因て漸に海わ
 れいだせり十九一里十町ばかり漕出せる時イエスの海を行み舟に近くを見
 て弟子たち懼たり二十イエス曰ける我なり懼るゝ勿れ二十是に於て弟子喜
 びて彼をうけ舟に登けれバ直に其往んとする所の地に着ぬ○三明日かな
 たれ海岸に立し人々昨日弟子の登し舟は外にの舟なく且イエスの弟子と
 偕に舟に登ず弟子のみ往るを知三此時テベリアより外は舟きたり主は祈
 りて人々にパンを食しゝ所は近に著り四人々イエスは此に在す弟子も亦
 在ざるを見て彼等も舟に登イエスを尋ん爲にカペナウンに至れり五湖
 は前岸にて彼に遇曰けるのラビ何時こゝに來り給ひし乎六イエス答て曰
 ける誠に實に爾曹に告ん爾曹は我を尋るの休徴を見し故に非たふパン
 を食して飽たるが故なり七なんぢら壞る糧は爲に勞かずして永生に至

る糧すあち人の子の予る糧の爲に勞くべし蓋父の神かれに印して證す
 れバ也八是に因て人々イエスに曰ける我儕如何ある事を行ハ神の工に
 爲べき乎九イエス答て彼等に曰けるの神の遣しゝ者を信するの即ち其工
 あり十彼等いひける我儕をして爾を信せしむる爲に何れ休徴を爲して
 我儕に示るや何れ工を行ふや三我儕は先祖野にてマナを食へり録して天
 よりパンを彼等に賜へて食しむと有が如し三三イエス曰ける誠は實に爾
 曹に告ん天よりパンを爾曹に賜し者のモーセに非ず今わが父の天より眞
 れパンをもて爾曹に賜ふ三三神はパンの天より降りて生命を世に賜るもれ
 也三彼等いひけるの主よ恒に其パンを我儕に予よ三五イエス曰ける我
 生命はパンあり我に就る者の餓す我を信する者の恒に渴ことあし三六然ど
 我かんぢらが我を見ても信せざる事を爾曹に告たりき三七凡て父は我に賜
 し者の我に就らん我に就る者の我かあらず之を棄す三八わが天より降りし
 己は意は任を行ん爲に非ず我を遣しゝ者の意のまゝを行ん爲なり三九

四十 凡て父の我に賜し者をわれ一をも失はず末日に之を甦らす即ち我を遣
 四一 し父の意あり凡ろ子を見て之を信する者の永生を得われ復これを
 四二 末日日に甦らすべし是われを遣し者の意あればあり是に於てユダヤ
 四三 人等イエスの我の天より降り降しパンありと言しことにつきて譏いひける
 四四 彼が父母の我儕は識どころならずや即ち彼のヨセフは子イエスに非ずや
 四五 然るに何ぞ我の天より降り降しと言やイエス答て曰ける爾曹たがひに譏
 四六 こと勿れ我を遣し父もし引ざれば人よく我に就るを我に就し人の
 四七 末日に我これを甦らすべし預言者の書に人みあ教を神に受んと録され
 四八 たり是故に凡て父より聽て學し者我に就る然ぞ父を見し者あし惟
 四九 神より來る者のみ之を見たり誠に實に我あんぢらに告ん我を信する者
 五〇 の永生あり我の生命のパンなり爾曹の先祖の野にてマナを食しか
 五一 ど死凡て食者をして死ざらしむる者の天より降り降れるパンあり我の
 天より降り降し生るパンあり若人此パンを食ふ窮なく生べし我あたふるバ

五二 ンの我肉なり世の生命の爲に我これを賜へん爰にユダヤ人たがひに爭
 五三 ひ曰ける此人いかで其肉を我儕に賜て食しむる事を得ん乎イエス
 五四 曰ける誠に實に爾曹に告ん若し人の子の肉を食す其血を飲ざれば爾曹
 五五 に生命なしわが肉を食わが血を飲者永生あり我末の日に之を甦ら
 五六 すべし夫わが肉の誠の食物また我血の誠の飲物なりわが肉を食ひ我
 五七 血を飲者我にをり我も亦かれに居生る父われを遣す父に由て我生る
 五八 如く我を食ふ者も我に由て生べしこれ天より降り降れるパンなり爾曹の先
 五九 祖が食たれ尙死しマナの如きものに非ず此パンを食ふ者の窮なく生べ
 六〇 し此等の事のイエスカペタウンの會堂あて教を爲るとき言し所なり
 六一 弟子等のうち多の人これを聞て曰ける此の甚しき言なり誰か能これを
 六二 聽んや弟子の此言について譏をイエス自ら知て彼等に曰ける此言に
 六三 因て礙く乎もし人の子の故の處に升を見れば如何生命を賜る者の靈な
 六四 り肉の益なし我なんぢらに曰し言の靈なり生命なり然ぞ爾曹の中に信

六五 せざる者あり夫イエスの如此いへるの信せざる者の誰おのれを賣す者の
 六六 誰といふ事を元始より知べなり六五 イエスマた曰けるは是故に我さきに我
 六七 父わたへされば人よく我に就るなしと言しなり六六 此後ろの弟子おほく返
 六八 往てイエスと偕に行ざりき六七 之に因てイエス十二の弟子に曰けるは爾曹
 六九 も亦去んと意ふや六八 シモンペテロ答けるは主よ我儕の誰に往んや永 生
 七〇 の言を有る者の爾なり六九 又われら信じて知なんぢの活る神の子キリスト
 七一 なり七十 イエス彼等に答けるは我なんぢら十二人を簡しに非ずや然と其中
 七二 の一人の悪魔なり七二 此のシモンの子イスカリオテのユダを指て言るなり
 七三 彼の十二の一人にしてイエスを賣さんとする者なり
 七四 斯事の後イエスガリラヤを經行りユダヤの中を巡ることを欲ざり
 七五 き蓋ユダヤ人かれを殺さんと謀れば也二偕ユダヤ人の構廬の節ちかづけ
 七六 り三是に於てイエスの兄弟かれに曰けるは爾の行ふ所の事を弟子等に見
 七七 せんが爲此を去てユダヤに往 蓋己を顯さんとして隠に事をあす者あら

五 ず爾これらの事を行ひ己を世に顯せよ五 是ろの兄弟もなほ彼を信せざ
 六 るが故なり六 イエス彼等に曰けるは我時いまだ至らず爾曹の時恒に備れ
 七 り七 世の爾曹を惡こと能ず我を惡うの彼等が行ふ所の惡しと我證すれば
 八 なり八 爾曹この節に上れ我時いまだ至らざれば我いまだ此節あ上らじ九 如
 九 此いひてガリラヤに留れり十の兄弟の往し後イエスも昭然ならずして
 十 隱に節に上る十一節の時ユダヤ人イエスを尋て曰けるは彼の何處に在や十二
 十一 衆多の中にて彼につき各様のとを言争へり或人の彼を善人なりといひ或
 十二 人の否民を感ず者なりと曰十三 然どもユダヤ人を懼るに因て明に彼が事を
 十三 いふ人なし十四 節筵の半ごろイエス殿に上りて教誨ければ十五 ユダヤ人こ
 十四 れを奇み曰けるは此人の未だ學ばず如何して書を識や十六 イエス彼等に答
 十五 て曰けるは我教する所の我教に非ず我を遣しし者の教なり十七 人もし我を遣
 十六 しし者の旨を従はば此教の神より出るか又己に由て言なるかを知べし十八
 十七 己に由て言者の己の榮を求るなり己を遣しし者の榮を求る者の眞なり其

十九 裏に不義なし十九モーセ爾曹に律法を與しに非ずや然と爾曹の中に之を
 守る者なし爾曹なにゆゑ我を殺んと謀るや二十衆人答へて曰ける爾曹に
 憑たり誰か爾を殺すことを謀らん乎二十一イエス答て彼等に曰ける我さき
 二二 一事を行しに爾曹みな奇とせり三モーセ爾曹に割禮を授し其己より
 出に非して先祖より出し者あるが故なり之に因て爾曹割禮を安息日に
 行ふ三三人もしモーセの律法を破ざらんがため安息日割禮を受る時何
 四 ぞ我安息日に人の全身を愈し事怒るや四外貌によりて審判する勿れ
 二五 義審判をもて審判せよ二五此時エルサレムの或人曰ける此の人々の殺ん
 二六 と謀る者に非ずや二六今かれ明にいふ而して之を尤る者あし有司等の彼を
 二七 誠にキリストなりと知ならん乎二七然と我儕此人の何處より來しを知も
 二八 しキリストの來らん時の誰も其何處より來るを知者あからん二八此時イエ
 ス殿にて教をりしが大聲に叫ひける爾曹われを知らず我いづこより
 來るを知されと我の己に由て來しに非ず我を遣し者眞ある者にて爾

二九 曹の知ざる所なり二九我の彼を知り我の彼より出彼の我を遣し者なれ
 三十 ば也三十是に於て彼等イエスを執へんと謀れり然と其時いまだ至ざるが故
 三一 に措手する者なかりき三二民の中おほくの人かれを信じ曰けるキリスト
 三三 の來らん時の行どころの休徴この人より多らん乎三三パリサイの人民等
 三四 のイエスに就て如此ひろかに語あふを聞するち祭司の長等とパリサイ
 三五 の人と彼を執んとて下吏を遣せり三三是に於てイエス曰ける我なほ片時
 三六 なんぢらと偕にをり而して後われを遣し者に往ん三四なんぢら我を尋る
 三六 とも遇べからず我を尋る所へ爾曹きたること能ざるべし三五ユダヤ人相互に
 三七 曰ける我儕の遇ざらん爲に彼の何處へ往んとする乎ギリシヤに散し者
 三六 に往てギリシヤの人を教んとする乎三六彼が語て爾曹われを尋るども遇べ
 三六 からず又わが在所へ爾曹來ること能ざる可と曰し言何ぞや〇三七節筵の
 三六 末の大日にイエス立て呼り曰ける人もし渴べ我に來て飲三八我を信する
 三九 者の聖書に録し如く其腹より活る水川の如に流出べし三九如此いへる

彼を信する者の受んとする靈を指るなり蓋イエス未だ榮を受ざるに因て
 靈いまだ降さればあり民の中にて多の人この言を聞て此は誠に彼預言
 者なりと曰或ハ斯ハキリストなりと曰あるハキリストハガリラヤよ
 リ出べけんや聖書にキリストハダビデの裔にてダビデの住し郷ベテレ
 ヘムより出んと録しに非ずやと曰是に於て民ども彼に縁て争ひ別た
 リ四四ろの中に彼を執んとする者も有ければ措手せし者なかりき下吏と
 も祭司の長とパリサイの人等の所に返ければ彼等下吏に曰けるハ何ぞ彼
 を曳來らざる乎下吏こたへて曰けるハ未だ斯人の如く言し人あらず
 パリサイの人いひけるハ爾曹も亦惑されし乎有司またパリサイの人の
 中に彼を信する者あらんや律法を識ざる此衆の人の罰すべき者なり五
 十
 五二
 五三
 四八
 四七六
 四五
 四三
 四二
 四一
 四十

ヤより出ることなし是に於て各人家に歸れり
 イエス橄欖山に往りニ昧爽また聖殿に入るが民みな彼に來け
 れば坐て彼等を教ふ爰に奸淫を爲るとき執られし婦ありけるが學者と
 パリサイの人これをイエスの所に曳來り群集の中に置いひけるハ師よ
 此婦ハ奸淫を爲る時々のまゝ執られし者なり此の如き者を石にて撃
 殺すべしとモーセ律法の中に命じたり爾ハ如何に言や如此いへるハ
 イエスを試て訟の由を引出さんと欲るなりイエス身を屈め指にて地に畫り
 七 彼等が切に問によりイエス起て之に曰けるハ爾曹のうち罪なき者まづ
 彼を石にて撃べしと曰ハまた身を屈て地に畫り九 彼等これを聞て其良心
 に責られ老者をはじめ少者まで一々に出往たハイエス一人のこる婦ハ集
 中の中に立り十 イエス起て婦に曰けるハ婦よ爾を訟し者ハ何處へ往しや爾
 の罪を定る者なき乎婦いひけるハ主よ誰もなしイエス彼に曰けるハ我
 も爾の罪を定ず往て再び罪を犯す勿れ〇十二 イエスまた人々に語て曰ける
 十二
 十一
 十
 九八
 七
 六
 五
 四
 三
 二
 五三

十三 我の世の光なり我に従ふ者の暗中を行す生の光を得なり十三是に於てバ
 十四 リサイの人のいひけるは爾の自ら己の證をなせり爾の證の眞ならず十四イエ
 十五 ス答て曰けるは我みづから己の證するとも我證の眞なり蓋われ何處より
 十六 來り何處へ往を知らばなり爾曹わが何處より來り何處へ往を知ざるなり十五
 十七 爾曹の肉に循て人を審判く我の人を審判かず十六我もし審判バ我審判の
 十八 眞なり蓋われ獨あるに非ず我を遣し父と同一に在べなり十七二人の證の眞
 十九 なりと爾曹の律法に録されたり十八わが證をする者の我なり我を遣し父
 二十 も亦わが證を爲なり十九彼等いひけるは爾の父の何處に在やイエス答ける
 二十一 は爾曹の我を識す亦わが父をも識ざるなり若われを識たるならば我父を
 二十二 も識たるならん二十イエス此等のことを殿のうち賽錢の箱を置く處にて語
 二十三 ければ彼の時いまだ至ざれば誰れ手を出す者なかりき三イエス復いひけ
 二十四 るは我ゆかん爾曹の我を尋べし爾曹おのれの罪に死ん我ゆく所への爾曹
 二十五 さたること能ざるなり三之に由てユダヤ人いひけるは我ゆく所への爾曹

二十六 たること能ずと言ひ彼は自殺せんとする乎三イエス彼等に曰けるは爾曹
 二十七 は下より出われの上より出なんぢら此世より出われは此世より出ず
 二十八 是故に爾曹の己は罪に死んと我いひしなり爾曹もし我は彼なるを信せず
 二十九 は己の罪に死ん彼等いひけるは爾誰なるやイエス曰けるは我の實に
 三十 我なんぢらに告る所の者なり二六我なんぢらに就て語る可ことと審判く可
 三十一 ことと多端あり我を遣し者眞なり彼に聞し事を我世に告二七此の父を指
 三十二 て言るなれば彼等の知ざりき二八是故にイエス彼等に曰けるは爾曹の子
 三十三 を擧しのち我の彼なるを知らず我みづから何事をも行す惟わが父の教に
 三十四 従ひて此等の事を言るを知べし二九我を遣し者我と同一にあり父は我を獨
 三十五 遺たまはず蓋われ恒に彼の心に適ふ事を行へばなり三十イエス此事を言る
 三十六 とき多の人かれを信せり三一イエス己を信せしユダヤ人に曰けるは爾曹も
 三十七 し我道に居べ誠に我弟子なり三二かつ眞理を識ん眞理の爾曹に自由を得さ
 三十八 すべし三三彼等こたへけるは我儕のアブラハムの裔あり未だ人の奴隷と爲

三四 しことなし爾曹に自由を得さすべしと爾の言し如何なる事乎
 三五 彼等に曰ける誠に實に爾曹に告ん凡て悪を行ふ者の悪の奴隷なり
 三六 隸の恒に家に居ず子の恒に居是故に子もし爾曹に自由を賜なば爾曹誠
 三七 に自由を得べし我なんぢらがアブラハムの裔なるを知されども我を殺
 三八 さんと謀る蓋わが道なんぢらの衷に在ざれば也我の我父と偕に在て見
 三九 しことを言なんぢらの爾曹の父と偕に在て見しことを行ふ彼等こたへ
 四十 てイエスに曰ける我儕の父の父アブラハムなりイエス曰ける爾曹もし
 四一 アブラハムの子ならばアブラハムの行をおこさふべし然るに今なんぢ
 四二 らの神に聞し眞理を告る我を殺さんと謀る是アブラハムの行に非ず爾
 四三 曹の爾曹の父の行をおこさふ也かれら曰ける我儕の奸淫由て生れず
 只一人の父あり即ち神なりイエス彼等に曰ける神もし爾曹の父なら
 ば爾曹われを愛すべし我の神より出て來ればなり夫われの己に由て來る
 に非ず神われを遣し給へるなり爾曹なんぢ我いふ言を知ざるや蓋わ

四四 が道を聽ことを得ざれば也爾曹己が父なる悪魔より出また其父は慾を
 行ふことを欲む彼と始より人を殺す者なり又眞理に居ず蓋かれは衷に眞
 理なければ也かれの証を言とさの己より出して言なり蓋かれの証者また
 証者れ父あれば也われ眞理を言に因て爾曹われを信せず爾曹のうち
 誰か我を罪に定る者ある乎われ爾曹に眞理を語るに何故われを信せざる
 乎神より出し者の神の言を聽なんぢらの聞ざるの神より出ざるに因て
 なりユダヤ人こたへて曰ける爾のサマリヤの人にて鬼に憑たる者な
 りと我儕の言るの宜ならず乎イエス答て曰ける我の鬼に憑たる者に
 非ず我の吾父を尊び爾曹の我を輕んずる也我の自己の榮を求めず之を
 求かつ審判する所の者ありわれ誠に實に爾曹に告ん人もし我道を守ら
 ば窮なく死を見ざるべしユダヤ人かれに曰ける今われらの爾が鬼に
 憑たる者なるを知アブラハム既に死また預言者も死り然るに爾いふ人も
 し我道を守らば窮なく死じと爾の我儕の先祖アブラハムよりも優れる

四十 三二 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五十

四十 イエスと偕に居しパリサイの人この言を聞いて彼に曰ける我儕も替なる乎
 四一 イエス彼等に曰ける爾曹もし替ならん罪なかるべし然と今われ
 四二 見と言しに因て爾曹の罪の存れり
 四三 誠に實に爾曹に告ん羊牢に入に門よりせずして他より踰る者の竊
 四四 賊なり強盜なりニ門より入者其羊の牧者なり
 四五 門守の彼の爲に啓き羊
 四六 々の聲を聽かれ己の羊の名を呼て之を引出す
 四七 彼の羊を引出すとさ
 四八 先に行なり羊かれの聲を識て之に従ふ
 四九 羊の別人に従はず反て避るの別
 五〇 人の聲を識ざれば也
 五一 イエス彼等に此譬を言と彼等々の語れる所いか
 五二 なる意かを知ざりき
 五三 是故にイエス復かれらに曰ける誠に實に爾曹に
 五四 告ん我の即ち羊の門なり
 五五 凡て我より先ふ來し者の竊賊なり強盜なり羊
 五六 々の聲を聽ざりき
 五七 我の門なり若人われより入べ救れ且出入をなして草
 五八 を得べし
 五九 竊賊の來る盜んとし殺さんとし滅さんとするの他なし我さ
 六〇 たる羊をして生を得かつ豊ならしめん爲なり
 六一 我の善牧者なり善牧者

十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三

十二 羊の爲に命を捐す
 十三 牧者にあらす己が羊を有す只やどはれて羊を守る者
 十四 狼の來るを見れば羊を棄てにぐ
 十五 狼羊を奪て之を散す
 十六 雇工の逃るの
 十七 備れし者なれば其羊を顧ざるに因てなり
 十八 我の善牧者にて己の羊を識又
 十九 己の羊に識る
 二十 父われを識とく我も父を識われ羊の爲に命を捐す
 二十一 我
 二十二 此牢にあらざる別の羊を有り彼等をも引來らん彼等わが聲を聽ん遂に
 二十三 一の群一の牧者となるべし
 二十四 わが父われを愛す蓋われ再び命を得んが爲
 二十五 に命を捐るが故なり
 二十六 我より之を奪ふ者あし我みづから之を捐るなり我
 二十七 これを捐るの權能あり亦よく之を得の權能あり我父より我この命令を受
 二十八 たり
 二十九 儲この言に因て復ユダヤ人あらう
 三十 以別たり
 三十一 其中なる多の人のいひ
 三十二 ける鬼に憑て狂ふ者なる何不彼に聽や
 三十三 又或人いひける是鬼に憑
 三十四 れし者の言に非ず鬼の替者の目を啓ることを能せん乎
 三十五 〇冬このころ修殿
 三十六 節の時
 三十七 イエス殿のソロモンの廊を行きけるに
 三十八 ユダヤ人かれを環圍み
 三十九 て曰ける我儕を幾時まで疑するや爾もしキリストならば明かに我儕

二五 告よ二五 イエス答ける我なんぢらに告しかども爾曹信せず父の名に託
 二六 て我が行ふ事われに就て證するなり二六 然と爾曹信せず此の爾曹に言し如
 二七 く我羊に非ざれば也二七 我羊の我聲を聽われの彼等を識かれら我に従ひ二八
 二九 われ彼等も永 生を賜ふ彼等いつまでも亡びず亦これを我手より奪ふ者
 三〇 なし二九 我に彼等を賜し我父の萬有よりも大なり又わが父の手より之を奪
 三一 うる者なし三十一 我と父との一なり三二 是に於てユダヤ人石をとりて復かれを
 三二 撃んとせり三二 イエス彼等に答ける我父より受て我おほくの善事を爾曹
 三三 み示しに其うち何の事によりて我を石にて撃んとする乎三三 ユダヤ人こた
 三四 へて曰ける石にて撃んとするの善事の爲に非ず爾たを擧瀆ことをいひ
 三五 且なんぢ人なるに己を神となすに因てなり三四 イエス答ける爾曹の律法
 三六 に我いふ爾曹の神なりと録されしに非ずや三五 聖書の毀る可らず若神の命
 三七 を奉し者を神と稱んにい 三六 父の聖別ちて世に遣しと者われの神の子なり
 と稱べとて何ぞ之を擧瀆ことをいふと曰べけん乎三七 もし我わが父の事を

三八 行ずば我を信すること勿れ三八 若これを行ば我を信せずとも其事を信せよ
 三九 蓋父の我にあり我の父に在ことを爾曹しりて信せんが爲なり三九 彼等また
 四十 執んどしたりしがイエスうの手を脱て去り四十 斯て復ヨルダンの外なるヨ
 四一 ハ子のパプテスマを施しと所に往て彼處に居けるに 四一 多の人かれに至り
 四二 曰けるヨハ子の休徴を行す然ども此人につきてヨハ子のいひし言のみ
 四三 な真なり四三 是に於て許多の人かしこにて彼を信せり
 四四 茲に病者ありラザロと云てベタニヤの人なりベタニヤのマリヤ
 四五 と其姉マルタの住る村なりニマリヤの曩に主に香膏をぬり己の頭の髪を
 四六 もて主の足を拭ひし人にて此病るラザロの彼が兄弟なり三 是故にうの姉
 四七 妹イエスの所に主の愛する者病りと遺遣せり四 イエス之を聞て曰ける
 四八 此の死る病に非ず神の榮の爲なり神の子をして之に因て榮を得しめんが
 四九 爲なり五 夫マルタと其妹およびラザロのイエスの愛する所の者なり六 是
 五〇 故にイエスうの病るを聞て此處に二日とをまり七 其のち弟子に曰ける

八 我儕またユダヤに往べしハ弟子いひけるハラビユダヤ人の近來も石をも
 九 て爾を撃んとせしに復かしこに往たまふ乎九イエス答けるハ一日の中に
 十二時あるに非ずや人もし日間あるかば躓くことなし蓋この世の光を見
 十二に因てなり十また人もし夜あるかば躓くべし蓋光のの人に無が故なり十一
 イエス如此いひて後弟子に曰けるハ我儕の友ラザロ寢たり我かれを醒さ
 十三ん爲に往べし十三弟子いひけるハ主よ彼もし寢しからば愈ん十三イエスの彼
 十四の死しを言るなれど弟子等の寢て臥ることを言るあらんと意り十四是故に
 十五イエス明かに彼等に告て曰けるハラザロの死し十五爾曹をして信せしむる
 十六爲に我かしこに在ざりしを喜ぶ然といま彼處に往べし十六デドモと稱るト
 十七マス他れ弟子等に曰けるハ我儕も亦ゆきて彼と偕に死べし十七イエス至て
 十八ラザロが既お墓に葬れて四日なるを知り十八ベタニヤのエルサレムに近し
 十九其距ること約る廿七丁なり十九多のユダヤ人マルタとマリアを其兄弟の事
 二十に因て慰めんとして既に彼等の所に來りをれり二十マルタのイエス來給へり

二 と聞て之を出迎へマリアのなほ室に坐せりニマルタイエスに曰けるハ主
 三 よ此に在せしならば我兄弟の死ざりしものを三然ながら假令今にても爾
 四 が神に求る所のものハ神なんぢに賜ふと知三三イエス曰けるハ爾の兄弟ハ
 五 甦るべし三四マルタイエスに曰けるハ彼が末日に甦るべき時に甦らん事を
 六 知なり三五イエス彼に曰けるハ我ハ復生なり生命なり我を信する者の死
 七 ども生べし三六凡て生て我を信する者の永遠も死ることなし爾これを信す
 八 るや三七彼イエスに曰けるハ主よ然り我なんぢの世に臨るべきキリスト神
 九 の子なりと信す三八如此いひ竟て潜に其妹マリアをよび師きたりて爾を
 十 呼給へりと曰三九マリア之をきき急ぎ起てイエスの所に往り三九イエス未だ
 十一 村に入らず仍マルタの迎し所にをれり三三マリアを慰めて偕に室に在しユダ
 十二 ヤハマリアが急ぎ起出るを見て彼ハ墓に往て哭ならんと曰つと彼に隨へ
 十三 り三三マリアイエスの所に來り彼を見て其足下に伏いひけるハ主よ若こそ
 十四 に在せしならば我兄弟の死ざりしものを三三イエスマリアの哭と彼と偕に

三四 三五 三六 三七 三三八 四十 四一 四二 四三 四四 四五

來しユダヤ人泣を見て心を慟しめ身ふるひて 曰ける三三爾曹何處に彼
 を置きや彼等いひける三五主よ来て觀たまへ イエス涕を流たまへり三六是
 に於てユダヤ人いひける三七見よ如何ばかり彼を愛する者三七の中なる
 人曰ける三九替者の目を啓たる此人にして彼を死三九ざらしむること能三九ざりし
 乎三八イエスマた心を慟しめて墓三九に至る墓の洞にて其口の所三九石を置り三九
 イエス曰ける四一石を去よ死し者の兄弟マルタ曰ける四一主よ彼の四一はや臭し
 死てより已に四日を経たり四一イエス彼に曰ける四一爾もし信せば四一神の榮を
 見べしと我なんぢ四一お言し四一非ずや四一遂に其石を死し者を置たる所より移
 去たりイエス天を仰ぎて曰ける四二父よ已に我に聽り我これを爾に謝す四二
 我なんぢが恒四二お我四二お聽四二ことを知しかる四二お我かく言は傍お立る人をして爾
 の我を遣ししことを信せしめん四三とて也四三如此いひて大聲に呼いひける四三
 ラザロよ出よ四四死者布にて手足を縛れ面四四の手布にて裹れて出四四イエス彼等
 に曰ける四五爾を釋て行しめよ四五マリアと偕四五お來しユダヤ人イエスの行し

四六 四七 四八 四九 五十 五一 五二 五三 五四 五五 五六

事を見て多く彼を信せり四六然四六ども其中にパリサイの人四六に往てイエスの行
 し事を告し者あり四七是に於て祭司の長等四七とパリサイの人四七と議員を召集め
 て曰ける四八我儕如何すべき乎四八この人多の奇跡を行あり四八もし彼を此ま
 に棄置四八人みお彼を信せん然四八パロマの人四八きたりて我儕の地をも民をも奪
 べし四九其中の一人にて此歳の祭司の長なるカヤバ四九と云る者彼等に曰ける
 爾曹何をも知ず五十又民の爲に一人死て擧國はるびざる五十我儕の益たる
 事をも思ざる也五一此言五一己より出しに非ず五一此歳の祭司の長五一あるによりイ
 エスの斯民の爲に死ることを預言せるあり五二特に斯民の爲のみ五二あらず散
 たる神の子民等をも一五三に集んが爲五三あり五三儲この日よりして彼等イエスを
 殺さんと共に議五四是故にイエス此より顯にユダヤ人の中五四を行かず其處
 を去て野に近き所五四あるエフライムといふ邑五四に往て弟子と偕五四に留れり五五ユ
 ダヤ人の逾越の節五五ちかづきければ人々己を潔んが爲五五に逾越の節五五の前に郷
 間五六よりエルサレム五六に上り五六イエスを尋ね殿五六に立五六て相互に曰ける五六如何に

二二 ンデレ亦ビリポと借にイエスに告三三 イエス彼等に答て曰ける人の子榮
 二四 を受べき時いたれり誠實に爾曹に告ん一粒の麥もし地に落て死すバ
 二五 唯一にて存んもし死バ多の實を結ぶべし二五の生命を惜む者の之を喪ひ
 二六 其生命を惜ざる者の之を存て永 生に至るべし二六 人もし我に事んとせば
 二七 我に従ふべし我に事る者の我をる所に在ん人もし我に事れば我父の之を
 二八 貴ぶべし今わが心憂悼めり何を言んや父よ此時より我を救たまへと言
 二九 んか否これが爲に我の時に至れるあり二八 願く父よ爾の名の榮を顯せ
 三〇 此とき天より聲ありて云われ其榮を既に顯す再これを顯すべし二九 傍に立
 三一 る人々これを聞て雷ありて曰ある人の使者かれに語れる也と曰り
 三二 イエス答て曰ける此聲の我ために非ず爾曹の爲あり三 斯世のいぢ審
 三三 判せらる斯世の主のいぢ逐出さるべし三三 我もし地より擧れあバ萬民を引
 三四 て我に就せん 如此イエスの言る其如何ある狀にて死んとするを示せ
 三五 る也 言人々かれに答て曰ける我儕律法にてキリストの窮なく存者あり

三五 と聞しに爾人の子かならず擧れんと言の何ぞや此人の子との誰なる乎三五
 三六 イエス彼等に曰けるはなほ片時のあひだ光なんぢらと借にあり光ある間
 三七 に行て暗に追及れざるやう爲よ暗に行く者の其行べき方を知ず三六 なんぢ
 三八 ら光の子と爲べきために光のある間に光を信せよイエス此を言畢り彼等
 三九 を避て隠たり〇三七 イエス彼等の前に如此おほくの休徴を行たれども尙か
 四〇 れを信せざりき三九 此の預言者イザヤがいひし言に我儕の告し言を信せし
 四一 者の誰ぞや主の手誰に顯れし乎と有に應へり四一 イザヤ復いふ彼等目に
 四二 て見心にて悟り改めて醫るゝことを得ざらんが爲に彼らの目を瞽し其心
 四三 を頑梗せりと此故に彼等信すること能ず四二 イザヤの彼の榮を見しにより
 四四 彼に就て如此の語れるあり四三 然と有司等の中に多く彼を信せし者も有し
 四五 がパリサイの人を畏て明に信ずると言ざりき其會堂より黜られんことを
 四六 恐たるに因 四三 これ彼等の神の榮より人の榮を喜るなり〇 四四 イエス呼り曰
 四七 ける我を信する者の我を信するに非ず我を遣しゝ者を信するなり四五 又

四六 四七 四八 四九 五十 二 三 四 五

われを見者の我を遣しと者を見なり 我の光にして世に臨れり凡て我を
信する者をして暗に居ざらしめん爲なり 人もし我が言を聞て守らざる
とも之を審判かず我來しは世を審判かんために非ず世を救んため也 我
を棄わが言を納ざる者を審判者あり即ち我いひし言をはりの日これを審
判すべし 蓋われ己より言に非ず我を遣しと父わが言べきこと我かたる
可ことを命じ給へる也 五十の命じ給ふ所の即ち永生なるを我しる是
故に我いふ所の父の告給ふまゝに言るなり
第十三章 踰越の節の前にイエス此世を去て父に歸るべき時いたれるをし
り世に在し己の民を既に愛し終に至るまで之を愛せり 時に彼等晩飯の
席につく悪魔のかねてイエスを賣んとする事を モンの子イスカリヲテ
のユダといふ者の心に發さしめたり 三 イエス己の手に父の萬物を賜しこ
とと神より來り神に歸ることとを知 晩飯の席を起て上衣をぬぎ手巾を
取て腰に束 五 而して盤に水をいれ弟子の足を濯うの束たる手巾にて拭

六 八七 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七

じめ 六 遂にシモンペテロに及ぶペテロ彼お曰けるの主よ爾わが足を濯ふ
か七 イエス答て曰けるの我爲ことを爾いま知す後これを知べし 八 ペテロ
彼に曰けるの爾斷て我足を濯べからず イエス答けるの若われ爾を濯すバ
爾の我と干渉なし 九 シモンペテロ彼に曰けるの主よ止に我足のみならず
手と首をも濯たまへ 十 イエス曰けるの濯たる者の足のほか濯ふに及ず然
して全く潔し爾曹の潔し然ども盡くの潔者に非ず 十一 此のイエス己を賣ん
とする者の誰なるを知ゆるに盡くの潔者に非ずと曰るあり 十二 彼等の足を
濯し後ろの上衣を取また坐て彼等に曰けるの我なんぢらに行し事を知か
十三 爾曹われを師と呼また主と呼なんぢらの言どころの宜われの誠は是な
り 十四 我の爾曹の師また主なるに尙かんぢらの足を濯ふ 爾曹も亦たがひに
足を濯ふべし 十五 我なんぢらに例を示せり 此の我なんぢらに行し如く 爾曹
にも行しめんが爲なり 十六 われ誠に實に爾曹に告ん僕其主より大ならず
又使者の之を遣す者より大からむ 十七 爾曹もし之を知て此の如く行バ福

十八 我いひし所の爾曹を凡て指る非ず我の我選し者をしる然れども聖
 十九 書に我と偕に食する者われに背て踵を擧しと録されしに應せん爲あり十九
 二十 事の至らん時あんぢら我を信じてキリストとせん爲に其事の至ざる
 二十一 我を接るの我を遣し者接るあり三イエス此事を言て心に憂へ證し
 二十二 て曰けるの誠に實に爾曹に告ん一人あんぢらの中に我を賣者あり三弟子
 二十三 たち互に面を觀あひせ誰を指て言るある乎と疑ふ三イエスの愛する一人
 二十四 の弟子イエスの懷に倚てありしが二シモンペテロ此の誰を指て言るなる
 二十五 乎を問しめんと首をもて示せり二イエスの懷に倚て在し者イエスに曰け
 二十六 るの主よ誰なるか二イエス答けるの我一撮の食物に物を濡て予る人の其
 二十七 ありとて遂に一撮の食物に物を濡てシモンの子イスカリヲテのユダに予
 二十八 ぬ爾が爲んとする事の速かに爲せ三彼に何故に如此いひしかを同に席に

二十九 在者どもの中在る者あらざりき二九或人ユダの金囊を職れる故イエス彼を
 三十 して節筵について用べき物を市しむるならんか亦の貧者に施さしむるあ
 三十一 らんと意り三儲かれの一撮の食物を受て直に出たり時の既に夜ありき三
 三十二 彼の出し後イエス曰けるの今人の子榮をうく神また彼に因て榮を受るな
 三十三 り三神もし彼に因て榮を受る時の神も亦みづからの榮の中に彼を榮しむ
 三十四 直に彼を榮しめん三小子よ我なほ片時なんぢらと偕あり爾曹われを尋
 三十五 ん我ゆく所に爾曹の至ること能じ前ふ之をユダヤ人あいふ今また之を爾
 三十六 曹に告われ新誠を爾曹に予ふ即ち爾曹相愛すべしとの是なり我なん
 三十七 ぢらを愛する如く爾曹も相愛すべし三五爾曹もし相愛せば之に因て人々爾
 三十八 曹の我弟子なることを知べし三六シモンペテロ彼に曰けるの主いづこへ往
 三十九 給ふやイエス彼に答へけるの我往どころへん爾いま從ふこと能ず後われ
 四十 に從はん三七ペテロ彼に曰けるの主よ何故に今なんぢに從ふこと能ざるか
 四十一 我の爾の爲に我命を捐ん三八イエス彼に答けるの爾命を我ために捐るや誠

に實に爾お告ん鶏なかざる前に爾三次われを識すと云ん

第二十四言 なんぢら心に憂ること勿れ神を信じ亦われを信すべし二わが父

の家に第宅おほし然すバ我預て爾曹に之を告べきなり我なんぢらの爲

に所を備に往三もし往て我なんぢらの爲に所を備バ又きたりて爾曹を我

に納べし我をる所に爾曹をも居しめんとて也四爾曹わが往所を知らず其

途を知五トマス曰ける主よ我儕あんぢの往所を知らず何にして其途を知

んや六イエス彼に曰ける我の途なり眞なり生命なり人もし我に由され

バ父の所に往こと能す七若なんぢら我を識バ我父をも識べし今より爾曹

かれを識なり已に爾曹彼を見たりハピリポ彼に曰ける主よ我儕に父を

示し給へ然バ足り九イエス彼に曰ける我かく久く爾曹と偕に在

しに未だ我を識ざるか我を見し者父を見しなり何ぞ父を我儕に示せと

言や十われ父にをり父の我に在ことを信せざる乎われ爾曹に語し言の自

ら語しに非ず我にをる父の行をなせる也十一我の父にをり父われに在と

十二 わが我つげし言を信せよ若信せずバ我事に因て之を信すべし十二誠に實に爾曹

に告ん我を信する者我行どころの事を行ん且此より大なる事を行べし

十三 蓋われ我父へ往バなり十三爾曹すべて我名に託て求ふ所のこと我すべて

之を行ん父の榮の子に因て顯れんが爲なり十四若なんぢら何事にても我名

に託て求ふ我これを行ん十五若なんぢら我を愛するならば我誠を守れ十六

我父に求ん父かならず別に慰る者を爾曹に賜て窮なく爾曹と偕に在しむ

十七 べし十七此の即ち眞理の靈あり世これを接ること能す蓋これを見ず且しら

ざるに因されと爾曹の之を識るの彼なんぢらと偕に在かつ爾曹の衷に在

バなり十八我なんぢらを捨て孤子とせず再なんぢらに就ん十九暫せバ世われ

を見ことなし然と爾曹の我を見われ生れバ爾曹も生ん二十の日に爾曹わ

れ吾父に在なんぢら我に在われ爾曹に在ことを知べし二我誠を有ちて之

を守る者即ち我を愛するなり我を愛する者我父に愛せらる我も亦こ

れを愛して彼に自己を示すべし三イスカリヲテならざるユダ彼に曰ける

三三 主よ如何して自己を我儕に示し世に示さざる乎二三イエス答て彼に曰
 けるもしひと若人われを愛せば我言を守ん且わが父の之を愛せん我儕きたりて
 彼かれと偕ともに住すむべし三四我を愛せざる者もの我言を守らず爾曹の聞きこころの言ことの
 我言わがことに非あらず我を遣つかはし父の言ことなり三五われ爾曹なんぢらと偕ともに在あて此等これらのことを爾
 曹なんぢらに語かたりぬ二六わが名なに託たくて父の遣つかはさんとする訓慰師なぐさむものすなはち聖靈せいれいは衆理しゆりを
 爾曹なんぢらに教をしへ亦またわが凡すべて爾曹なんぢらに言いひ二七ことを爾曹なんぢらに憶おもひ起たさしむべし二七われ平
 安やすを爾曹なんぢらに遺のこす我平安わがやすを爾曹なんぢらに予あたふ我わがあたふる所ところの世よの予あたふ所ところの如ごときに
 非あらず爾曹なんぢら心に憂うれふ勿なれ又懼おそる勿なれ二八我われゆきて復またなんぢらに來きたらんと我
 曰いひ二九言ことを爾曹なんぢらさけり若もしわれを愛あいせば父ちちに往ゆくて我わがいへる言ことを爾曹なんぢら喜よろこぶ可べきな
 り蓋おほわが父ちちの我われより大おほいなる也なり也三〇事こといまだ成ならず我われまづ爾曹なんぢらにつぐ事こと成なる
 とき三〇に爾曹なんぢらこれを信あんずべき爲ためなり三一此後このちわれ多おほくの言ことをもて爾曹なんぢらに語かたりじ蓋
 この世よの主ぬしきたる故ゆゑなり彼かれわれに與かへることなし三二然されど我われこれを爲なす我われの
 父ちちを愛あいし且またろの命めいせしことに遵したがひて行おこなふことを世よに知あらしめんが爲ためなり起

二 我儕われらこゝを去さるべし
 我われの眞まことの葡萄樹ぶどうのきわが父ちちの農夫のらふなり二我われに在ありて凡すべて實みを結むすぶ枝えだ
 の父ちちこれを剪除きりとりすべし實みをむすぶ枝えだの之これを潔きよむ蓋おほます三繁さかく實みを結むすべ
 しめん爲ためなり三今いまなんぢら我わがいひことを三よりて潔きよなれり四爾曹なんぢらわれに居をさ
 らば我われまた爾曹なんぢらに居をらん枝えだもし葡萄樹ぶどうのきに連つらなれ五自ら實みを結むすぶこと能あたはず
 爾曹なんぢらも我われに連つらなれ六亦また此こゝの如ごとく五我われの葡萄樹ぶどうのきなんぢらの其その枝えだなり
 人もし我われに居をれ亦またかれに居をる多おほくの實みを結むすぶべし蓋おほもし爾曹なんぢらわれを離はなる
 時とき何事なにことをも行なし能あたはず六人もし我われに居をざれば離はなれる枝えだの如ごとく外そとに
 棄すてられて枯かるるなり人ひとこれを集あつめ火ひに投なげいれ七爾曹なんぢらもし我われに居をまた
 我わがいひことを言いふ八言ことなんぢらに居をる凡すべて欲ねがふこと八求もとめて従したがひて予あたはるべし八爾曹
 おほくの實みを結むすぶ九我父わがちちこれに由よりて榮はなれ九然されば爾曹なんぢらわが弟子でしなり九父
 の我われを愛あいし給たまふ如ごとく我われなんぢらを愛あいす爾曹なんぢらわが愛あいにをれ十若もしなんぢら我
 誠いましまらを守わがべ我愛わがあいに居をらん我われわが父ちちの誠いましまらを守わがて其愛そのあいに居をが如ごとし十一我われこれ事ことを爾

十二 曹に語るの我が喜なんぢらに在て爾曹の喜を盈しめんが爲なり十二我なん
 十三 ぢらを愛する如く爾曹も亦たがひに愛すべし是わが誠なり十三人々の友の
 十四 爲に己の命を捐るの此より大なる愛いなし十四凡て我なんぢらに命ずる所
 十五 の事を行ふ則ち我友なり十五今より後われ爾曹を僕と稱す蓋僕の其主の
 十六 行ことを知ざればなり我さきに爾曹を友と呼り我なんぢらに我父より聞
 十七 し所のことを盡く告しに縁十六なんぢら我を選す我なんぢらを選べり且爾
 十八 曹をして往て實を結せ其實を存しめんが爲また爾曹の凡て我名に託て父
 十九 に求ふ所の者を彼をして爾曹に賜らせんが爲に我なんぢらを立たり十七な
 二十 んぢら互に愛せんがため我これを命ず十八世もし爾曹を惡とさし爾曹より
 二十一 も先に我を惡と知十九爾曹もし世の屬ならべ世の己の屬を愛すべし然と爾
 二十二 曹の世の屬ならず我なんぢらを世より選たり之に因て世なんぢらを惡む
 二十三 僕の其主より大ならずと我なんぢらに曰し言を心に記よ人もし我を窘
 二十四 迫ば爾曹をも窘迫もし我言を守ば爾曹の言をも守るべし二十然と彼等の我

二 三 我を遣しし者を識ざるに因わが名の故をもて此等の事を爾曹に加べし三我
 四 もし来て語りしならべ彼等罪なからん然と今其罪いひらく可やう
 五 なし三我を惡む者の亦わが父をも惡なり四我もし他の人の行ざりし事を
 六 彼等の中に行はざりしならべ彼等罪なからん然と我と吾父とを已に見か
 七 つ之を惡めり五此の如く彼等の律法に故なくして我を惡めりと録し言に
 八 應せん爲なり六われ訓慰師を父より遣らん即ち父より出る真理の靈なり
 九 其きたる時わが爲に證をなすべし七爾曹も亦われと偕に始より在しに因
 十 て證を作べし
 十一 **第二十一節** われ此等の言を爾曹に語れるの爾曹の礙かざらん爲なり二衆人
 十二 なんぢらを會堂より黜くべし且すべて爾曹を殺す者みづから神に事ると
 十三 意ふ時至らん三此等の事を爾曹に行ひ父と我とを識ざるが故なり四我こ
 十四 れを爾曹に語れるの時いたりて我これを言し事を爾曹の憶起ん爲なり五
 十五 に之を爾曹に語りし我なんぢらと偕に在たれば也五我いま我を遣し

六 し者に往んとす然と爾曹の中われに何處へ往と問る者なく 六 反て我この
 七 事を言しに因て憂なんぢらの心に盈りせわれ眞を爾曹に告ん我往の爾曹
 八 の益なり若ゆかずバ訓慰師なんぢらに來じ若ゆかバ彼を爾曹に遣らん 八
 九 かれ來らんとす罪につき義につき審判につき世をして罪ありと曉しめん
 十 罪に就てと云るの我を信せざるに因てなり 十 義に就てと云るの我わが
 十一 父へ往によりて爾曹また我を見ざれば也 十一 審判に就てと云るの斯世の主
 十二 審判を受けばなり 十二 我なほ爾曹に多く語る可こと有とも今なんぢら曉こ
 十三 どを得ず 然と彼すなち眞理の靈の來らんとす爾曹を導きて凡の眞理
 十四 を知しむべし蓋かれ己に由て語に非ず其聞し所の事を爾曹に言また來ら
 十五 んとす事を爾曹に示すべければ也 十四 彼わが榮を顯さん蓋わが屬を受て
 十六 爾曹に示せば也 十五 凡て父の有給ふもの我屬なり是故に彼わが屬を受て
 十七 是われ父へ往なり 十七 是に於て弟子の中にて或人たがひに曰けるの暫せば

十八 爾曹われを見じ復えばらくして我を見べしと言かつ是われの父へ往あり
 十九 ど我儕に言し何の事や 十八 彼等また曰けるの此えばらくと言し何の
 二十 事や其言る所を我儕知す 十九 イエス彼等が問んとするを知て曰けるの暫
 二十一 せば我を見じ復えばらくして我を見べしと言し此事に因て爾曹たがひに
 二十二 詰あふ乎 二十 誠に實に我あんぢらに告ん爾曹の哭き哀み世の喜ぶべし爾曹
 二十三 憂るからん然と其愛の變て喜びとあるべし 二十 婦子を産んとする時の憂ふ
 二十四 其期いたるに因てあり然と已に生る前の苦をわする世に人の生たる喜樂
 二十五 に因てあり 三 此の如く爾曹も今憂ふ然と我また爾曹を見ん其時あんぢら
 二十六 の心喜ぶべし其喜樂を奪ふ者あらじ 三 其日あんぢら我に問とこる無るべ
 二十七 し誠に實に爾曹に告ん凡る我名に託て父に求る所のもの父これに爾曹に
 二十八 授たまふべし 二四 あんぢら今まで我名に託て求たることあし求よ然バ受け
 二十九 ん而して爾曹の喜び満べし 二五 譬喩をもて此事を爾曹に語しが譬喩を用ず
 三十 して爾曹に語り父に就て明かに示す時いたらん 二六 其日あんぢら我名に託

二七 求め我あんぢらの爲に父に求ふと曰す蓋父みづから爾曹を愛すれば
 二八 也これ爾曹われを愛し且父より我來しことを信するに因二八われ父より出
 二九 て世に臨れり復世を離て父に往ん二九弟子かれに曰ける二九爾いま明かに言
 三〇 て譬喩をいはず我儕いま爾の知ざる所なく且人の爾に問の用なきこと
 三一 を知これに因て我儕神より爾の出來しことを信す三一イエス彼等に答ける
 三二 い今なんぢら信する乎三二時まさに至ん今いたりぬ爾曹散て各人々の属す
 三三 る所に往た我を一人のこさん然と我獨るるに非ず父われと偕に在なり
 三三 われ此事を爾曹に語し三三爾曹をして我に在て平安を得させんが爲あり
 三三 爾曹世に在ての患難を受ん然と懼るゝ勿れ我すでに世に勝り
 三三 **第三十三** イエス此言を語畢て天を仰ぎ曰ける父よ時いたりぬ爾の子あ
 二 んぢの榮を顯さんが爲に爾の子の榮を顯し給へ二これ爾われに賜し所の
 三 者に我永生を予んがため凡の者を制る權威を我に賜たれば也三永生
 四 といひとりまことのかみ四爾と其遣し四イエスキリストをえる是あり四我あん

五 ぢの榮を世に顯し爾の我に委し所の行の我これを成り父よ今我をして
 六 爾と偕に榮を得させ給へ即ち創世より先に爾と偕に有し所の榮を得させ
 七 給へ六なんぢ世より選て我に賜し人々に我あんぢの名を顯せり彼等七爾
 八 の属にして爾これを已に我に賜ふ彼等また爾の道を守れり七彼等いま爾
 九 の我に賜し者八皆爾より出しと知八蓋われ爾が我に賜し言を彼等に予た
 十 ればなり彼等これを受また我爾より出し事を誠に知かつ爾の我を遣し
 十一 ことを信じたり九我かれらの爲に祈る我祈るの世の爲に非ず爾の我に賜
 十二 し者の爲なる耳十われ彼等十爾の属なれば也十凡て我属の爾の属なんぢの
 十三 属の我属なり且われ彼等に由て榮を受十一われ今より世に在ず彼等十一世に
 十二 をり我の爾に就る聖父よ爾の我に賜し者を爾の名十二在しめ之を守て我儕
 十三 の如く彼等をも一になし給へ十二我かれらと偕に在し時かれらを爾の名に
 十三 在しめて之を守たり爾の我お賜し者を我守りしが其中一人だ十三お亡たる者
 十三 なし唯沈淪の子はるびたり是聖書に應せん爲なり十三我いま爾に就る我世

十四 在て此事を語れる我喜樂を彼等み充しめん爲なり十四 われ爾の道を彼
 等み授たり世の彼等を惡む蓋わが世の属に非ざる如く彼等も世の属に非
 ざれば也十五 われ爾に彼等を世より取たまへと祈らず惟かれらを守て惡に
 陥らす勿れと祈る十六 われ世の属み非ざる如く彼等も世の属に非ず 爾の
 眞理をもて彼等を潔め給へ爾の言の眞理なり十八 なんぢ我を世に遣し如
 く我も彼等を世に遣せり十九 我かれらの爲み自己を潔これ眞理に因て彼等
 の聖られん爲なり二十 我た彼等の爲にのみ祈らず彼等の教に因て我を信
 する者の爲にも祈なり三 此のみな一にならん爲なり父よ爾われに在われ
 亦なんぢみ所在かくの如く彼等も我儕をりて一みならん爲かつ世をして
 爾の我を遣し事と信せしめん爲なり三 爾の我も賜し榮を我かれらみ授
 たり此の我儕の一なるが如く彼等も互に一にならん爲なり三 われ彼等に
 在なんぢ我ををる蓋彼等をして一に全ならしめ且世をして爾の我を遣し
 こと又なんぢ我を愛する如く彼等をも愛することを知しめんと也 二四 父

二五 よ爾の我に賜し者の我をる所に我と偕に在て我榮すなりち爾が我に賜し
 者を見んことを願う世基を置ざりし先に爾われを愛したれば也 二五 義さ
 父よ世の爾を識す我の爾を識かれらも爾の我を遣し事を知り二六 我なん
 ぢの名を彼等に示せり復これを示さん蓋なんぢの我を愛するの愛かれら
 に在また我かれらに在ん爲なり

二六 第十八章 イエス此事を言て後ろの弟子と偕に出てケデロンの河を渉るの
 處にある園の中に弟子と偕に入ぬ 二 イエスを賣たるユダ此處を識りイエ
 ス屢うの弟子と偕に此に集りたれば也 三 此時ユダ一隊の兵卒と下吏ども
 を祭司の長等およびパリサイの人よりうけ炬と提灯と兵器を携て此に來
 れり 四 イエス事の己に及んとするを悉く知いで彼等に曰ける誰を尋
 るか 五 彼等こたへけるナザレのイエスなりイエス彼等に曰ける我の
 其なりイエスを賣しユダ彼等と偕に立り 六 イエス彼等に對て我なりと
 曰たまへる時かれら退きて地に仆たり 七 イエス復彼らに誰を尋る乎と問

八 たまひしかば彼等ナザレのイエス也と曰ハイエス答ける我すでに爾曹
 九 に我の其なりと曰り若われを尋るならば此輩を容て去しめよ九 是イエス
 十 我に賜し者の中一人だに亡る者なしと云し言に應せん爲なり十 時にシモ
 十一 ンペテロ劔を佩たりしが之を抜て祭司の長の僕を撃て其右の耳を削おと
 十二 せり僕の名のマルコスと云十一 イエスペテロに曰ける劔を鞘に鞘よ父の
 十三 我に賜し杯を我飲ざらん乎十二 斯て隊の兵卒および其長とユダヤ人の下吏
 十四 イエスを執へ繫て十三 先これをアンナスの所に曳往かれ此歳の祭司の長
 十五 カヤバの外鼻なるに囚てなり十四 ユダヤ人に議て一人民の爲に死るの益な
 十六 りと言し此カヤバなり十五 シモンペテロと外に一人の弟子イエスに従
 十七 へり此一人の弟子の祭司の長の識どころの者にてイエスと偕に祭司の長
 十八 の庭に入十六 ペテロの門外に立り祭司の長の識どころの弟子出て門を守る
 十九 婢に告てペテロをともなひ入十七 是に於て門を守る婢ペテロに曰ける爾
 二十 も此人の弟子の一人ならず乎ペテロ然すと曰十八 僕等と下吏たち寒に囚て

十九 炭を焼るの處に立て煖まるペテロも彼等と偕に立て煖れり十九 祭司の長イ
 二十 エスに其弟子と其教のこを問ぬ二十 イエス彼に答ける我わらに世に
 二十一 語れり我つねにユダヤ人の平生あつまる所なる會堂および殿にて教誨を
 二十二 なし隠に語れる事なし三 何ぞ我に問る乎われ如何かたりしか聽る者に問
 二十三 よ彼等わが言し所を知り三 イエス如此いひしに旁に立る一人の下吏掌に
 二十四 て彼を打いひける爾祭司の長に答るに此の如か三 イエス彼に答ける
 二十五 若わが語しこと善らず其善らざるを證せよ若し善む何ぞ我を打や三 偕
 二十六 アンナスイエスを繫て祭司の長カヤバの所に遣れり二五 シモンペテロ立て
 二十七 煖り居しが或人々いひける爾も彼の弟子の一人ならず乎ペテロ承ずし
 二十八 て然すと曰り二六 祭司の長の僕の中の一人すなりちペテロに耳を削れし者
 二十九 の親戚いひける我なんぢが彼と偕に園に在しを見しに非ずや二七 ペテロ
 三十 また承はず頓て鶏なきぬ〇二八 人々イエスを曳てカヤバより公廳に往り時
 三十一 すでに平坦なりき彼等汚穢を受んことを恐て公廳に入らず蓋踰越の節筵を

二九 食せんとすれむ也 三〇 ピラト出て彼等に曰ける 如何なる訟をもて斯人を
 三十一 訟るや 三十二 人々こたへける 彼もし悪を行る者に非ずば爾に解さじ 三十三 ピラ
 ト彼等に曰ける 爾曹これを取なんぢらの律法に従ひて審判せよ ユダヤ
 三十四 の人々かれに曰ける 我儕に人を殺の權なし 三十五 是イエスの其死んとする
 三十六 狀を指て語れることに應へり 三十七 ピラトまた公廳に入イエスを召て曰ける
 三十八 爾のユダヤ人の王なるや 三十九 イエス彼に答ける 爾この事を言る 自己
 四十 由か我に就て人の告しに由か 四十一 ピラト答ける 我のユダヤ人ならんや
 四十二 爾の國の民と祭司の長と爾を我に解せり 爾なにを爲しや 四十三 イエス答ける
 四十四 我國のこの世の國に非ず若わが國この世の國ならんば我僕われをユダヤ
 四十五 人に付さざる爲に戦ふべし 然と我國の此世の國ならざる也 四十六 ピラト彼に
 四十七 曰ける 然と爾の王なるか イエス答ける 爾の言どころの如く 我の王な
 四十八 り 我これが爲に生これが爲に世に臨れり 蓋真理について證を爲んため也
 四十九 すべて真理に屬者 我聲を聽 五〇 ピラト彼に曰ける 真理の如何なる者ぞ

三九 此事を言る後また出てユダヤ人に曰ける 我の斯人に罪あるを見ず 四〇 爰
 四一 に爾曹に一の例あり 我踰越の節に一人の囚人を爾曹に釋す 爾曹ユダヤ人
 四二 の王を釋さん事を欲ふや 四十三 衆人また喊叫いひける 斯人に非ず 巴拉バを
 四十四 釋せ 巴拉バの盜賊なる也 四十五
 四十六 其時ピラトイエスを取て鞭つ 四十七 兵卒ども棘にて冕を編かれの首
 四十八 に冠しめ 又紫の袍を衣せて 四十九 三曰ける ユダヤ人の王やすかれ 斯て掌にて
 五十 之を打ち 五十一 ピラトまた外に出て彼等に曰ける 我かれに就て罪あるを見
 五十二 ず之を知せんとて 爾曹に曳出せり 五十三 イエス棘の冕をかぶり 紫の袍を衣て
 五十四 外に出ピラト彼等に曰ける 觀よ 此の人の人なり 六 祭司の長等と下吏これ
 五十五 を見て十字架に釘よ十字架に釘よと喊叫いふ 五十六 ピラト彼等に曰ける 爾曹
 五十七 かれを取て十字架に釘よ 我かれに就て罪あるを見ざる也 五十八 ユダヤ人かれ
 五十九 に答ける 我儕に律法あり 其律法に従へば 彼の死べき者なり 蓋かれ自己
 六十 を神の子と爲べなり 六十一 ピラト此言を聞て益懼る 九 又公廳に入て イエス

十 到日けるの爾何處の者ぞイエス答せざりき。ピラト彼に曰けるの我に答
 ざるか我なんぢを十字架に釘る權威あり亦なんぢを釋す權威あり此事を
 十一 知ざる乎。イエス答けるの爾上より權威を賜らずば我に對て權威ある事
 十二 なし是故に我を爾に解し者之の罪尤も大なり。此後ピラト彼を釋さんと
 十三 謀る然どもユダヤ人さけび曰けるの若これを釋さばカイザルに忠臣なら
 十四 ず凡て自己を王となす者のカイザルに叛く者なり。ピラト此言を聞てイ
 十五 エスを曳出し鋪石と云る所へブルの言にて譯バガバタと云と云るの審判
 十六 の座に自ら坐れり。其日の踰越節の備日にて時の約十二時をるなりき
 十七 ピラトユダヤ人に曰けるの爾曹の王を見よ。かれら喊叫て之を除け之を
 十八 除け十字架に釘よと曰ピラト彼等に曰けるの我なんぢらの王を十字架に
 十九 釘べけんや祭司の長等こたへけるのカイザルの他われらに王なし。遂に
 二十 ピラト彼を十字架に釘しめんとて彼等に付せり是に於て彼等イエスを取
 二十一 て曳往り。イエス十字架を負て髑髏と云る所へブルの言にて曰バゴルゴ

十八 タといふ所に往り。此所にて彼を十字架に釘たり別に二人の者かれと偕
 十九 に十字架に釘らる一人の右一人の左イエス中に居り。ピラト罪標を十字
 二十 架につけ此のユダヤ人の王なるナザレのイエスなりと書たり。許多のユ
 二十一 ダヤ人この罪標を讀り蓋イエスを十字架に釘し所の京城に近ければ也其
 二十二 標のへブルギリシヤロマの言にて書たり。ユダヤ人の祭司の長等ピラ
 二十三 トに曰けるのユダヤ人の王と書す勿れ自らユダヤ人の王なりと言しと書
 二十四 すべし。ピラト答けるの我書し所すでに書たり。兵卒どもイエスを十
 二十五 字架に釘し後ろの上衣をとり四に分て各の一を取また裏衣を取り此裏
 二十六 衣の縫なく上より渾く織るもの也ければ。互に曰けるの之を裂ずして誰
 二十七 の属にならんか。圖にすべし此の聖書に彼等たがひに我衣を分わが裏衣を
 二十八 圖にすと云しに應せん爲なり兵卒ども已に此事を行り。偕イエスの母と
 二十九 母の姉妹およびクロバの妻の MARIA 並マгдаラの MARIA の十字架の傍
 三十 に立り。イエス母と愛する所の弟子と傍に立るを見て母に曰けるの婦よ

二七 此なんぢの子なり二七また弟子に曰ける二八此なんぢの母なり是時二九の弟子
 二八 かれを己の家二九に携往り三〇斯てイエス諸の事三一の已三二に竟るを三三えり聖書三四に應せ
 二九 ん爲三〇に我渴といへり三一此處三二に醋三三の満三四たる器三五皿三六ありしか三七バ兵卒三八ども海三九絨四〇を
 三〇 醋四一に漬四二し牛膝草四三に束四四て其口四五に予四六ふ四七イエス醋四八を受四九し後五〇いひける五一事五二竟五三ぬ
 三一 首五四を俯五五て靈五六を付五七せり五八〇五九是日六〇の節六一筵六二の備六三目六四なり此安息日六五の大六六なる安息日
 三二 なれ六七バ屍六八を十字架六九の上に置七〇ことを欲七一ざるが故七二にユダヤ人七三ピラト七四に對七五かれ
 三三 らの脛七六を折七七て其屍七八を取七九除八〇ことを求八一へり八二是八三に於八四て兵卒等八五イエス八六と偕八七に十
 三四 字架八八に釘八九られし者九〇の一人九一の脛九二を先九三にをり次に亦九四一人九五の脛九六を折九七後九八にイエ
 三五 ス九九に來一〇〇しに已一〇一に死一〇二たるを見一〇三て其脛一〇四を折一〇五ざり一〇六き一〇七一人一〇八の兵卒一〇九戈一一〇にて其骨一一一を
 三六 刺一一二けれ一一三バ直一一四に血一一五と水一一六と流出一一七たり一一八之一一九を見一二〇し者一二一證一二二を立一二三るの證一二四ハ眞一二五なり彼一二六ま
 三七 たら自ら一二七言一二八とてその眞一二九なるを一三〇えり爾曾一三一をして信一三二せしめんが爲一三三なり一三四この事
 三八 成一三五り録一三六して其骨一三七の一一三八をも摧一三九ざるべしと有一四〇に應一四一せん爲一四二なり一四三また他の書一四四に
 三九 彼等一四五の刺一四六し者一四七を彼等一四八觀一四九べしと云一五〇り一五一〇一五二是後一五三アリマタヤ一五四のヨセフ一五五と云一五六る者

三九 にて前四〇にユダヤ人四一を懼四二て隠四三にイエスの弟子四四となれる者四五イエスの屍四六を取四七ん
 四〇 きてピラト四一に求四二ピラト四三之四四を許四五し四六に因四七きたりて其屍四八を取四九り五〇また五一曩五二に
 四一 夜間五三イエス五四に就五五しニコデモ五六といふ人五七没藥五八と蘆薈五九を和六〇およる百斤六一ばかり携六二
 四二 來六三る六四彼等六五イエスの屍六六を取六七てユダヤ人六八の葬六九の例七〇に循七一ひ七二之七三を布七四と香七五に
 四三 て裹七六り七七さて十字架七八に釘七九し其近傍八〇に園八一あり園八二の中に未八三だ人八四を葬八五りし事八六な
 四四 き八七新八八き墓八九あり九〇是日九一のユダヤ人九二の節九三筵九四の備九五目九六あり又九七墓九八近九九かりけれ一〇〇バ其處
 四五 にはイエスを置一〇一り
 四六 一週一〇二の首一〇三の日の朝一〇四いまだ味一〇五うち一〇六にマ一〇七グ一〇八ダ一〇九ラのマ一一〇リア一一一墓一一二に來一一三て石
 四七 の墓一一四より取一一五去一一六ありしを見一一七ニ遂一一八にシモン一一九ペテロ一二〇また一二一イエスの愛一二二せし所一二三の弟
 四八 子一二四に趨一二五往一二六て曰一二七ける一二八ハ墓一二九より主一三〇を取一三一し者一三二あり我一三三儕一三四何處一三五に置一三六し一三七ヤ其處一三八を知一三九ず
 四九 三一四〇ペテロ一四一と彼一四二一人一四三の弟子一四四いで一四五墓一四六に往一四七二人一四八ども一四九に趨一五〇る一五一他の弟子一五二ペテロ
 五〇 より疾一五三趨一五四て先一五五に墓一五六に至一五七ぬ一五八俯一五九て屍一六〇を裹一六一し布一六二を置一六三るを見一六四たれども入一六五ず一六六シ
 五〇 モン一六七ペテロ一六八彼一六九に後一七〇て來一七一り墓一七二にいり裹一七三し布一七四を置一七五るを見一七六たり一七七七一七八の首一七九を裹一八〇し

八 手巾の屍を裹し布と同一に置ず離て別の處に疊て置り八是に於て先に墓に
 九 來れる他の弟子も入これを見て信せり九錄してイエスの死より甦るべき
 十 事あるを彼等いまだ知ざる也十斯て弟子己の宿に歸れり十二マリアの墓
 十一 の外に立て哭つゝ墓にむかひ俯て十二二人の天使えろき衣を着イエスの屍
 十二 を置たりし所の首の方に一人足れ方に一人坐し居を見たり十三天使かれに
 十三 曰ける婦よ何ぞ哭くや彼こたへける我主を取し者あり何處に置しか
 十四 を知ざれば也十四如此いひて反顧イエスの立しを見る然どもイエスあるこ
 十五 とを知らず十五イエス彼に曰ける婦よ何ぞ哭くや誰を尋るかマリア園を守る
 十六 人あらんと意ひ彼に曰ける君よ爾もし彼を轉移しならん何處に置し
 十七 か我に告よ我これを取べし十六イエス彼にマリアよといふ婦かへりみて彼
 十八 にラボニと曰り之を譯バ夫子なり十七イエス彼に曰ける我に捫こと勿れ
 十九 我いまだ我父に升ざれば也わが兄弟に往ていへ我の我父すなわち爾曹が
 二十 父わが神すなわち爾曹が神に升ると十八マグダラのマリア主を見しとと主

十九 の如此おのれに言給へるといふ事を弟子等に往て告○十九此日の暮時すな
 二十 いち一週之首の日弟子等ユダヤ人を懼るゝに因て集れる所の門を閉おき
 二十一 しがイエス來て其中に立かれらに曰ける爾曹安かれ二十如此いひし後其
 二十二 手と脅を彼等に見す弟子たち主を見て喜べり三イエスまた彼等に曰ける
 二十三 爾曹安かれ父の我を遣し如く我も爾曹を遣さん三如此いひしのち氣
 二十四 を嘘て彼等に曰ける聖靈を受よ三三なんぢら誰の罪を釋すとも其罪ゆる
 二十五 され誰の罪を定るとも其罪さだめらるべし三三イエス來しとき十二の弟子
 二十六 の一人なるデトモと稱るトマス彼等と偕に在ざりき三五是故に他の弟子か
 二十七 れに曰ける我儕主を見たりトマス彼等に曰ける我もし其手に釘の迹
 二十八 を見わが指を釘の迹に探わが手を其脅に探に非ずバ信せじ二六八日を越し
 二十九 後また弟子たち室の内に在けるがトマスも彼等と偕に在り門を閉たるに
 三十 イエス來て其中に立て曰ける爾曹安かれ二七遂にトマスに曰ける爾
 三十一 指を此に伸て我手を見なんぢの手を伸て我脅にさせ信せざる勿れ信せよ

二八 トマス答て彼に曰ける我主よ我神よ二九 イエス彼に曰ける爾われを
 三〇 見しに因て信ず見ずして信ずる者の福なり三一 此書に録さる外なほ許多
 三一 の奇跡をイエス弟子の前にて行り三二 此書を録せるの爾曹をしてイエスの
 神の子キリストなる事を信せしめ之を信じ其名に因て生命を得させんが
 ため爲なり

三二 此後イエス復テベリアの湖にて弟子等に己を現せり其現せる
 三三 と左の如しニシモンペテロとデドモと云るトマス及ガリラヤのカナの
 三四 ナタナエルとゼベダイの子等また他の二人の弟子どもに在
 三五 三シモンペテ
 三六 口彼等に曰ける我漁に往ん彼等いひける我儕も偕に往ん彼等いで
 三七 舟に登しが此夜の何の所獲も無りき 四 巳に夜も明たるにイエス岸に立り
 三八 然と弟子等のイエスなる事を知す 五 イエス彼等に曰ける小子どもよ
 三九 食物あるや彼等こたへける無 六 イエス彼等に曰ける網を舟の右に撒
 四〇 ぱ所獲あらん遂に網をうつ魚おほきに因て曳擧ること能はず 七 是に於て

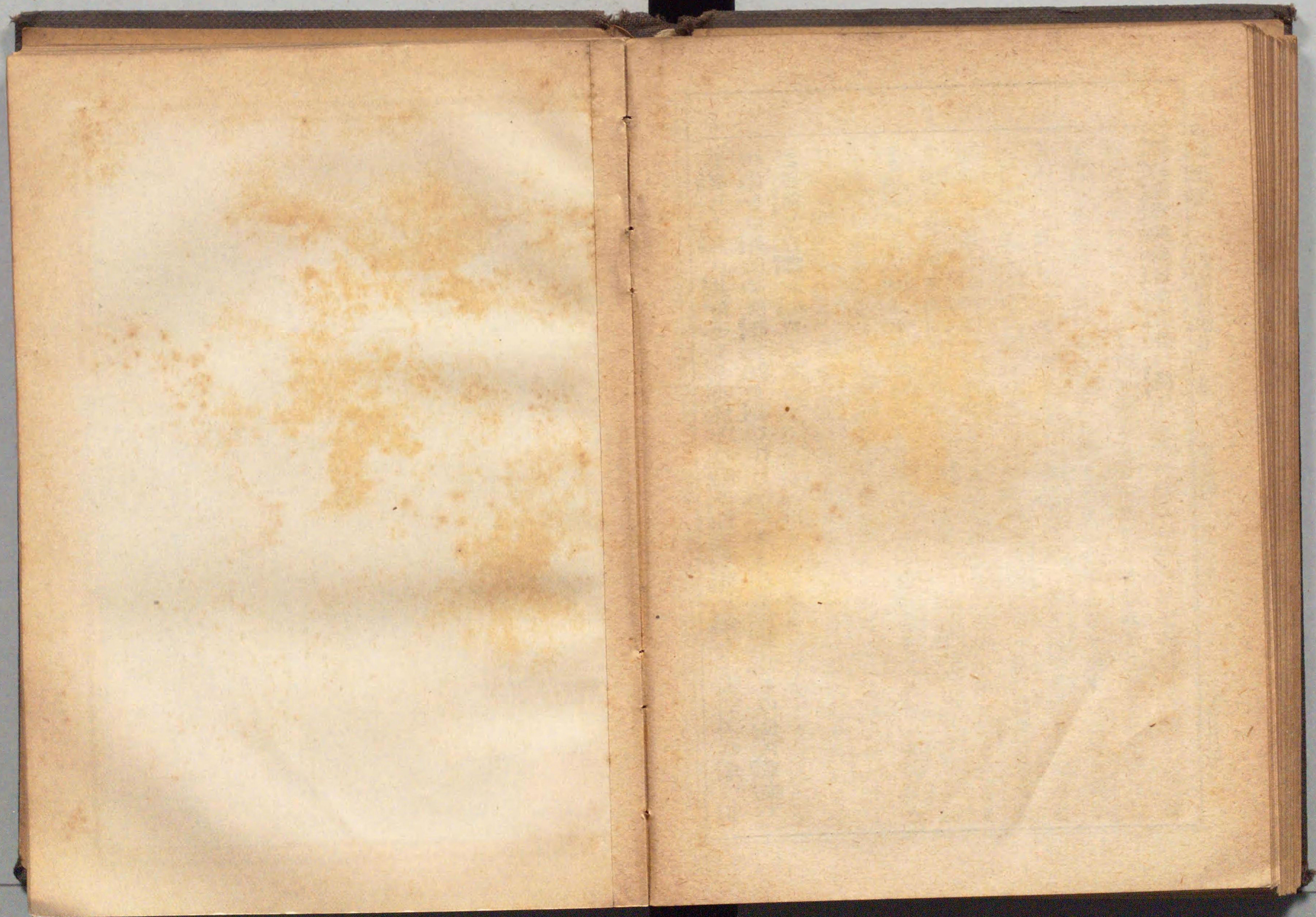
八 イエスの愛せし所の彼弟子ペテロに曰ける是主なりシモンペテロ主な
 九 りと聞て裸なりしが衣をつけ帯して湖に投入ぬ 八 他の弟子等の小舟にて
 一〇 魚の入たる網を曳て至れり蓋岸を距こと遠からず五十間許なりければ也
 一一 九岸に着しに炭火と其上に載たる魚およびパンあるを見たり 十 イエス彼
 一二 等に曰ける今獲し所の魚を少し携來れ 十一 シモンペテロ舟にゆき網を岸
 一三 に曳來しに其網の中に大なる魚百五十三尾いたり如此おほかりければ
 一四 網の裂ざりき 十二 イエス彼等に曰ける來て食せよ弟子たち敢て彼に爾の
 一五 誰なると問ることをせず此の主なりと知べなり 十三 イエス來てパンを取か
 一六 れらに予ふ魚をも亦ろの如せり 十四 イエス死より甦りしのち己を弟子等に
 一七 現せると是三次なり 十五 偕かれら食して後イエスシモンペテロお曰ける
 一八 のヨナの子シモンよ爾これらの者に過て我を愛するや彼いひける主よ
 一九 然わが爾を愛することの爾知りイエス彼に曰ける我羔を牧 十六 また二次
 二〇 かれに曰けるのヨナの子シモンよ我を愛する乎かれ曰ける主よ然わが

十七 爾を愛することなんぢをの爾なんぢ知りイエス彼に曰けるわがひつじの我羊を牧かへ三次みたびかれに曰けるいひのヨナの子シモンこよ我を愛する乎かペテロみたび二次みたびわれを愛する乎かと言れしいひに因てよ憂うれふ斯かくて答けるこたへの主まえらざる所ところなし我わがなんぢを愛することいの爾なんぢ知りなんぢイエス彼に曰けるいひの我羊を牧かへ誠まことに實まことに爾なんぢに告つげん爾なんぢいとけなき時ときみづからお帯おびし意こころに任まかせて遊あそ行まぬ老おいて手てを伸のべ人ひと爾なんぢを束くり意こころに欲かなざる所ところに曳ひきかへん十九如此かくいへるいひの其その如何いかなる死ちにて神かみを榮あがめんといふ事ことを示あめたるなり此これを言いて後のち又また彼かれに曰いけるいひの我わがに從したがへ二十ペテロ反ふりかへり顧みイエスの愛あいせし弟子で子の從したがへるみるを見みこの弟子でしの食あする時ときイエスの懷むねに倚よりて主まを賣わたす者ものの誰たれぞやと問とひ弟子でしなり三ペテロ之これを見みてイエスに曰いけるいひの主まよ斯この人ひといかに三イエス彼かれに曰いけるいひの我わがもし彼かれが存ながらわがきたるまつを待まつを欲ほべ爾なんぢに何なにの與かはらんや三爾なんぢの我わがに從したがへ三是こゝに於おいて此この言こと兄弟あな弟だの中ちゅうに傳つたはりて此この弟子でし死あずと言いひ然さども三イエスペテロに彼かれの死あずと言いひに非あらず我わがもし彼かれが存ながらわがきたるまつを待まつを欲ほべ爾なんぢに何なにの與かはらん乎やと言いひ二此これ等の事ことについて證あかしをなし且またこれ

二五 爾なんぢを愛することなんぢをの爾なんぢ知りなんぢイエス彼に曰けるいひの我羊を牧かへ三次みたびかれに曰けるいひのヨナの子シモンこよ我を愛する乎かペテロみたび二次みたびわれを愛する乎かと言れしいひに因てよ憂うれふ斯かくて答けるこたへの主まえらざる所ところなし我わがなんぢを愛することいの爾なんぢ知りなんぢイエス彼に曰けるいひの我羊を牧かへ誠まことに實まことに爾なんぢに告つげん爾なんぢいとけなき時ときみづからお帯おびし意こころに任まかせて遊あそ行まぬ老おいて手てを伸のべ人ひと爾なんぢを束くり意こころに欲かなざる所ところに曳ひきかへん十九如此かくいへるいひの其その如何いかなる死ちにて神かみを榮あがめんといふ事ことを示あめたるなり此これを言いて後のち又また彼かれに曰いけるいひの我わがに從したがへ二十ペテロ反ふりかへり顧みイエスの愛あいせし弟子で子の從したがへるみるを見みこの弟子でしの食あする時ときイエスの懷むねに倚よりて主まを賣わたす者ものの誰たれぞやと問とひ弟子でしなり三ペテロ之これを見みてイエスに曰いけるいひの主まよ斯この人ひといかに三イエス彼かれに曰いけるいひの我わがもし彼かれが存ながらわがきたるまつを待まつを欲ほべ爾なんぢに何なにの與かはらんや三爾なんぢの我わがに從したがへ三是こゝに於おいて此この言こと兄弟あな弟だの中ちゅうに傳つたはりて此この弟子でし死あずと言いひ然さども三イエスペテロに彼かれの死あずと言いひに非あらず我わがもし彼かれが存ながらわがきたるまつを待まつを欲ほべ爾なんぢに何なにの與かはらん乎やと言いひ二此これ等の事ことについて證あかしをなし且またこれ

新約全書 約翰傳福音書 終

新約全書 約翰傳第廿一章 廿五節 三百廿三

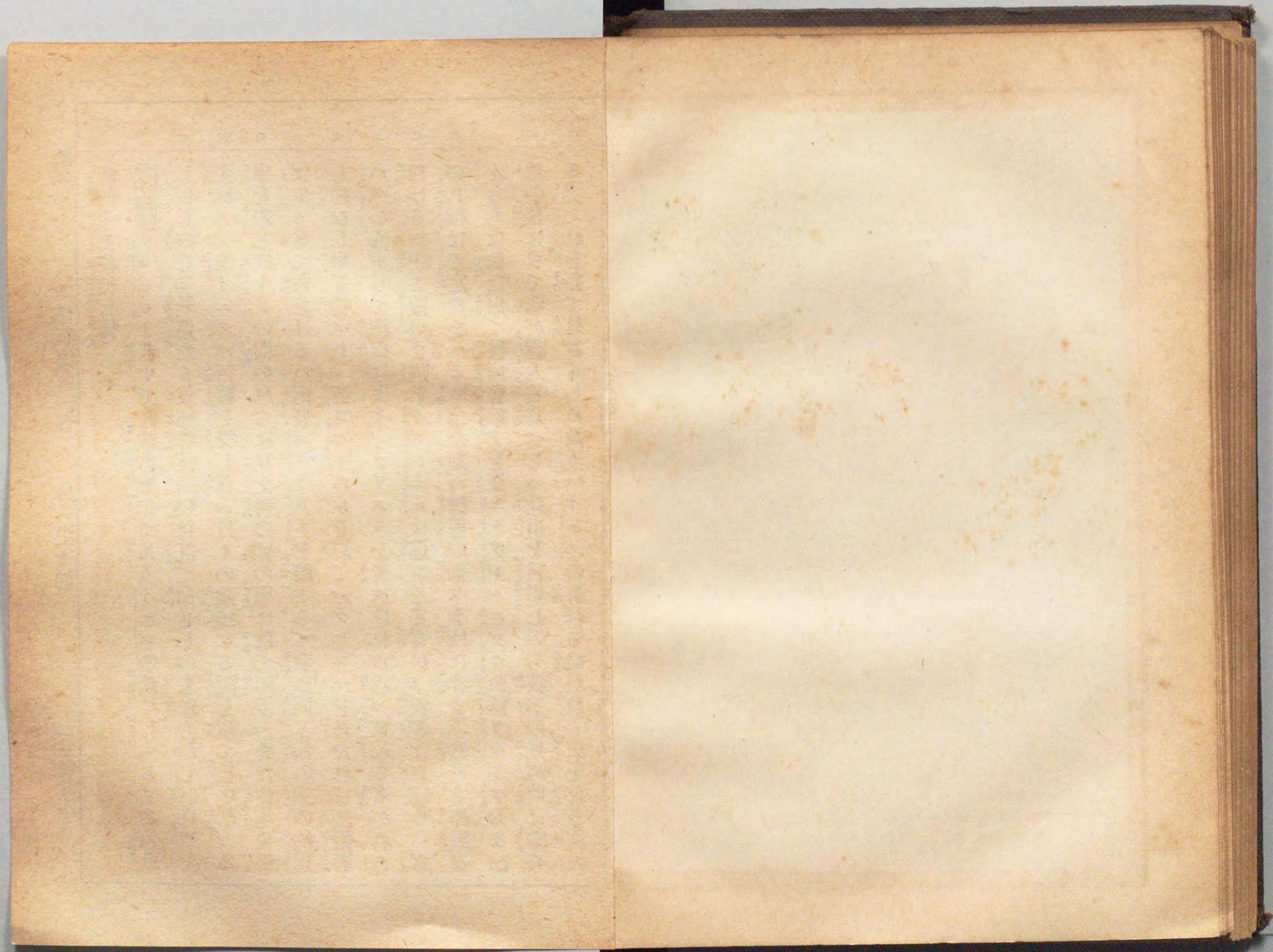




使徒
の傳道
の圖

(一 地名 中 冊)

0 50 100 150 200 250 300
英里



新約全書使徒行傳

二 三 四 五 六 七 八 九 十

テヨビロよ我すでに前書を作て凡ろイエスの始て行へるところ教
 所を録しニ其選たる使徒等に聖靈に託て命せしのち擧られし時にまで
 至れり三夫イエスの苦難を受し後おほくの確據なる證を以て己の活たる
 事を現し四十日の間かれらに見之神の國の事に就て語りまた彼等と偕
 に集り居て命じけるの爾曹エルサレムを離ずして我に聞る所の父の約束
 し給ひし事を待べし五蓋ヨハ子の水を以てバプテスマを施たれども爾曹
 の久からずして聖靈によりバプテスマを受べければ也六集れる者かれに
 問けるの主よ爾いま國をイスラエルに還さんと爲か七彼等に曰けるの父
 の其權にて定たまへる時また期の爾曹が知べき所に非ず八然ども聖靈な
 んぢらに臨に因て後爾曹能力を受エルサレムユダヤ全國サマリアおよび
 地の極にまで我が證人と爲べし九此事を言畢しのち彼等の見が間に擧ら
 る雲これを接て見ざらしめたり十イエスの昇れる時かれら天を仰ぎ視た

十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

りしに白衣を着たる二人の人ありて傍に立十一曰けるのガリラヤ人よ何故
 に天を仰て立るや爾曹を離て天に擧られし此イエスの爾曹が彼の天に昇
 るを見たる其如く亦きたらん十二其時かれら橄欖と名る山よりエルサレ
 ムに歸る此山のエルサレムに近く約う安息日に行うる程なり十三已に入て
 樓に登れり此に留れる者のペテロヤコブヨハ子アンデレピリポトマス
 バルトロマイマタイアルバイの子ヤコブゼロテと云るシモンヤコブの
 兄弟なるユダなり十四此人々の婦等及びイエスの母マリア並イエスの兄
 弟と偕に心を合せて恒に祈禱を務たり十五當時ペテロ弟子等（其集れる
 者おほよる百二十人なり）の中に立て曰けるの十六人々兄弟よ聖靈ダビデ
 の口によりてイエスを捕る者を導けるユダに就て預じめ語たる此聖書の
 必ず應ずべかりし也十七蓋彼も我儕と共に列りて此職を任たれば也十八斯人
 の不義の價をもて地所を買また倒に墮て真中より裂れ其腸ごとくく流
 出たり十九此事エルサレムに住る凡の人に知しかば其地所を方言にてアケ

二十 ルダマと呼これを譯ト血チの地所チシヨなり三詩カの篇マキに録スして彼カレの家イヘの墟クナシくなれ
 二一 其中そのうちに人ヒトを住居すまはする勿なかれ彼カレの職ツトメ他人ヒトに得エさせよと云イり三是故このゆゑに主カミイエ
 二二 スの我儕われらが中うちに往來ゆきくし給たまひたる間あひだ即すなはちヨハ子のバプテスマより始はじめわれら
 二三 を離はなれ三擧あげられし日ひに至いたるまで常つねに我儕われらと偕ともに在ありし者ものの中うち一人ひとりわれらと共とも
 二四 に其そのよみがへ甦よみがへりし事ことの證人あかしと爲なるべき也なり是こゝに於おいてバルサババルサバと稱よぶヨセフ又またの名な
 二五 のユストと云いへる者ものとマツテアマツテアとの二人ふたりを擧あげて祈いのりひける三衆人あまたの心こゝろを
 二六 識したまふ主カミ願ねがはく三奉事つかふことと使徒あの職つとめを得えせんが爲ために此この二人ふたりのうち
 二七 孰いづれを選えらびし三示しめし給たまへ三既すでにユダユダの此職このつとめを離はなれ其往そのゆくべき所ところに往ゆたり
 二八 斯かくて三鬪くを取とりしにマツテアマツテアに當あたり三彼かれ十一人じふいちにんの使徒等あと共ともに列つられり
 二九 **第三章** ペンテコステの日ひに至いたり三弟子等でしみな心こゝろを合あはせて一處ひとところに在ありしに二俄はか
 三〇 に天てんより迅風はやしきの如ごとき響ひびありて彼等かれらが坐ざする所ところの室いへに充みり三路ほの如ごときの現あらは
 三一 れ岐わかれ三彼等かれら各人おのの上に止とどまる三是こゝに於おいて彼等かれらみな聖靈せいれいに満みたれ其聖靈そのせいれいの
 三二 言いはし三ひるに隨したがひて異ことなる諸國くわんこくの方言ことばを言いふ三時ときに敬虔つつしみあるユダ

六 ヤヒト天下てんかの諸國くわんこくより來きたり三エルサレムエルサレムに留とどまる者ものあり三此音このおとおこりしに
 七 因よおほくの人々ひと集あつ三りけるが各人おのの方言ことばを彼等かれらの語かたれるを聞きて躁さわわへ
 八 り三七なみ三駭おろ三き三異あや三し三互たがひに曰いひける三視みよ三此語このかたる者もの凡すべてガリラヤ人びとなら
 九 乎や如何いかにして我儕われらおの三生なれし所ところの方言ことばを彼等かれらより聞きか三我儕われらのバ
 十 ルテア人びとメデア人びとエラム人びとおよびメソポタミアメソポタミアユダヤ人ユダヤ人カバドニア人カバドニア人ホン
 十一 トアシア人びとフルギア人びとバムフリア人びとエジプト人びと又またクレチ人びとに近ちかきリブエリブエの地ちな
 十二 どに住すむ者もの又またロマロマより來きたり居をる三或あるユダヤ人ユダヤ人及び其教そのをしへに入いり三又またク
 十三 レテ人びとアラビヤ人びとなるに彼等かれらが我儕われらの方言ことばをもて神かみの大おほいなる用みわざを語かたるを
 十四 聞きか三十二みな皆みなおどろき訝いぶかりたがひに曰いひける三此こ何いかなる故ゆゑや三或あるの嘲あざけりて此
 十五 人々ひとの甘あまき葡萄酒ぶどうしゆに満みたれたる者ものなりといふ人ものあり三是こゝに於おいてペテロペテロ十
 十六 一人いちにんと偕ともにたち聲こゑを揚あげ三彼等かれらに對むかひひける三ユダヤ人ユダヤ人および凡すべてエルサ
 十七 レムレムに住すむ者もの爾曹なんぢらよく我言わがことばを聞きて之これを知しる三今いま晝ひるの九時くじなれば爾曹なんぢらの
 十八 逆料おもふ三とく此人々このひとの醉よる者ものに非あらず三これ即すなはち預言者よげんヨエルヨエルに因よりて語かたれる

十七 所なり十七 神いひ給く赤の世に至て我わが靈をもて凡の人に注ん爾曹の子
 女も預言すべし又なんぢらの幼者の異象をみ老者の夢を見べし十八 其とき
 十九 我わが靈を我僕なる男女に注ん彼等も亦預言すべし十九 われ上なる天に奇
 跡を現し下なる地に休徴を示さん即ち血あり火あり烟あるべし二十 主の大
 なる顯赫日の來ん前に日晦く月の血に變ん三 凡て主の名を呼頼む者の
 救るべし三 イスラエルの人々よ此等の言を聽うれナザレのイエスの爾曹
 二 の知ごとく神かれに託て爾曹の中に行し妙なる能力と奇跡と休徴とを以
 三 て爾曹に證し給る所の人なり三 此人の即ち神の定し旨と預め知たまふ所
 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三十 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八
 二七 居んニ七 此れ爾の我魂を陰府に遺おかず又なんぢの聖者を朽果しめざるが
 二六 我動されざる爲なりニ六 是故に我心の樂み我舌の喜べり且わが肉體の望に
 二五 蓋ダビデ彼に就て曰ける我わが前に主の常に在を見るの我右に在の
 二四 其死の苦を釋て之を甦らせ給へり後死に繋れ在べき者ならざれば也二五
 二三 二 應て解さる爾曹の無法の手をもて之を捕へ十字架に釘て殺せり二四 神の
 二二 救るべし三 イスラエルの人々よ此等の言を聽うれナザレのイエスの爾曹
 二一 跡を現し下なる地に休徴を示さん即ち血あり火あり烟あるべし二十 主の大
 二十 なる顯赫日の來ん前に日晦く月の血に變ん三 凡て主の名を呼頼む者の
 十九 我わが靈を我僕なる男女に注ん彼等も亦預言すべし十九 われ上なる天に奇
 十八 女も預言すべし又なんぢらの幼者の異象をみ老者の夢を見べし十八 其とき
 十七 所なり十七 神いひ給く赤の世に至て我わが靈をもて凡の人に注ん爾曹の子

二八 故なりニ八 爾すでに我に生命の路を示す我を爾の前に置て喜に盈しめんと
 二九 二人々兄弟よ我始祖ダビデに就て憚る所なく爾曹に語る是當然ことなり
 三十 彼の既に死て葬られ其墓の今日に至るまで我儕の中にあり三十一 彼の預言者
 三一 にして神これに誓を立て其血統の中より一人を擧て位に即しめんと矢た
 三二 せへるを知三 預め此事を曉るが故にキリストの甦る事につき語て彼の陰
 三三 府に遺おかれず亦の肉體も朽果すと曰るなり三三 既に神のイエスを甦ら
 三四 せ給へり我儕の皆の證人なり三三 是故に彼の既に神の右に擧られ約束の
 三五 聖靈を父より受て今なんぢらが見どころ聞どころの者を注り三五 夫ダビデ
 三六 天に昇しことなし然るに彼みづから言主わが主に曰ける我なんぢの
 三六 敵を爾の足登と爲まで我右に坐すべしと三六 然ら凡てイスラエルの全家よ
 三七 爾曹が十字架に釘し此イエスを立て神これを主となしキリストとなし給
 三七 しことを確に知三 彼等これを聞て其心刺るゝが如し是に於てペテロと他
 三八 の使徒等に問ける人々兄弟よ我儕の何を爲べき乎三六 ペテロ彼等に曰け

るい爾曹おのく悔改めて罪の赦を得んが爲にイエスキリストの名に託
 てバプテスマを受よ然バ爾曹も聖靈の賜を受べし三九この約束の爾曹およ
 び爾曹の子孫また凡の遠人すなわち主たる我儕の神に召るる人々に屬な
 り四十また多言をもて證して勸けるの爾曹この邪なる世より救出されよ四一
 其時この言を聞納し者のバプテスマを受たり是日弟子に加れる者おほよ
 り三千人四二彼等の常に使徒等の教訓をうけ交接をなしパンを擘ことと祈
 禱とを務む四三是に於て敬畏人々の心に生ず又使徒等に託て許多の奇跡
 と休徴おこなえれたり四四信者のみな一處に會て諸物を共にし四五産業と
 其所有を鬻て各人の用に從ひ之を分與へぬ四六日々心を合せて殿に在また
 家に於てパンをささ歡喜と誠心をもて食を同にし四七神を讚美すべての民
 に悦ぶる主すくはるる者を日々教會に加たまへり

第三章 第三時祈禱の時に當てペテロとヨハ子共に殿に上しに一一人の生
 來なる跛あり殿にいる人に施濟を求ん爲に日ごと負れて殿の美と名る門

に置く三彼ペテロとヨハ子の殿に入んとするを見て施濟を求り四ペテロ
 ヨハ子と共に熟々之を視て曰けるの我儕を觀よ五かれ得こと有んと意ひ
 て彼等を見つめたり六ペテロ曰けるの金銀の我に在し惟われに有ものを
 爾に予ふナザレのイエスキリストの名により起て行め七遂に其右の手を
 執これを起ければ其足と蹠たゞちに健勁なりて八躍立かつ行めり踊あゆ
 み神を讚美つゝ彼等と偕に殿に入ぬ九衆民かれの行み神を讚るを見て十
 素の殿の美門に坐し施濟を求たりし者なるを識この人に所遇ことを
 大に駭き奇めり十一の跛者ペテロとヨハ子にすがり居し間に民みな駭こ
 と甚しくソロモンの廊と名る所に趨集れり十二ペテロ之を見て民に答ける
 人イスラエルの人々よ何故に此事を奇とするや我儕が自己の能と徳をも
 て此人を行しゝが如く何ぞ我儕に目を注るや十三夫アブラハムイサクヤコ
 ブの神わが先祖たちの神の其僕イエス即ち爾曹が解しゝ者ピラトが釋す
 とを擬たる時の前に爾曹が拒し所の者を榮給へり十四爾曹の聖者義者

十五 拒み人を殺しし者を己に予られん事を求十五かつ生命の主を殺せり神の
 十六 之を死より甦らせ我儕の其證人なる也十六イエスの名に其名を信するに由
 十七 て爾曹が見どころ識どころの此人を健勁せり如此イエスに由る信仰の爾
 十八 曹すべての人の前に於て此人を全く愈たり十七兄弟よ我の知なんぢらが行
 十九 事の知らざるに由てなり爾曹の有司等も亦然り十八然ども神の凡の預言者
 二十 の口に託てキリストの苦を受ることを預め示し其言を如此かなんせ給へ
 二十一 是故に爾曹罪をくい心を改めて其罪を抹るゝことを爲よ蓋主の前より
 二十二 安舒日の來り二十且あらかじめ擬たまひしイエスキリストを遣れんが爲な
 二十三 り三神の古より聖預言者の口に託て言たまひし萬物の復興ん時まで天の
 二十四 必ず彼を受おくべし三モーセ我儕の先祖たち告て曰ける主なる爾曹
 二十五 の神の爾曹の兄弟の中より我に似たる一人の預言者を起さん其爾曹に告
 二十六 する凡の言を聽べし三凡て此預言者に聽從のざる者の民の中より取滅さる
 二十七 又サムエルより以來かたりし所の預言者も皆あらかじめ此日を指て言

二五 夫爾曹の預言者の子孫なり且神の我儕が先祖たちに立たまひし契約
 二六 を承繼ものなり即ちアブラハムに告て地の諸族の爾の裔に由て福を獲ん
 二七 と日給へり二六神すでに其僕イエスを立なんぢら各人を其惡より引反し福
 二八 を獲させんが爲に先なんぢらに彼を遣せり
 二九 彼等が民を教へ且イエスの事をひき死より復生の事を宣るにより
 三十 祭司殿司およびサドカイの人たち心を惱し其民に語れるとき突然さ
 三十一 たりて親手これを執ふ時すでに暮ければ明日まで獄に囚おけり三十一然ども
 三十二 其道を聽し者の多これを信ず其數おほよ五千人なり三十二明日有司たち長
 三十三 老學者及び祭司の長アンナ並カヤバヨハ子アレキサンデルと祭司の
 三十四 長の凡の族エルサレムに集り三十三使徒等を其中に立せて問ける爾曹何の
 三十五 權また何の名に由て之を行ひしや三十四其時ペテロ聖靈に満され彼等に曰け
 三十六 るの民の有司及びイスラエルの長老よ九我儕も病たる人に行ひし善事
 三十七 につき之を如何して愈しと今日訊れな三十五爾曹とイスラエルの民もみ

十一 な知べし其なんぢらが十字架に釘しどころ神の甦らせ給し所のナザレの
 イエスキリストの名に由て此人健勁なることを得なんぢらの前に立たり
 十二 これ即ち爾曹工匠の棄し所の石屋の隅の首石となれる者なり此は
 別々に救ある事なし蓋天下の人の中に我儕の依頼て救るべき他の名を賜
 ざれば也彼等ペテロとヨハ子の忌憚る所なきを見て其無學の小民なる
 十三 識之を奇みたり又そのイエスと偕に在しを知かつ愈されたる人の
 十四 彼等と偕に立るを見により駭すべき言なかりき斯て彼等に命じて集議
 十五 所を去しめ後に相議て曰けるハ十六 この二人に何を處べきや彼等が既に著
 十六 べき休徴を行へる事ハ凡てエルサレムに居者の明かに知どころ也われら之
 十七 を言滅こと能ず然ども此事の猶ひろく民に傳らざる爲に彼等を恐喝し
 十八 此後ろの名に就て人に語ることを勿しめん遂に彼等を召て更にイエスの
 十九 名に就て語ることを教ることを爲なかれと戒むペテロヨハ子彼等に答て
 曰けるハ神に聽よりも愈て爾曹に聽ハ神の前に在て義たらんか爾曹みづ

二十 からの之を判よ三われら見しどころ聞し所のもの言ざるを得ざる也二人
 二十一 人ろの所爲に因て神を榮たれば彼等民を畏れ此二人を罪するに由なく更
 二十二 之を恐喝して釋せり三ろの奇なる跡に由て癒されたる人の四十歳餘な
 二十三 りき〇三かれら釋されて其友の所にゆき祭司の長と長老の言しことを悉
 二十四 く告ろの友これを聞て心を合せ神に對ひ聲を揚て曰けるハ主よ爾ハ天
 二十五 と地と海と其中の萬物を造たまひし神なり三三なんぢ曾て其僕ダビデの口
 二十六 に託て何故に異邦人の喧嘩もろくの民ハ徒事を謀る乎地の王等の起
 二十七 て群伯と共に集り主および其キリストに逆ふと云り二七うれ誠にヘロデと
 二十八 ポンテヲピラト異邦人およびイスラエルの民相共に此城に集り爾が膏を
 二十九 沃たる聖僕イエスに逆へり二八これ爾の手なんぢの旨にて預じめ定め給
 三十 ひし事を彼等の成るなり三九主よ今彼らの恐喝を見たまへ願くハ爾が手を
 伸て醫を施し爾の聖僕イエスの名に託て休徴と奇跡を行はしめ爾の
 三十一 僕等に隠するとなく爾の道を宣ることを得させよ三二かれら祈禱を畢し時

三 一の集れるところ震動みな聖靈に満されて臆する所なく神の道を宣○
 三二 信者のみな心を一にし意を一にして誰一人の所有を己が物と云となく
 三三 凡て之を共に有り使徒たち大なる能をもて主イエスの魅りし事を證し
 三四 彼等みな大なる恩を蒙れり其中に一人も窮乏者なかりき蓋地所あるひ
 三五 の家を有る者其を售て其售し所の價を挈來り使徒等の足下に置これ
 三六 を各々の用に從ひて分子しが故なり三六レビの族にてクプロに生しヨセフ
 三七 の使徒等に呼れてバルナバと稱之を譯バ勸慰の子三七この人田疇わりけ
 三 然るにアナニアといふ人りの妻サツピラと同一産業を鬻二の價
 四 の幾分を藏し餘の幾分を挈來りて使徒等の足下に置ぬ其妻も之を知り三
 五 ペテロ曰けるハアナニアよ何故に爾の心サタンに満され聖靈に對ひ偽て
 六 地所の價の幾分を藏す事をせし乎四地所いまだ售ざる時ハ爾の有ならず
 七 や已に售たりとも亦なんぢの權に属するならずや何故に爾の心この事を發

五 念しや爾人に對て偽るに非ず神に對て偽れる也五アナニア此言をさし
 六 て氣絶之を聞者みな大に懼る六少者ども起て彼を殮み昇出して葬れり七
 七 約ろ三時をかり過りの妻いまだ此所遇を知らずして入來れり八ペテロ彼に
 八 曰けるハ爾曹この價に地所を售しや我に告よ答て曰けるハ然り其價なり
 九 九ペテロ彼に曰けるハ爾曹心を合せて主の靈を試るハ何ぞや視よ爾の夫
 十 を葬りし者の足門外に在また爾をも昇出さん十婦直に其足下に仆て氣た
 十一 ヲ少者ども入來て其死たるを見これをも昇出して其夫の側に葬れり十一全
 十二 會の者どこれを聞る者ども皆大に懼る十二多の休徴と奇なる跡ハ使徒等の
 十三 手に由て民の間に行われたり又かれら皆心を合せてソロモンの廊に在十三
 十四 餘の者ハ敢て之に近づかざりき然れども民ハ彼等を尊み十四男女ども信す
 十五 る者ますます多く主に属ぬ十五斯て人々病る者を携て衢にいで寢床また榻
 十六 の上に置り蓋ペテロの來らん時ハ影に蔭はるる者あらんかと思ふなり
 十六 また許多の人々四方の諸邑より病る者および惡鬼に難されたる者を携

十七 七
 十八 八
 十九 九
 二十 十
 二十一 十一
 二十二 十二
 二十三 十三
 二十四 十四
 二十五 十五
 二十六 十六
 二十七 十七
 二十八 十八

てエルサレムに來り悉く愈されたり^{十七}然るに祭司の長および彼と同一に
 る者即ちサドカイ宗の徒みな起て大に憤り^{十八}使徒等を執て獄に置り^{十九}然
 ども主の使者夜獄の門を啓き彼等を携へ出して曰ける^{二十}往て殿に立こ
 の生命の言を悉く民に語れ^{二十一}かれら之をきく味爽より殿に入て教ふ祭司
 の長および同 人ども來て議員およびイスラエルの子孫の長老等を悉く
 召集て彼等を曳來せんが爲に下吏を獄に遣せり^{二十三}其人等きたりしに獄の
 内に彼等を見ず反て告いひける^{二十四}獄の固と守者も門の外に立るを我
 儕の見しに啓け^{二十五}内に一人をも見ざりき^{二十六}祭司殿司および祭司の長たち
 此言を聞て此の如何に成行べきかと彼等に就て心惑へり^{二十七}或人來り彼等
 に告ける^{二十八}視よ爾曹が獄に置し者^{二十九}今殿に立て民を教ふ^{三十}是に於て殿司
 の下吏等と共に往かれらを曳來れり然と強暴ことを爲ざりき蓋石にて民
 に撃れん事を懼しが故なり^{三十一}既に曳來りて彼等を議員の前に立せ祭司の
 長これに問て曰ける^{三十二}我儕この名に由て教る勿れと爾曹に嚴く禁せし

二十九 九
 三十 十
 三十一 十一
 三十二 十二
 三十三 十三
 三十四 十四
 三十五 十五
 三十六 十六
 三十七 十七
 三十八 十八

に非や然るに爾曹の其教をエルサレムに滿せ又この人の血を我儕に負め
 んとす^{二十九}ペテロと使徒たち答て曰ける^{三十}人に從ふより神に從ふべき
 の事なり^{三十一}我儕の先祖の神の爾曹が木に懸て殺し^{三十二}所のイエスを魅らせ
 給へり^{三十三}神の之を君とし救主として其右の方に擧これイスラエルに悔改
 と罪の赦を予んが爲なり^{三十四}我儕の此事の證を爲者なり神おのれに從ふ者
 小賜ふ所の聖靈も亦證す^{三十五}かの人々これを聞て甚しく怒を含み彼等を
 殺さんと謀る^{三十六}パリサイの人にて衆民の中に尊むる^{三十七}教法師ガマリエル
 と云る者議員の中にたち命じて使徒等を暫く外に出さしめ^{三十八}曰ける^{三十九}イ
 スラエルの人々よ爾曹この人等につきて爲んとする事を自ら慎むべし^{四十}
 ろの曩にチウダ起て自ら誇れり之に從へる者おほよる四百人ありしが彼
 ら殺され從ひし者^{四十一}皆ちらされて跡なきに至る^{四十二}此人の後また戸籍調査
 の時ガリラヤのユダ起て民を誘ひ從ひし^{四十三}が彼も亡び其に從ひし者も悉
 く散されたれ^{四十四}也^{四十五}今われ爾曹に語らん此人々を容て之に係る勿れ若る

三九 三九の謀どころ行ふところ人より出バ必ず亡べし三九もし神より出を爾曹かれ
 四十 らを亡すこと能ず恐く爾曹神に逆らふ者とならん四十彼等これに従ひ使
 徒等を召て鞭ちイエスの名に由て語ることを爲なかれと命じて之を釋せ
 四一 四一 使徒等のイエスの名の爲に辱を受るに足者とせられし事を喜びて
 四二 議員の前を去日々に殿および人の家に於て教をなしイエスキリストの
 福音を傳て止ざりき

二 當時弟子たちの數おほく加りギリシヤ方言のユダヤ人の二 齋等が
 三 日々の施濟に遺漏されしを以てヘブル方言のユダヤ人にむかひ怨言し事
 四 ありけれバ二十二人の者弟子等を召集て曰ける我儕神の道を棄て飲食
 五 善證ある者七人を撰べし我儕を立て此事を司らせん四而して我儕の
 六 常に祈と道を傳ることを務べし五此言すべての人の心に合けれバ信仰
 七 と聖靈の満たるステパノ及ピリポプロコロニカノルテモンバルメナ

六 又ユダヤ教に入シアンテオケのニコラを撰六この人々を使徒等の前に
 七 立しむ使徒たち祈て其上に手を按り七神の道いよゝゝ傳播て弟子等の
 八 數エルサレムに甚しく増り祭司も多く信仰の道に従へり八ステパノ恩
 九 と能力に満て奇なる跡と大なる休徴を民の中に行へり九時にリベルテン
 十 と稱る會堂及びクレチ人アレキサンデリア人キリキヤ人アジア人の諸會
 十一 堂より人々起てステパノと言争ふ十彼等ステパノの智慧と之に由て言と
 十二 ころの靈に敵すること能ず十一遂に人をして誣告しめける我儕かれが言
 十三 を聞しにモーセと神を謗十二たり十二かれら民と長老學者たちの心を動させ
 十四 突然きたりて彼を執へ集議所に曳來り十三妄の證人を立て曰せける十三此人
 十五 聖所と律法を謗十四とを語て止す十四蓋かれ語て此ナザレのイエスの此所
 十六 を毀ち且モーセの我儕に授し所の例を易べしと曰るを我儕聞たれば也十五
 十七 是に於て集議所に坐せる者皆目を注て彼を見しに其面天使の面の如也十六
 十八 是に於て祭司の長いひける十七此事かくの如なる乎十八ステパノ曰ける十八

三 衆兄弟および父等よ聽我らの先祖アブラハム未だカランに住ざる前メ
 四 ソポタミヤに在しとき榮光の神あらはれて 三 彼に曰たまひける、爾の國
 五 を出なんぢの親族を離て我なんぢに示さん所の地に至れ 四 斯てアブラハ
 六 ムカルダヤ人の地を出てカランに住り其父の死しのち神の彼を彼處より
 七 今なんぢらが住どころの此地に移し給へり 五 此地に於り足を踏立るはど
 八 の地をも賜す且かれい未だ子あらざりしに此地を産業として彼と其子孫
 九 に賜んと約束し給へり 六 神如此いひ給へり彼の裔の他の國に旅らん他の
 十 國の人々これを奴隸と爲て四百年の間なやまさん 七 神また云かれらを奴
 十一 隸とする國民を我鞠べし厥後かれら其國を出てこの處に於て我に事んと 八
 十二 また彼に割禮の契約を予へ給へり 斯てアブラハムイサクをうみ 第八日に
 十三 割禮を之に行ふイサクヤコブを生ヤコブ十二の始祖を生 九 始祖たちヨセ
 十四 フを妬これをエジプトに賣り然と神の彼と偕に在て 十 諸の患難の中より
 十五 之を救出しエジプト王パロの前に於て恩寵と智慧とを賜て エジプー及

十一 パロの全家を宰らせ給ふ 十一 茲にエジプトカナンの遍の地に饑饉と大なる
 十二 難あり我儕の先祖たちも食物を獲とを得ざりき 十二 然るにヤコブエジプト
 十三 に穀物ある事を聞て先われらの先祖たちを遣す 十三 再び遣しし時ヨセフの
 十四 の兄弟に識れ且ヨセフの親族パロに明になれり 十四 ヨセフ人を遣して其父
 十五 および凡の家族七十五人を召來しむ 十五 是に於てヤコブエジプトに下れり
 十六 彼も我儕の先祖たちも死たる後 十六 スケムに送れアブラハムが金をもてス
 十七 ケムの父なるエンモルの子孫より買おさし墓に葬られたり 十七 神のアブラ
 十八 ハムに示し給へる約束の期ちかづくに従ひて民蕃衍りてエジプトに多な
 十九 れり 十八 セヨフの事を知らる他の王起るに至りて 十九 彼あしき謀計をもて我
 二十 儕の親族を待ひ我儕の先祖たちを困苦し其嬰孫の活殘ざるやう之を棄さ
 二十一 せんとせり 二十 其時モーセ生て甚美しく三ヶ月のあひだ父の家に育られ 二一
 二十二 棄られし後パロの女これを拾わけ己の子として育たり 二二 モーセ 盡くエ
 二十三 ジプト人の學術を教られ言と行とに才能あり 二三 四十歳に及て其兄弟なる

二四 イスラエルの子孫を顧るの心起れり 一人の宛抑らるる者を見て之を保
 二五 護エジプト人を撃て其仇を報たり 二五 モーセの我手をもて神の彼等を救ん
 二六 どし給ふ事を其兄弟悟ならんと思ひしかど彼等の悟ざりき 二六 次日かれら相
 二七 闘ふと有ければ之に現れて和げ曰ける人々よ爾曹兄弟なるに何故相害
 二七 ふや其友を害ふ者かれを拒却て曰ける誰が爾を立て我儕の有司また
 二八 刑官と爲しや 二八 なんぢ昨日エジプト人を殺し如また我をも殺さんと爲
 二九 か 二九 モーセ此言により逃てミデアンの地に旅人となり彼處に於て二人の
 三〇 子を生り 既に四十年を過し時シナイ山の野に於て主の使者棘の中の火
 三〇 焰の間にてモーセに現る 三〇 モーセ之を見て奇み諦視んとして近れるとき
 三一 主の聲あり云く 三二 我の爾の列祖の神すなわちアブラハムの神イサクの神
 三一 ヤコブの神なりモーセ畏怖き敢て諦視ざりき 三三 主また彼に曰給ひける
 三四 爾の足の履を解あんぢが立る處の聖地なり 三四 我すでにエジプトに在わ
 三四 が民の苦難を見かつ其嘆息を聞これに救んが爲に降り來れ我なんぢを

三五 エジプトへ遣さんと 三五 夫彼らが拒て誰か爾を立て有司また刑官と爲し乎
 三六 ど云し此モーセを神の棘中に現れし使者の手に托て有司また救者として
 三六 遣し給へり 三六 この人エジプトおよび紅海また四十年の間野に於て奇跡
 三七 ど休徴を行ひて彼等を導き出せり 三七 イスラエルの子孫に語て神の爾曹の
 三七 兄弟の中より我ととき一人の預言者を爾曹の爲に起し給ふ可と言し即
 三八 ち此モーセなり 彼野の會に在シナイ山にて己に語れる所の天使また
 三八 我儕の先祖等と偕に在て我儕に授んがため生る道を受し者なり 三九 此人に
 三九 我儕の先祖たちの順ふことを欲す反て之を卻け其心すでにエジプトに返
 四十 り 四十 アロンに曰ける我儕に先つべき神を我儕の爲に造れ蓋われらをエ
 四一 ジプトの地より導き出し彼モーセの如何なりしか知されば也 四二 厥時か
 四二 れら犢を造るの像に犠牲を獻げ己の手の所作を喜べり 四三 是に於て神の彼
 四三 等を顧みずして其天の軍勢を祭るに任せ給へり即ち預言者の書にイスラ
 四三 エルの族よ爾曹の四十年のあひだ野に於て犠牲と祭物を我に獻しや 四三 又

四 いたり男女を曳出して之を獄に付せり 是に於て散されたる者ども徧く往
 五 て福音を宣傳たり 五 ピリポのサマリアの邑に下てキリストの事を彼等に
 六 示す 六 多の人々ピリポの行へる奇なる跡を見聞して心を同らし謹て其語
 七 れる言を聴り七 ろの汚たる鬼大に喊叫て其憑る所の多の人より出また癡
 八 瘋および跛者の人も多く愈されたれば也 八 之に因て此邑に大なる喜あり
 九 き 九 爰にシモンと云る素魔術を行ひ自らを大なる者としてサマリアの民
 十 を駭かしし者あり 十 小より大に至るまで皆謹て彼に聴この人の神の大な
 十一 る能なりと曰り 十一 彼等の謹て之に聴るの久く其魔術に駭かされたるが故
 十二 なり 十二 然ども彼等神の國およびイエスキリストの名につきて福音を宣る
 十三 ビリポを信せしかば男女どもバプテスマを受 十三 シモンも亦信じてバプテ
 十四 スマをうけ常にピリポと偕に在て彼が行ふ所れ奇なる跡と休徴を見て駭
 十五 けり 十四 エルサレムに在る使徒等サマリア已に神れ道を受たりと聞てペテ
 十五 ロとヨハ子を彼處に遣す 十五 この二人の者くたりて彼等が聖靈を受ん爲に

十六 祈れり 十六 蓋かれら唯主イエスの名に入られバプテスマを受し耳にて未だ
 十七 其一人にも聖靈下ざりしに因 十七 この時二人の者手を彼等の上に按けれバ
 十八 彼等聖靈を受たり 十八 使徒たちの手を按るに因て聖靈を予られしを見てシ
 十九 モン金を携來り彼等に曰ける 十九 我手を按てこの者も凡て聖靈を受ん
 二十 爲に此權を我にも予よ 二十 ペテロ彼に曰ける 二十 爾の金の爾と偕に亡よ 爾の
 二十一 神の賜を金にて得んと意り 二十一 爾この事に於て分なく又與なし蓋爾の心
 二十二 神の前に正からず 二十二 故に爾この惡を悔改めて神に祈れ 爾の心の念或の赦
 二十三 れん 二十三 我爾が膽の苦にをり不義の繋に在を見れば也 二十三 シモン答て曰ける
 二十四 爾曹が語れるところ一も我に及ざるや 我爲に主に祈れ 二十五 かれら主の
 二五 道を證し且これを語し後エルサレムへ返往ときサマリア人の諸邑に福音
 二六 を傳たり 二六 主の使者ピリポに語て曰ける 二七 起て南の方に向ひエルサレ
 二七 ムよりガザに下る所の路に往るの路の野なり 二七 かれ起て往りエテラピア
 二七 人すなわちエテラピア人の女王カンダケの大臣なる寺人にて凡て其女王

二八 の財寶を司る者禮拜の爲エルサレムに來し二八の返なるが車の中に坐し
 二九 預言者イザヤの書を讀をれり二九靈ピリポに曰けるい往て此車に就三十ピリ
 三〇 波趨よりて彼が預言者イザヤの書を讀を聞これに曰けるい爾の讀とこ
 三一 ろの事を曉るや三彼いひけるい若われを啓く者なくば如何で曉るとを得
 三二 んや遂に請てピリポを己と前に坐せしむ三三其讀をりし聖書の文の左の如
 三三 し彼の羊の屠場に牽るゝ如く牽れ又羔の其毛を剪者の前にて聲を出さぬ
 三四 が如く其口を開ず三三かれ卑賤に居しとき義 判を奪れたり誰か能うの世
 三五 の狀を述得んや蓋かれの生命地より滅れたれば也三四 寺人ピリポに對いひ
 三六 けるい請われに示せ預言者の誰を指て之を語しや自己を指しか他人を指
 三七 しか三五ピリポをひらき此録されたる所に基きてイエスの福音を彼に宣
 三六 傳ふ三六斯て二人の者路をゆき水ある所に至ければ寺人いひけるい水を見
 三六 よ我バプテスマを受んとす何の礙か有や三七ピリポ曰けるい爾もし全心を
 三六 もて信せば可らん彼こたへて曰けるい我イエスキリストの神の子なりと

三八 信ず三六遂に命じて車を止しめピリポと寺人の二人水お下りピリポバプテ
 三九 スマを彼に施せり三九かれら水より上れるとき主の靈ピリポを引去る寺人
 四〇 また彼を見しを得ざりき寺人喜びて其路を往り四十 偕アシドバにてピリ
 四〇 波に遇る者あり彼すべての邑郷を経て福音を宣傳へカイザリヤに至れり
 四一 **第三章** サウロの猶も兇言と殺氣を吐て主の弟子等をせめ祭司の長に往て
 四二 ニダマスコの諸會堂お寄る書を求む彼の此道お從へる者を見バ男女にか
 四三 ゝはらず捕て之をエルサレムに曳んと意り三彼ゆきてダマスコに近ける
 四四 とき忽ち天より光ありて彼を環照せり四 かれ地に仆る其時サウロサウロ
 四五 何ゆゑ我を窘迫やといふ聲を聞き五サウロ曰けるい主よ爾誰ぞ主いひ
 四六 給けるい我なんぢが窘迫どころのイエスなり爾荆ある鞭を蹴の難し六か
 四七 れ戦き駭きて曰けるい主よ我に何を行しめんと爲給ふや主かれに曰ける
 四七 い起て邑に入さらば爾行べき事を示さるべし七 彼と偕お往る人々言ふと
 四八 能ずして立止り其聲を聞ども誰をも見ざりきハサウロ地より起て眼を啓

九 たるに何も見ざりければ伴へる人等うの手を援てダマスコに入ぬ九かれ
 十 三日の間みえず又飲食をも爲ざりき十斯てダマスコにアナニアと云る一
 十一 人の弟子あり主幻の如彼に曰給ひけるハアナニアよ答けるハ主われ此に
 十二 在^{十一}主いひ給ひけるハ起て直と云る街に往ユダの家に至てタルソの人サ
 十三 ウロといふ者を尋よ彼の祈て居^{十二}且アナニアといふ人きたりて見^{十二}ことを
 十四 得させんがため手を其上に按しと幻に見たれば也^{十三}アナニア答けるハ主
 十五 よ我この人につきて多の人の語るを聞しに彼がエルサレムにて爾の聖徒
 十六 を苦しこと如何ばかり乎^{十四}且この處にても彼は凡て爾の名を願者を捕
 十七 んどて祭司の長より受たる權威を有り^{十五}主いひ給ひけるハ往よ彼の異邦
 十八 人および王とイスラエルの子孫の前に我名を擔しめん爲に我選し器なり
 十九 彼ハ我名の爲に如何ばかりの苦難を受るか我これを彼に示さん^{十七}是に
 二十 於てアナニア往て其家にいり手を彼の上に按て曰けるハ兄弟サウロよ爾
 二十一 の來れる路あて現れし所の主イエス爾が再び見^{二十}ことを得かつ聖靈に満さ

十八 然れん爲に我を遣せり^{十八}忽ち彼の眼より鱗の如もの脱て再び見^{十八}ことを得す
 十九 ないち起てバプテスマを受^{十九}彼すでに食して強健たり斯てサウロの數日
 二十 の間ダマスコにある弟子等と交り^{二十}直に會堂に於てイエスの事を宣て即
 二十一 ち此の神の子なりと言^{二十一}聞者みな駭異て曰けるハ此人ハエルサレムに於
 二十二 て此名を願者を殘害し且^{二十二}こゝに來しも之を捕て祭司の長に曳んとするに
 二十三 非ずや^{二十三}然どもサウロハ益堅固して此イエスのキリストなりと證をなし
 二十四 ダマスコに在る所のユダヤ人を辯折たり^{二十三}既多の目を歴て後ユダヤ人
 二十五 邑の門を守て之を殺さんとせしに^{二十五}夜弟子たち筐をもてサウロを石牆よ
 二十六 り繩下せり^{二十六}サウロハエルサレムに至て弟子たちに列らんと爲たりしに
 二十七 皆かれが弟子たることを信せずして之を懼る^{二十七}バルナバ彼を援て使徒た
 二十八 ちの所に至り其途中にて主を見^{二十八}こと又主の彼に語り給ひしこと及ダマ
 二十九 スコに在て憚らずイエスの名に由て語り^{二十九}ことを告たり^{二十九}彼エルサレムに

二九 在て弟子たちと偕に往來し 三〇 主イエスの名に由て憚らず語かつギリシヤ
三〇 方言のユダヤ人と辯論へり彼等サウロを殺さんと圖る 三十一 然と兄弟たち之
三二 を曉り彼をカイザリヤまで送てタルツに往しめたり 三三 是に於てユダヤガ
三三 リラヤ及サマリヤ中の教會の平安に且成立て主を畏れ事を行ひ聖靈の
三三 勸に因て其數いや増れり 三四 諸ペテロ遍く諸方の地を経てルツダに住る
三三 聖徒の所に至り 三五 の處にて一人の癱瘋を患ひ八年の間床に臥るアイ子
三四 アと名る者に遇 三六 ペテロ彼に曰けるハアイ子アよイエスキリスト爾を愈
三五 す起て爾みづから床を治よ彼たふちに起 三六 ルツダ及サロンに住る凡の
三六 人之を見て主に歸せり 三六 ヨツバに女の弟子ありタビタと名く譯パドル
三六 カス彼の多の善事と施濟を行へる者なりしが 三六 のころ病て死たるによ
三六 り其屍を洗て樓に置り 三六 ヨツパのルツダに近き故に弟子たちペテロの
三六 彼處に在ことをさく二人の者を遣して我儕に來ことを遅する勿れと請し
三九 ペテロ起て彼等と偕に往既に至けれバ人々かれを引て 樓に登る凡

四十 の寡婦たちペテロの側に立て哭泣つゝドルカスが偕に在しとき常に作れ
四十 るところの上衣下衣を彼に示す 四一 ペテロ彼等を悉く外に出し跪きて祈り又屍
四一 に向てタビタ起よと曰ければかの婦眼を啓きペテロを見おきて坐しぬ 四一
四一 ペテロ手を伸て之を起し聖徒および寡婦等を召て此活たるタビタを其前
四一 に立しめたり 四二 此事ヨツバ中にえれ多の人々主を信す 四三 斯てペテロ久く
四三 ヨツバに留りて皮工シモンの家に住る
四三 カイザリヤにイタリヤ隊と稱る組の百夫の長にてコルネリヲと云
四三 る人あり 四三 彼の信心の深き者にて其擧の家族と偕に神を敬ひ民多の施
四三 濟をなし恒に神に祈禱せり 四三 晝の三時ごろ幻の如く神の使者の來りてコ
四三 ルネリヲよと曰るを明かに見 四三 かれ目を注これを見て懼曰けるハ主よ何
四三 事なるや天使かれに曰けるハ爾の祈禱なんぢの施濟すでお上て神の前
四三 記置れたり 四三 いま人をヨツバへ遣しペテロと云シモンを召 四三 彼の皮工シ
四三 モンの所を寓れり其家の海濱あり 四三 コルネリヲお語れる天使さりし後か

八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

八 其僕二人と恒に己に事る信心の深き兵卒を召ハ此事を詳く告てヨツバ
 九 へ遣ひす○九 彼等ゆきて次日その邑に近ける時ペテロ祈禱のため屋上に
 十 升れり時の約り十二時なりし十 甚く餓て食せんと欲しが人の食物を具る
 十一 間に彼氣を喪へる心地して天ひらけ器物は降れるを見る大なる布の如
 十二 く四角を繫て地を垂下されたり十二 其中に凡て地の四足の獸昆蟲および空
 十三 の鳥あり十三 かつ聲ありて彼に曰けるハペテロよ起て之を殺し食せよ十四 べ
 十四 テロ答けるハ主よ可らじ我いまだ穢たる物と潔からざる物を食せしこと
 十五 なし十五 聲ふたゞび有て彼に曰けるハ神の潔たる物を爾潔からずと爲な
 十六 此の如こと三次たゞちに其器物天に上られたり○十七 斯てペテロ其見
 十七 し所の異象ハ如何なる意あらんと疑ひ在し時コルネリヲより遣されたる
 十八 人等すでにシモンの家を訪て門の前に立十八 呼てペテロと稱シモンハ此に
 十九 寓れるや否と問十九 ペテロ猶ろの異象の事を思をりしに靈かれに曰けるハ
 二十 視よ三人の者なんぢを尋ぬ二十 起て下り疑はずして彼等と偕にゆけ我これ

三 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

三 つかはを遣しと也三 ペテロ下て其人たちに曰けるハ我ハ爾曹が尋る所の者なり
 四 爾曹如何なる故ありて来るや三 彼等いひけるハ百夫の長なるコルネリヲ
 五 と云る義かつ神を敬ひ凡のユダヤ人の中に尊べる者なんぢを其家に召
 六 て爾の言を聴と聖使に示されたり三 是に於てペテロ彼等を召入て館しめ
 七 次日ペテロ彼等と偕に出立けるがヨツバの兄弟たちも亦かれに伴へり二四
 八 次日かれらカイザリヤに入るコルネリヲの既に其親族および親き友等を
 九 召集て之を待居たり二五 ペテロの入來れる時コルネリヲ彼を迎へ其足下に
 十 伏て拜り二六 ペテロ之を扶起し曰けるハ起よ我も人なり二七 斯て偕に語つ
 十一 内に入て多の人の集れるを見二八 彼等に曰けるハユダヤ人の異邦人と交り
 十二 又近く事の律に合ざるハ爾曹の知るところ也されと神ハ何の人をも穢たる
 十三 者あるハハ潔からざる者といふ勿と我に示し給へり二九 是故に我請らる
 十四 や直に猶豫ずして來る我なんぢらに問われを請し何の爲なる乎三十 コル
 十五 ネリヲ曰けるハ四日前に我斷食して此時刻に至れり三時をる家に在て祈

三二 禱をりしに嘩ける衣を着たる者わが前に立三二 曰けるハコルチリヲよ爾の
 三三 祈禱の聞れ爾の施濟の神の前に記置れたり三三 然ハ人をヨツバへ遣しペテ
 三四 ロと稱シモンを召かれの海邊にある皮工シモンの家に寓れり彼きたりて
 三五 爾に語るべしと三三 是故に我たち人に人を爾に遣せり爾の來れるハ善われ
 三六 神の爾に命じ給へる一切の言を聽んとて今神の前に在なり〇三四 ペテロ
 三七 口を啓て曰けるハ我まことに神の偏らざる者にして三五 何の國民にても神
 三八 を敬ひ義を行ふ者の其聖旨に適と云ことを悟る三六 道の即ち神のイエ
 三九 スキリストに由て平和を宣イスラエルの子孫に子たまひし所なり此イエ
 四〇 スハ萬物の主たる也三三 夫ヨハ子の宣しバプテスマの後ガリラヤより始り
 四一 ユダヤ中に有し事ハ爾曹が知どころ三六 即ち此ナザレより出たるイエスの
 四二 神より聖靈と才能を以て膏を沃がれ周遊て善事を行ひ凡て惡魔に憑た
 四三 る者を愈せり蓋神彼と偕なりしに因三九 我儕ハ彼ガユダヤ人の地およびエ
 四四 ルサレムに於て行ひし凡の事を證する者なりユダヤ人の此人を木に懸て

四一 殺せり四一 神の第三日に之を甦らせ衆の民に顯さで四一 惟ろの預め選たま
 四二 へる證人すなわち彼が甦りし後これと同一に飲食せし我儕にのみ顯し給へ
 四三 り四二 かつ彼の其生者と死者の審判人に神より定られし事を我儕に證して
 四四 民に宣よと命じたり四三 凡の預言者も凡ろ彼を信する者の其名に由て罪の
 四五 赦を受べしと彼につきて證せり四四 ペテロこの言を語れる間に道を聽とこ
 四六 ろの凡の者に聖靈降り四五 ペテロと偕に來りし割禮ある信者等の聖靈の
 四七 賜の異邦人にまで注げる事を駭きぬ四六 異なる邦々の方言にて彼等が
 四八 語れると神を讚るとを聞たれば也四七 此時ペテロ答けるハ我儕の如く既に
 四九 聖靈を受たる此人々に孰か水を禁じてバプテスマを受ざらしむる者あら
 五〇 ん乎四八 遂に主の名に由てバプテスマを受べき事を彼等に命ず是に於て彼
 五一 等ペテロに數日留らんことを請へり
 五二 使徒等およびユダヤ中に在どころの兄弟すでに異邦人も神の道
 五三 を受たりと聞ニペテロエルサレムに上しとき割禮ある者ども彼と争ひ

四 曰けるいひの爾なんぢの割禮かつれいなき人の家いへに入いりて彼等かれらと同一どういに食たせりあり四 彼テロウの有ありし
 五 始はじめより次第あだいに語かたりて彼等かれらに顯あらはし曰いひけるあり五 我われヨツバの邑まちに在ありて祈いのれるとき
 六 氣きを喪うしなへる心地こころして天てんより四角よすみを繫つりたる大なる布ぬのの如ごとき器うつはの下くだるを見みた
 七 野獸あらしけもの昆蟲はふものおよび空そらの鳥とりありき七 且かつわれにペテロよ起たちて之これを殺ころし食たすべ
 八 しと曰いへる聲こゑを聞きけ我われいひけるあり主あるよ可よらじ穢けがれる物ものと潔きよからざる物もの
 九 未いまだ我わが口くちに入いりしことなし九 聲こゑまた天てんより我われに答こたへて神かみの潔きよたる物ものを爾なんぢ潔きよか
 十 らずと爲するかかれと曰いふ十 此かくの如ごときこと三次みたびつひに各物なべてのものふたゞび天てんに引ひ上あら
 十一 れたり十一 其時そのときに當あたりてカイザリヤより我われに遣つかはせる三人さんにんの者ものわが居ゐるところの
 十二 家いへの前に立たてり十二 又また靈みたまわれに疑うたがはずして彼等かれらと偕ともに往ゆべしと曰いへり且かつこの
 十三 六人ろくにんの兄弟きやうだいも我われと伴ともひ往ゆて其人そのひとの家いへに入いりぬ十三 かれ我われ儕らにつゞ天てんの使者つかひの
 十四 我家わがいへに立たちわれに向むかひて人ひとをヨツバへ遣つかはしペテロと稱いふシモンを迎むかへて其その人ひとな
 十五 んぢ及び爾なんぢの家族かぞくの救すくはるべき言ことを告つげと曰いへるを見みたりと十五 斯かくて我わがかた

十六 始はじめしとき聖靈せいれいはじめに我儕われらに降くだりたり如ごとく彼等かれらにも降くだりたり十六 其時そのときわれ主あるの
 十七 曰いひたまへるヨハ子みづの水みづを以もてバプテスマうけを施なしたれども爾曹なんぢらの聖靈せいれいに由よりて
 十八 巴うテスマを受うけんとの言ことを意おもひたせり十七 既すでに神かみの主あるイエスキリストを信あん
 十九 する所ところの我儕われらに賜たまひし如ごとき賜物たまものを彼等かれらに予あたへば我われいかで神かみに逆さからふこ
 二十 どもを得えんや十八 彼等かれらこの事ことを聞きて答こたふる所ところなく惟ただ神かみを崇あがめていひけるあり實じに然しか
 二十一 らん異邦いはうじん人の生うちを得えん爲ために彼等かれらにも悔くあらため改あらたむを予あたへたる事こと十九 儲たくわへてステパノ
 二十二 に就ついて起おこし苦難くるなんに因より散ちられたる人々ひと旅たびしてピニケクプロ及およびアンテオ
 二十三 ケに至いたりしが惟ただユダヤ人ひとにのみ道みちを語かたり二十 彼等かれらの中にクプロクレ子ひとの人々ひと
 二十四 ありてアンテオケきたに來きり主あるイエスの福音ふくいんを宣のべてギリシヤ人ひとにも語かたりたり三
 二十五 主あるの手て之これと偕ともにあり多おほくの人信ひとあんんじて主あるに歸かへり三 彼等かれらに就ついて其聞そのきこえエルサ
 二十六 レムあるに在あるところの教會けうかいの耳みみに入いりしかば遂ついにバルナバを遣つかはしてアンテオケ
 二十七 に至いたりし三 彼等かれすでに至いたり神かみの恩めぐみを見みて喜よろこび彼等かれらに心こころを堅かたし主あるに屬つか
 二十八 するを勸すすめたり蓋おほかれの善人よきひとにて聖靈せいれいと信仰あんかうの滿みてる者ものなればなり是こゝに於おいて敷あま

二五 多の人主ひとあるに加りぬくはす 二五 偕ともバルナババルナバのサウロサウロを尋たづねんためにタルタルンンに赴おもむき二六 彼かれに遇あひて之これをアンテオケアンテオケに携つれ來きたれり斯かくて彼等かれら一年いちねんの間あひだどもに教會けうかいに集あつりて衆おほくの民たみを教おしふ弟子でしたちのキリステアンキリステアンと稱よなへられしハアンテオケアンテオケより始はじまり二七 このころ數人すにんの預言者よげんしゃエルサレムエルサレムよりアンテオケアンテオケに來きたる二八 中の一人ひとりアガボアガボと名なづくもの起たちて靈みたまにより示あめしけるハ徧あまねく世界せかいに大おほいなる饑饉ききんありらんと其そのこと果はたしてクラウデヲカイザルクラウデヲカイザルの時ときに起おこり二九 是こゝに於おいて弟子でしたち各々おの／＼の力量ちからに從したがひてユダヤユダヤに住すめる所ところの兄弟きやうだいを濟すくん爲ために彼等かれら小物ものを餽おくらんことを定さだめ三〇 遂つひに斯事このことを行おこなふ即すなはちバルナババルナバとサウロサウロの手てを托たくして之これを老長ちやうぢやうに送おくれり

三一 當時そのころヘロデ王わうけうくわい教會うちの中の數人すにんを困苦なやまさんとして彼等かれらを執とらふニかつ刃やいばをもてヨハ子の兄弟きやうだいヤコブヤコブを殺ころせり三二 此事このことのユダヤ人びとの意こころに適かなへて彼かれまたペテロペテロをも執とらふ此時このときハ除酵たれいれぬの節ひなりき三四 既に彼かれを執とらへて獄ひどやにいれ逾すま越こ節のれち民たみの前まへに曳出ひきださんと欲おもひ十六人じふろくにんの兵卒へいそつに之これを守まもらし

六五 めたり五いペテロペテロハ如此かく獄ひどやに守まもられ教會けうかいの之これが爲ために懇切ひたすら神かみに祈いのる六ろくヘロデ彼かれを曳出ひきださんとする前夜まへのよペテロペテロハ二ふたの鍵くさりに繫つながれて二人ふたりの兵卒へいそつの間に睡ねり守者さむらひの門かどの前まへに在ありて其獄そのひどやを守まもれり七 時に主あかの使者つかひ來きたりけれバ光獄ひかりひどやの中に照輝かざやくの使者つかひペテロペテロの脇わきを拊たたくて之これを醒さす速すみかに起おきよと曰いひしに鍵くさりの手てより脱おちたり八 使者つかひかれに曰いひけるハ爾なんぢ帯おびを玄くろ履つを納はけペテロペテロの如ごとく天てん使つかひまた曰いひけるハ爾なんぢの袍ほろを身みに纏まとひて我われに從したがへ九 ペテロペテロ出いでて之これに從したがひしが其その使者つかひの爲ためにこの眞實まことなるを知らず異象まぼろしならんと意おもふ十 斯かくて第一だいいち第二だいにの警固かためを過すて城邑まちに入いる二 鐵門てつもんに至いたり其門そのもんおのづから彼等かれらの爲ために啓ひらく即すなはち出いでて一ひとの衢すぢを徑行すぢゆくとき其使者そのつかひたち忽かち彼かれより離はなれり一二 ペテロペテロ悟さとりて曰いひけるハ我われいま誠まことに知ある主あかの使者つかひを遣つかはしてヘロデヘロデの手てにおよび凡すべてユダヤ人びとの願のぞ望みより我われを拯出すくいだしたまひし事ことを十二 かれ悟さとりて後のちヨハ子ヨハ子名なをマコマコといふ人ひとの母ははなるマリアマリアの家いへに至いたり十三 多おほくの人ひとこゝに集あつまりて祈いのむたり十四 彼かれ等らの聲こゑなるを知あり叩たたける時ときローダローダと名なづく下婢あしもめきたりて之これを窺うかがひしが十四 彼かれ等らの聲こゑなるを知あり

十五 けれバ喜よろこびに堪たへず門もんをも啓ひらかして趨かけ入いペテロの門もんの前に立たつことを告つぐ彼かれ等らローダらに曰いけるら爾なんぢ狂くるり然されども女をんな力ちから言いて我わが言ことの違ちがはずと曰いかれら又また

十六 いひけるら蓋おほペテロの天てんの使つかひ者なり十六ペテロは門もんを叩たたて止やめざりしかバ

十七 彼等かれら門もんを啓ひらきペテロを見みて駭おどけり十七ペテロ手てを揺うかして彼等かれらの聲こゑを鎮おさめしめ

十八 主まの己おのれを獄ひとより引ひ出し給たまひし事ことの狀ありさまを告つげたまは此この事ことをヤコブ及び兄弟あひたち

十九 示あせといひ遂つひに出いで他ほかの處ところへ往ゆけ十八天明あけに及および時ときペテロは如何いかなりし乎や

二十 兵卒へいそどもの中うちにて其その騒さわ擾ぎ容易ひとならざりき十九ヘロデペテロを索たづねども見み

二十一 出いださず遂つひに守卒まもるものたゞし彼等かれらに死罪あざいを命めいず斯かくてヘロデはユダヤよりカイ

二十二 ザリヤは下くだりて止とまれり○二十ヘロデはツロとシドンの者ものに對むかひ甚はなはだしく怒いかりを懷いだき

二十三 然しかレバ彼等かれら心こゝろを合あはせて其所そのに來きたり内侍ないじの臣おんブラストは親睦あはしみをなし之これに託たくて

二十四 平和やほらを求もとむ蓋おほかれらの國くにの王わうの國くにに頼より糧食あゆを獲うべなり三ヘロデはその定さだめ

二十五 たる日ひに於おいて王服わうのを著つけるの位くらに坐まし彼等かれらに對むかひ語かたれり三民聲たみこゑを揚あげ

二十六 けるら此この神かみの聲こゑなり人ひとの聲こゑに非あらず二三ヘロデは榮さかえを神かみに歸かへせざるにより主ま

二四 二の使つかひ者たちに彼かれを撃うちしかバ彼かれの蟲むしの爲ために噬かまされて氣絶いき絶たゆ二四さて神かみの道みちの

二五 益えき廣ひろり二五バルナバ及びサウロは其職そのを成とりてマコは名なるヨハ子こを携もひてエルサレムはより返かへれり

二六 二六アンテオケはの教會けうかいに數人すにんの預言者よげんしやと教師けうしあり即すなはちバルナバ及およ

二七 二七ニゲルはと稱よるらシメランは又またクレ子のルキヤは及び分封わけもちの王きみヘロデはの乳兄弟ちきやうだい

二八 二八マナエンは及およサウロはなりニ彼らかれら主まに事ことを斷食だんじきなせるとき聖靈せいれい曰いけるら我わが

二九 二九ためにバルナバはとサウロはを甄別えらびわけて我わがかれらに命めいせし所ところの事ことを行おこなはしめ

三十 三十よ三はに於おいて斷食だんじきし祈禱いのりをなし手てを二人ふたりの上に按おきて之これを往ゆかしむ四如斯かくこ

三十一 三十一の二人ふたりの聖靈せいれいに遣つかはされてセルキアはに下くだり彼處かそこより舟出ふなしてクプロはに赴おもむけ

三十二 三十二り五彼等かれらサラミスはにつきユダヤ人びとの諸會堂しよくわいどうにおいて神かみの道みちを宣のたまはたまは

三十三 三十三子こを用もちゐて其その幫助たすけとなせり六斯かくて彼等かれら島まの中うちを經へてパポスはに至いたりしとき僞いつはり

三十四 三十四の預言者よげんしやバリエスはと名なる卜筮うらなひをなすユダヤ人びとに遇あふ七この人ひとの國くにの方伯つかさセ

三十五 三十五ルギヲパウロはといふ智人かしこきひとと僭とにあり時ときに方伯つかさバルナバはとサウロはを召よりて神かみ

八 道の聽きかんとを求もとむ 然あかるに彼かのト者らエルマス(此名を譯とべト者ら)二人
 九 の者に敵さかひ方伯つかさをして信あんずると勿なしめんとせり 九サウロ一名なハパウロ聖せい
 十 靈れいに満みたれ目を注とめて彼かれを視み 十曰いけるハ噫あすべての詭譎いつはりと奸惡わるにて盈みるも
 十一 の惡魔あくまの子こすべての義たとの敵てきハ爾主なんぢの直すかる道みちを枉まて止やめる乎か 十二 視みよ主あ
 十二 の手ていま爾なんぢの上うへに在ありなんぢ誓めしとなり暫あく日ひを見みざるべし即すち彼かれの目め瞽かすみくら
 十三 みて己おのれを相あせん者ものを求もとまよへり 十三是こゝに於おいて方伯つかさこの所ありしことを見みて主あの教をし
 十四 を駭おろこし之これを信あんぜり 十三パウロ及おうの從お上ありの人ひとバボスより舟ふ出してバムフリ
 十五 アのペルゲペルに至いたり此處こゝにてヨハ子かハ彼等かれに別わかれてエルサレムエルに歸かへ 十四 彼等
 十六 此こゝより旅たびしてピシデアピシのアンテオケアンに至いたり安息日あんに會堂くわいに入いり坐ざしぬ
 十七 律法りと預言者よげんの書ふを讀よみ畢はりしのち會堂くわいの宰つかたち人ひとを以もて彼等かれに曰いせけ
 十八 るハ人々ひと兄弟あ弟いよ若民もに勸すすむこと有あら 十六パウロ起たちて手てを搖うかいひ曰いけるハ
 十九 スラエルスラの人々ひとおよび神かみを敬うやまふ者ものよ爾曹なんぢ聽きべし 十七 此こイスラエルの民たみの神かみ
 二十 ハ我儕われの先祖せんたちをえらそのたみのエジプトエの地ちに旅やりし時ときこれを育そかつ

十八 勁手つよを以もて彼等かれを彼處かしこより導みちき出いだ 約あ四十年あのあひだ野のにて之これを撫いたき
 十九 養やしなひ又またカナンカの地ちの七族あの民たみを滅ほし其地そのちを彼等かれに嗣つがしめ 二十 後のちおよろ四
 二十 百五十年ひのあひだ即すち預言者よげんサムエルサの時ときまで之これに審士さを興たたまへり
 二十一 三そののち厥その後のちかれら王わうを求もとけれバ四十年あの間あニヤミンニの支派わキスキの子こサウロ
 二十二 を賜あたまへ 後のちまた彼かれを徙うつしダビデダを立て彼等かれの王わうとなし且かつこれが爲ために證あし
 二十三 て曰いたまひけるハ我われエツサイエの子こダビデダと云いへ 我心わがこゝろに合あふ人ひとを得えたり彼
 二十四 ハ凡すべて我旨わがめを行なしむべし 二十三 神かみの其約そのやく東あに從したがひて斯人このひとの裔すより救主すくイエスを
 二十五 イスラエルイスに興おこし給たまへ 二十四 の來きたる前まへにヨハ子ま先まイスラエルイスの凡すの民たみに悔く
 二十六 改あらためバプテスマバを宣傳のべたり 二十五 ヨハ子まの職つとめを行なし時ときいひけるハ爾曹なんぢわ
 二十七 れを誰たれと意おもふや我われの其人そのひとに非あらず我われより後のちに來くる者ものあり我われの其足そのあしの履くつを解とく
 二十八 も足あらざる者ものなり 二十六 人々ひと兄弟あ弟いアブラハムアの子こ孫そんおよび爾曹なんぢのうち神かみを敬うやま
 二十九 ぶ者ものよ此救このすくの道みちを爾曹なんぢに遺おたまへり 二十七 夫それエルサレムエルに住する者ものおよび其有そのつ
 三十 司さたちハキリストキを知あらず彼かれを罪つみに定さだめ 安息日あんとどに讀よむところの預言者よげんの

二八 言を成しめたり二八 かつ殺すべき故を得ざれどもピラトに之を殺さんことを
 二九 を求め二九 已に彼に就て録されたる凡の言を成しめければ之を木より下し
 三〇 て墓に置り三〇 然ども神の之を死より甦らせ給り三〇 多日の間かれのガリラ
 三二 ヤより己と偕にエルサレムに上し者に現れたり今かれの爲に證を民にす
 三三 る者其の人々なり三三 我儕も喜の音を爾曹につぐ神のイエスを甦らせて先
 三三 祖等に立たまひし約束を其子孫たる我儕に成たまへり三三 即ち詩の第二篇
 三四 に爾の我子なり我今日なんぢを生りと録されたるが如し三四 また朽壤に歸
 三五 せざる様に彼を死より甦らす事に就ての如く語り云われダビデに
 三六 約束せし所の頼むべき恵を爾曹に予ふ可と 是故に又はかの篇に爾の其
 三六 聖者を朽果しめずと云り三六 夫ダビデの神の旨に遵ひ其世の爲に勞苦しの
 三七 ち寢て先祖たちと偕に置れ遂に朽果たり三七 然ども神の甦らせ給し者の朽
 三八 果ざりき三八 然る人々兄弟よ此人に由て罪の赦の爾曹に傳れるを知三九 爾曹
 三九 モーセの律法に依て義と爲るゝこと能ざる凡の罪も信する者の皆かれに

四十 由て赦され義とせらるゝ也四十 然る爾曹慎よ恐くの預言者の書に言れたる
 四一 事なんぢらに臨ん四一 曰く藐忽者よ視て駭き且亡よ蓋われ爾曹の日に一の
 四二 事を行ん人これを爾曹に告るとも爾曹信せざる可れば也〇四二 かれら會
 四三 堂を出んとせしとき次の安息日に復この事を宣よと請れたり四三 會すでに
 四四 散じて多のユダヤ人および其教に入し神を敬ふ人々パウロとバルナバに
 四四 從へりパウロとバルナバ彼等に語て恒に神の恩に居ん事を勸む四四 次の安息
 四五 日に至り邑の人々神の道を聽んとて幾と皆集まれり四五 多くの多く集れるを
 四六 見てユダヤ人嫉妬を心に滿せて争辨かつ詬りパウロが言どころを拒めり
 四六 パウロとバルナバ毅然して曰ける夫神の道の必ず先爾曹に告べきな
 四七 り然ども爾曹の之を棄かつ己の永生を受べき者に非ずと自ら定たれば
 四七 我儕轉て異邦人に向ふべし蓋主かく我儕命給へり曰く爾救となり
 四八 て地の極にまで及ばん爲に我なんぢを立て異邦人の光となせり四八 異邦人
 四九 の之をさし喜びて主の道を讚美すべて永生に定られたる者の信せり四九

五十 是に於て主の道あまねく此地に廣りぬ 然るにユダヤ人神を敬ふ貴婦
 等および邑の尊長たる人々の心を動させてパウロとバルナバを窘迫りの
 境より逐出せり 五二人の彼等に對ひ足の塵を打拂ひてイコニオムに至れ
 五二 斯て弟子等の大に喜樂を懷かつ聖靈に盈されたり
 二人の者イコニオムに於て共にユダヤ人の會堂に入て道を傳へ
 二 ユダヤ人及びギリシヤ人を多く信せしめたり 然るに信せざるユダヤ人
 異邦人を唆て其心に兄弟を憾しむ 三 彼等の久しく彼處に留り主に頼て憚
 らず道を傳ふ主また彼等の手に休徴と奇なる跡を行ひしめて其恩の道を
 證せり 四 邑の人々二に分れ或のユダヤ人に與し或の使徒等に與せり 五 斯
 て異邦人ユダヤ人および其有司たち共に擁上かれらを辱しめ石にて撃ん
 六 とす 六 二人のもの之を知てルカオニヤの邑なるルステラデルベ及りの四
 七 周の地に逃れ 七 彼等に於て福音を傳ふ 〇 八 ルステラに一人の足弱もの坐
 九 しるたり彼の生來の跛者にて未だ歩行しとなし 九 此人パウロの語るを聽

十 をりしがパウロ目を注て其愈さるべき信仰あるを視 十 大聲に曰ける 爾
 十一 の足にて正しく立よ彼踊上りて行めり 十一 人々パウロの爲し事を見て聲を揚
 十二 ルカオニヤの方言にて曰ける 諸神人の形にありて我儕に臨れり 十二 彼等
 十三 バルナバをゼウスと稱パウロの専ら説話をする人あるが故にヘルメス
 十四 と之を稱 十三 時に其邑の前にある所のゼウスの祭司犢と花籬を門に携來て
 十五 衆の人と共に犠牲を獻げ彼等を祭んとせり 十四 使徒バルナバパウロ之を聞
 十六 て己が衣を裂はしり出て大衆の中に入 十五 喊叫いひける 人々よ何故に此
 十七 事を行や我儕も亦あんちらと同情をもつ所の人あり爾曹に福音を傳るの
 十八 爾曹をして此虚妄をすて天と地と海および其中の萬物を造り給へる活神
 十九 に歸しめんが爲なり 十六 往にし世に神すべての異邦人に其己が道を行む
 十七 とを容し給しかと 十七 亦あんちらを惠て天より雨を降せ豊穰ある時候を
 十八 たへ糧食と喜樂をもて爾曹の心を満しめ己自ら證せざりし事あし 十八 此言
 十九 を以て苦辛じて衆の人の己等に犠牲を獻んとするを止たり 〇 十九 時にユダ

二一 ヤ人等アンテオケイコニオムより來りて多の人を咬め石をもてパウロを
 二二 擊しめ既に死たりと意ひ邑の外に曳出せり弟子等々の周圍に立るとき
 二三 彼おきて邑にいり次の日バルナバと偕にデルベに往り三斯てろの邑に福
 二四 音を傳へ多の人を弟子となし又ルステライコニオムアンテオケに返り
 二五 三弟子等の心を堅し其常に信仰に居んことを勧め又おほくの艱難を歴て
 二六 我儕が神の國に至る可ことを教ふ三斯て二人のもの教會ごとに長老をえ
 二七 らび斷食と祈禱をあし前より信じをる所の主に之を託たり二四かれら遍く
 二八 ビシテアを経てバムフリアに至り又ベルゲに道を傳てアツタリアに下
 二九 り彼處より舟にてアンテオケに航る此の彼等さきに神の恩に託られ今
 三〇 どげし職を行へんとて出所あり既に至りて教會の人を集め己を助け
 三一 て神の行たまへる凡の事と異邦人のために信仰の門を開き給ひし事を告
 三二 げし三斯て久く弟子等と偕に彼處に止れり
 三三 第二十五章 ヌダヤより下し人々兄弟たちに教けるの若おんぢらモーセの例

二 に從ひて割禮を受ず救ふことを得じ之に由てパウロとバルナバ大
 三 に彼等と争ひ且論せしかば兄弟等この事に就てパウロバルナバ及ろの中
 四 の數人をエルサレムに上せ使徒と長老等に遇しめん事を定む三是に於て
 五 彼等教會の人々に送られ出ピニケおよびサマリアを経て異邦人の神に歸
 六 せし事を具に述すすべての兄弟を大に喜ばしめたり四 彼等エルサレムに至
 七 り教會と使徒および長老たちに接られ己を助けて神の行たまひし凡の事
 八 を告しに五 パリサイ宗の中なる信者數人たちて曰けるの彼等に必ず割禮
 九 を施し且命じてモーセの例を守しむべし六 使徒等および長老たち此事を
 一〇 議ん爲に集れり七 茲に多の論ありしがペテロ起て彼等に曰けるの人々兄
 一一 弟よ久き先に神われを爾曹の中より選び福音の道を我口より異邦人に聽
 一二 せ彼等をして之を彼せしめ給しとの爾曹の知どころ也ハ かつ人の心を知
 一三 たまふ神の我儕に聖靈を賜し如く彼等にも賜て其證をなし九 又信仰をも
 一四 て其心を潔め我儕と彼等の間に分を爲ざりき十 然るに今何故我らの先祖

十一 たちも我儕も負わたりざる軌を弟子等の頸に置いて神を試むる乎 十二 彼等の
 十二 救るゝ如く我儕も主イエスキリストに恩に由て救るゝことを信する也 十二
 十三 是に於て人々みな黙してバルナバとパウロが神に己をもて異邦人中に
 十四 行ひ給へる休徴と奇跡とを述るを聞き 十三 彼等が言畢りし後ヤコブ答て曰
 十五 ける人々兄弟よ我に聞 十四 神初て異邦人を眷顧の中より己が名を崇る
 十六 民を取給ひし事のシモン既に之を述 十五 預言者の言これと符り其書に 十六 此
 十七 後われ反て已に傾圮たるダビデの幕屋を復び起し其破壊の跡を再び造て
 十八 之を建べし 十七 是りの餘の民および凡て我名をもて稱らるゝ異邦人に主を
 十九 尋させん爲かり此すべての事を行ふ神これを言と録されたるが如し 十八 神
 二十 世の始より其すべての所作を知らたまへり 十九 是故に我おもふ異邦人中
 二十一 より神に歸する者を擾すの宜からずと 二十 然ども書を彼等お遺て偶像に汚
 二十二 れたる物と姦淫と勒殺たる物と血とを戒むべし 二十一 古より安息日ごと
 二十三 に會堂にてモーセの書を讀が故に其を宣るもの各邑にあれば也 〇 二十三 是に

二十四 於て使徒および長老たち全會と偕に其中より人を選び之をパウロバルナ
 二十五 バと共にアンテオケに遣さん事を定その選れたる人の兄弟の中の尊者す
 二十六 ないちバルサバと稱るゝユダ及シラスなり 二十三 彼等の手に托て遺し書に
 二十七 云く使徒長老及び兄弟アンテオケスリヤキリキヤに在る異邦人の兄弟
 二十八 に安を問 我儕が命せざるもの我儕の中よりいで言をもて爾曹を擾し爾
 二十九 曹の心を亂たりと聞 二十六 之に由て我儕心を同じし人を選て我儕の愛するバル
 三十 ナバパウロと偕に遣さんと定この二人の我儕の主イエスキリストの名の
 三十一 爲に其命をも愛ざりし者なり 二十七 我儕ユダとシラスを遣し彼等の口より此
 三十二 事を述しめんとす 二十八 蓋聖靈と我儕と左の肝要なるものゝ外は何をも爾曹
 三十三 に任せじと定たり 二十九 即ち偶像に獻し物と血と勒殺たる物と姦淫とを戒む
 三十四 べし若これらの事を爾曹みづから慎まば善ねがいくの爾曹健剛なれ 三十 加
 三十五 れら遣されてアンテオケに至り衆人を集て此書を付す 三十一 衆人これを讀る
 三十六 の勸を受けて喜べり 三十二 ユダとシラスも亦預言者なれば多の言を以て兄弟を

勸め彼等を堅せり三三斯て二人の者暫く彼處に止り後兄弟たちも安然を祝三三
 され其己を遣し者三三の所に送れたり三四パウロとバルナバはアンテオケに
 止り其餘の多の人と共に教をなし主の道を宣傳ふ三五數日の後パウロバ
 ルナバに曰ける我儕さきに主の道を宣し所の諸邑に復ゆきて兄弟の光
 景を率とふべし三六偕バルナバのマコと名るヨハ子を伴いんと欲へり三七然
 どもパウロの曩にバムフリアにて己より離れ役事のため共に往ざりし此
 マコを伴ふの宜らじと意しに因三八遂に二人の中に激論おこり相別てバ
 ルナバのマコを伴ひクプロに航れり三九パウロのシラスを選び兄弟より己
 を主の恩に托られて出立四十スリヤ及びキリキヤを経て諸教會を堅せり
第十七章 斯てパウロのデルベ及ルステラに至れり此にテモテと云る弟
 子あり其母のユダヤの婦にて信者なり其父のギリシヤ人なり一彼のル
 テライコニオムの兄弟より稱を得たり二パウロ之を携て偕に往んとを欲
 其處にをるユダヤ人の爲に彼に割禮を行へり蓋人々皆彼が父のギリシヤ

人なるを知べなり四斯て諸邑をすぎエルサレムにある使徒および長老等
 の定たる條規を守せんとて之を其人々に授く五之に由て諸教會の信仰堅
 なり其數も日々に増ぬ六彼等フルギヤとガラテヤの地を過し時アジア
 に道を傳るとを聖靈に禁られ七遂にムシアに近きピテニアに往んとせし
 がイエスの靈之を許さざりければ八彼等ムシアを経てトロアスに下れり
 九 斯てパウロ夜に於て一人のマケドニヤ人たちて己に請マケドニヤに涉
 て我儕を助よと曰を幻に見たり十彼が幻に之を見し後我ら誠に主の我儕
 をしてマケドニヤ人に福音を宣しめんと我儕を召給ふとを推量て直にマ
 ケドニヤに往んとす十一是に於てトロアスより航海をし眞直にはせてサモ
 トラケに至り其次日テアポリスに往十二彼處よりピリピに至るピリピのマ
 ケドニヤの一分の中なる名ある邑にして即ち殖民地あり我儕數日この
 邑に止れり十三安息日に我儕邑をいで河の濱ある常に祈禱をする處にゆき
 坐して集れる婦女等に語し十四紫布を售ふテアテラの邑の商人にて神を

三七 言遣せり然いひつかは今いまいで安やすら然しかに去ゆけ三三七パウロ彼等かれらに曰いひける我われら儕ら羅馬人びとなる
 三六 罪つみを定さだめして公然おほやけに我われら儕らを杖むちち且かつ獄ひとこやに入いれたり而しかして今いまひろかに出いさん
 三九 爲するか宜よろしからず彼等かれらみづから來きたりて我われら儕らを引つれ出すべし三三八下吏したやくこの言ことを上つか官かま
 四〇 たちに告つげれば彼等かれらの羅馬人びとなるを聞きて懼おそれ來きたりて彼等かれらに此こゝより出いん
 四一 ことを求こひつひに引つれ出して又またうの邑まちを去さらんことを請ねがひたり四四二二人ふたりのもの獄ひとこを
 四二 出いルデアの家いへにいり兄弟等きやうだいたちに遇あひこれに勸すすめをなして出いで去さぬ
 四三 斯かくて彼等かれらのアムビポリス及およびアポロニヤを過すぎてテサロニケテサロニケに至いたる
 四四 此こゝにユダヤ人の會堂くわいどうありニパウロ常つねの如ごとく彼等かれらの中なかにいり三三回安息日みたびあんそくじち
 四五 ぶとに聖書せいしよに本もときて彼等かれらと論ろんじ三三キリストの必かならず苦難くるしみをうけ死あより甦よみがへる
 四六 べき事ことを説とまて我わが汝なんぢらに傳つたふ所ところの此こゝイエスの即すなはちキリストなる事ことを説明と明あか
 四七 せり四四是こゝに於おいて其その中うちの人々ひと々々信ひじてパウロとシラスシラスに従つけ又また神かみを敬うやむギリ
 四八 シヤ人の之これに従つけるも多おほく貴たふときをなす女むすめも少すくなからざりき五五然しかるにユダヤ人びとこれを
 四九 妬ねたみ市井いちをにをる匪類わるものをかたらひ群むれを成なして邑まちを擾さわげパウロとシラスシラスを執とり

六 民たみの前に曳出ひきいさんとしてヤソンの家いへに來きたりしが六六 彼等かれらを見出みいださざりければ
 七 ソン及および數人すにんの兄弟きやうだを邑宰まちづかさの前に曳來ひききたりて大聲おほこゑに曰いひける天下てんかを亂みだす斯者このもの
 八 ども此こゝにまで來きたりセヤソンの之これを迎納むかへいれたり此人々このひと々の皆みなイエスといふ他ほか
 九 の王わうありとて言いひてガイザルの命めいに背そむく者ものなり八八 大衆ひとくと邑まちの宰等つかさたちこれこれを聞きて
 一〇 心を傷いたむ九九 上官つかさのヤソン及および餘ほかの人々ひと々より保狀ほうじやうを取とり之これを釋ゆるせり十
 一一 兄弟きやうだたち夜間よのまに急いそぎパウロとシラスシラスをベレアベレアに去さらしむ彼等かれらかしてして至いたり
 一二 ユダヤ人の會堂くわいどうに往ゆり十一十一 此處このところの人々ひと々のテサロニケテサロニケの者ものより性情せうじやうよきが
 一三 故ゆゑに好このみて道みちをさす此かくの如ごとき果はたして有あるか無なかを知あらんとて日々ひびに聖書せいしよを究さぐり
 一四 是このゆゑ故ゆゑに其その中うちの人ひとおほく之これを信あんず又またギリシヤの貴女たふときをんなおよをび男子おとこの信あん
 一五 じたる者ものも少すくなからざりき十三十三 テサロニケのユダヤ人びとの神かみの言ことのパウロパウロに因より
 一六 てベレアベレアにも傳つたはしを知あり又また彼處あそこに至いたり人々ひと々を擾さわしめたり十四十四 是こゝに於おいて兄弟
 一七 たち直ただちにパウロパウロを海うみに適あはらしむ然しかどもシラスシラスとテモテの尙なほこの處ところに留とどまりぬ
 一八 十五十五 パウロパウロを伴ともひし者ものかれを携たづなへアテンスアテンスに至いたる其人々そのひと々パウロパウロよりシラス

十六 彼等を待る時りの邑こつりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり十七 是故
 十七 彼等を待る時りの邑こつりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり十七 是故
 十八 彼等を待る時りの邑こつりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり十七 是故
 十九 彼等を待る時りの邑こつりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり十七 是故
 二十 彼等を待る時りの邑こつりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり十七 是故
 二十一 彼等を待る時りの邑こつりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり十七 是故
 二十二 彼等を待る時りの邑こつりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり十七 是故
 二十三 彼等を待る時りの邑こつりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり十七 是故

二十四 彼等を待る時りの邑こつりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり十七 是故
 二十五 彼等を待る時りの邑こつりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり十七 是故
 二十六 彼等を待る時りの邑こつりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり十七 是故
 二十七 彼等を待る時りの邑こつりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり十七 是故
 二十八 彼等を待る時りの邑こつりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり十七 是故
 二十九 彼等を待る時りの邑こつりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり十七 是故
 三十 彼等を待る時りの邑こつりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり十七 是故
 三十一 彼等を待る時りの邑こつりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり十七 是故
 三十二 彼等を待る時りの邑こつりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり十七 是故
 三十三 彼等を待る時りの邑こつりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり十七 是故